

さまく、またくひあし。

山をせのももち此あるうとけれとしをまも露も色はこへあむ

前中納言定家

駒駐 葉形立田紅葉は似て青し、秋乃紅葉をくれてよく、見る人足茂とめ駒をむりへて詠めせしやと見事ありとそ。又川茂もさらんとをる人紅葉の散る木の下は駒をむりへてありめせしともいへり。

古今立田川ももちみされてなりふめりこさりのみくき中やさへかん

よ三人あらに

綾蘭笠 葉形ちひさく色くろこあり、笠と里山といふをもちよよくよて、出葉こうを白くもふき、葉形あ得らく常よなりめあり、秋の本紅うを紅黄うさんいろさほくあり。

みむは山紅葉ちりしをたむ人のまきのわきまにきをむりく

藤 伊 家

し此ぶ 葉かおふあう枝垂よよく似て、出葉をうた此色うつくしを、異名茂るよみち此く共いふ、まちのくのあふをちまりの心よてし乃ぶとい

ふり夏むらさきとあわり、秋まら紅葉いろくなり。

初あくまきのふ此山のをもち葉をゆくぬ々とをそめすや有らん

七條院大納言

名取川 葉形やそく葉のきれ多く、葉の敷えけく、出葉よりうつまりと、夏はよほと薄柿のことくをいやあまよまよまよ断乃詠よされり、秋の紅葉随分見事あり。

名と里川を瀬の波もさこくありをもちやいと、よりにてせくかん

源 重 之

穂鳳 葉形大きく、るりもち、れありて、異形なるをふり、青くして常盤のまとし、秋も紅葉あく、落葉の時分少し色をへてとくちる。

紅葉その色よほりせてぞたこ木のかさようけはふ秋の山あ記

権大夫公繼

内ゆかし 葉形よく、切込ふりく、小さきまあり、色をよ紅よして、夏もむらさきたとかこり、秋の紅葉随分よし、是より後の色そゆあしきと、前關白の歌、たく山よちしやの紅葉色よまた都乃あをれい、そむらむ



土御門院

幾染 八しほもみち此實生よて葉形ちいさく出葉くまなひ枝をそくく  
あされ葉あぐ付木ふりあゆらく々不斷の詠め幾し母のかきりあく珍賞  
をるし秋の色猶よし。

い々あ母そ露も時雨をくまあるの色こたまでよ染もみし葉

爲 明 卿

うつら此羽 葉形よし出葉あやまかき色外の楓よかきりさるひ鶉の羽の  
色よ似たりとて名付さるる猶又薄柿と黄色をよあう此そめけまよあ  
る事其鳥の羽よ似さるるあり。

鶉取くあさ野よをてるうをももちちらぬはかりや秋風そ帯く

前 參 議 親 隆

小雨乃錦 葉形ちいさく數多くけきて出葉より青し高雄楓乃葉よ似たり。  
秋の紅葉さほくなる事百い詠のよと茂染なせり  
色あこた山雲時雨のかきくもり帯るよもてはひ紅葉ありけり

梶 井 宮

七夕 葉形細かりく切込ふりく極て七つよ切をあしをるとてたなはると  
よへともぞして定りも取く八九葉よ出る事も有る色春より紫秋紅葉もよし  
まよ花はる天乃河原よ秋立多をみちをわさ波のうたはし

安 嘉 門 院 四 條

手染の糸 葉形ちいさく切込多く葉數あけく付てあゆらしく枝をそくあ  
けり不斷の詠めあり出葉より秋まで青し紅葉又さまく此色を染なせり  
くれなるのころめの原此むら時雨山乃みく毒茂をらぬ日そあき

隆 裕

鹿毛織錦 葉形よく出葉よわあやまき色あれぞ鹿毛といふさるる夏  
程の黒柿い詠とかきり秋の紅葉あゐてひなり

大 納 言 基 家 卿

もみちの品貞享元祿のころのやしほ十二むとへ野むらなとて其數十種  
よさらば其後實生よかきり出て六々の品わらふ品數のおろたせて歌仙



楓と名付し、世上は時行もてあそひとなる。猶年々は變葉出來、其上御用より、唐土より渡り來るからもち、ゆゑに諸國より葉かこりといふ、多來るもの集植して百種は満てり。楓葉百種の古歌、茂よせて、百人一首とよふ、誠に春は餘寒の頃よりやし、母干あほの枝を染、花を先立て葉茂むらき、早春はなりめ百色の品、葉形乃夷類、夏は又若芽あけりて、形状各別の模様を見せ、秋はしみちの春よして時雨乃細工、諸花も及ふまし。不斷のなりめ、庭圃のあざり、是茂植ずしていけきの木を賞せし。愚老本家のあざりは、隠居屈膝を設けせれとも、是をてりさくて、軒のまはりは楓種多く、蒔ちらし、ちさき小苗は接木す。千代萬歳の時なるり、取、武江の富家千萬町の遊人方、飛鳥山の花見歸り、野遊ひの戻り、立寄、葉形好物、あそひとめてりへりぬ。又の諸國より聞及ひ、參府の方々あつらへ、折節の便り、駕乗物の前は置、のりも此、脇付歩人は荷擔せて、せとめ、すかじり給ふ。宜成るり、を隱老、薪茶の勞は代るものとして、清天良辰に、尺圃は出、杖をさて、念珠の杖を預け置、樹下焚て目の毒のさきけり、むさもの接も、むたもの賣、日々はゆゑ、日ニ賣、天なふるあ葉を見る内もつゝとて、むさもの、落葉まで接ぬ。

實生百種の變葉あれ、似る葉形も侍れとも、多年吟味して名をよせ、さきも、葉のまこりのさきさきといろく、此品有り。青葉と云とも、青漆綠青とる茶、青茶うるこ色有り。紅は薄紅、濃紅、朱紅、丹紅、黄も、紅、紫は薄紫、濃むらさき、紫も、紫有り。春出葉の色あこり、繪りくは、畫工も筆をあやむる。又秋は紅葉をや、心をとめてなりむるよ一つ、よかこるる。諸國遠境まで通用有り、糸あふらく、町賣荷うりの植木屋まで、名と木と相違なからん事茂。

東武江北染井

華木 花肆

伊藤 伊兵清

百楓 集者

楓葉軒隱居 樹久○印ニ政武ト有リ

元文丁巳年○二 時雨紅葉良日

—— 百色紅葉集

〔附記、二〕 藝家

藝家 附記、二

都會ノ成立、園庭ノ開創ト共ニ、漸ク種藝ヲ業トスル者ヲ出シタル如キモ、今其初ヲ詳カニセズ。後庭圃ニ花卉購買ヲ目的トシテ來觀スル者ヲ延キ、一種ノ遊園狀ヲ呈シ、遂ニ將軍家ノ通過ヲ見ルニ至ル。貞享四年ノ江戸鹿子、

植木や

霸都時代ノ遊園



下谷池のまゝ。京橋長崎町廣小路。神明前三島町。駒込ぞめい。四谷傳馬町。

其外方々ニ有といへとも不計也。

ト記スヲ觀レバ、當時ハ下谷池ノ端、長崎町廣小路、神明前三島町、駒込染井、四谷傳馬町等、重ナル種藝者ノ所在地ナリシ者ノ如シ。其後染井及其附近ノ植木屋最モ著ハル。

游蘇迷分韻行字。

城北看花乘晚晴。不堪吟罷坐吹笙。與酣何識遊人盡。又向彩雲深處行。

——徂徠集

染井村躑躅花

映山照水帶薰風。珠琲玲瓏鬪紫紅。往日唯聞羊躑躅。今驚異種百般濃。

——儼塾集○寶永四年。

千駄木藝家伊兵衛所藏一通

甲寅三月十七日赴淺嘉山歸路、入染井賣花店見花

固蓄深根貯衆芳。萬般異種不尋常。紺青綠碧世間少。紫白紅黃日晷長。朝霧紛紛

霞織錦。春風陣陣雨含香。培栽定有澆花井。行客休言靜裡忙。

從五位下守大學頭 林 信 充

——武州文書

上駒込村○武藏國北豐島郡○中略。

神明社 社地七百七十五坪ハ、昔土人高木將監ト云者ノ林園ニテ、其内ニ當社鎮坐、其年代ヲ傳ヘス。○中略。別當大泉院松光山千壽寺ト稱ス。本山修驗氷川別當大乘院配下。○中略。百年前村民將監カ計ニテ別當トナル。世々本郷長學院ヨリ兼帶ス。○中略。舊家者五平治○高木氏先祖ヲ高木將監ト云、慶長ノ頃、村ヲ開キテ此所ニ世々住ス。將監寛文十二年十月二十八日死ス。藝家伊兵衛名附。十二先祖伊藤伊兵衛此所ニ住シ、萬治元年三月廿八日死ス。子孫伊兵衛政武カ時、享保十二年三月廿一日有徳院殿經過セラル。松平能登守、松下專助等從ヒ奉ル。巳刻將軍東門ヨリ成ラセラレ、花壇植溜ヲ御覽セラレ、午刻後西門ヨリ還御ナリ。此時御用木ヲ命セラレシモノ二十九種、霧嶋二、阿蘭陀躑躅一、接分楓三、草花籠植十七、野田藤、白山吹一、山杏二、櫻川躑躅一、又政武獻物三星岩蘭一、野田藤一、唐橘一、明ル廿二日政武ニ銀三枚ヲ賜ハリ、且命ヲ蒙リテ、四月廿五日



御臺所口ニ參リケレハ、松下專助命ヲ舍テ舶來ノ樹ヲ示シ、コノ樹他ニモ亦有所ナリヤト問ハレケル。未見ノ由申ケレハ、近似タルモノハナキヤト問ハレケル時、俗ニ深山楓ト稱スルモノ近シト申ケレハ、折枝ヲ呈セヨトノ事ニテ、一朶ヲ獻シケリ。同廿九日又命アリテ一本ヲ召サレ、又實ノ形狀ヲモ書テ奉ルヘシトナリ。五月二日一本ノ深山楓ヲ盆ニ移シ、前ニ實ノ付タル折枝ヲ添テ吹上御庭ニ至テ獻ス。其年九月二十二日松下專助カ宅ニテ内命ヲ傳ヘ、曩ニ奉シ深山楓ニ舶來ノ楓樹ヲ接木セラレテ下シ賜ヒ、此樹奇珍ナリ、生育シテ種ヲ世上ニ廣メヨト命セラレ。此樹今廻リ一丈二尺餘ノ大木トナル。マタ今人ノ庭際ニ栽スル所ノ紅躑躅ノ俗ニ霧島ト稱スルモノハ、モト薩州霧島山ノ産ナリ。正保中ニ始テ其五種ノ木ヲ浪華ニ輸ス。士山鱗角面向無三唐松ト號ス。内二種ヲ京師ニ留メ、面向無三唐松ノ三種ハ、江戸ニ送レリ。依テ政武カ父祖是ヲ傳テ今猶圃中ニ古木殘レリ。江戸ノ人家ニ植戸ニ培スルモノモハ、コレニヨレリト云。政武ハ天性奇異ノ老圃ニテ翻紅軒ト號セリ。自畫ノ三軸アリ。中ハ神農ノ像ニテ、左右ニハ草木ノ形狀ヲ數多寫ス。筆意古雅ニ見ユ。中ノ裏書ニ曰、木者陽而有形、四時枝間茂林而滿花枝、年舊成、大木者、可隱象

良材爲屋寶一之寶也。器財之具爲萬寶、薪炭用爲長寶、鉢木微少、而成薪、而代三國、不宜乎。花詠玉外復寶也。雖高山遠樹、花開無隱、足近詠。樂界之花木七重寶樹、法尾之視曼陀羅、今衆愛植、段接云者有一木七七種、數開百花、苦界而樂界之秀寶樹、今是一百五十有餘之花木畫圖、而以曰花木曼陀羅、按或禽鳥知山林樂、不知人之樂、從薩埵之教、知樂、而不知薩埵之樂。其樂垢界之樂、萬花樂界之七重之不知美成而吐井蛙之口、擢拔舌之罪再拜。又左幅ノ裏書ニ、草者隱而無形、常陽春萌出而夏秋爲榮花、而以冬枯凋根、強上乎而其種生生不盡、事爲天地共三皇之草、今其莖葉不皆而以開花人者有詠程、而後之人又詠古曰珍花者曰舊前人。古云花今人曰珍花、今舊云捨花後人新見、而以曰珍花、萬治寬文來花中絕、而今出者如而衆舉珍珍舊詠歌テ五十年後人復可歌止、而不言蓋中將法尼曼陀羅華曼珠沙華寶蓮華等靈花品、色染井殿ノ法水以清染、而視垢界者不宜乎。今是萬花出生、染井水以濁我染、拙筆而以曰草花曼陀羅。政武所著草木ノ書多シ。地錦抄草花繪百圖等ハ既ニ梓ニ上テ世ニ行ハル。又大學頭林信充ノ詩佐々木玄龍カ翻紅軒ノ額字、并添書アリ。此餘御遊ノ時經歷セラレ、モノ、享保十三年三月花屋紋三郎七郎右衛門、次郎兵衛寶曆四年二月小右衛門、重兵衛、中ニ



モ小右衛門カ亭ニハ、近年御腰ヲ掛ラル、事モアリ。寶曆六年二月源右衛門。安永八年五月八左衛門。天明三年二月清五郎。三月忠五郎。七年五三郎。此後此地御遊ノ時ハ、御腰ヲ掛サセラル、ヲ定例トス。八年次郎兵衛。寛政五年二月茂右衛門等ナリ。文化十二年五月十六日近衛左府基前公此地遊覽ノ時、憩息アリ、物ヲ捧テ、公ヨリモ賜物アリ。享和二年久米藏、是モ左府遊覽セラル。文化三年三月三次郎、其餘植木屋ト稱スルモノ、庄八寶曆年間ヨリ遊歴セラレ、御腰ヲ掛ラレ、シ事モ度々ニ及フ。寛政十年正月七郎左衛門。十一年與兵衛。文化元年九月太郎吉。七年太右衛門。次左衛門。文政二年九月喜八。七年九月庄次郎等ナリ。

——新編武藏風土記稿

○上 藤堂泉州のすゑよ、入込て山莊を有。小身を有。尋行道をせよ。杜鵑花今さありの家有。是をん躑躅や猪兵衛とて、江北の木商なり。其初めの藤堂大學頭高久の露除の男成しよ、大學頭草花の類當座よ移し持させ、花過をの悉くぬき捨させたるを、此伊兵衛植と先なるより、次第くよきり島つ、じ、百椿、杜芍、さぐぬ花の木、百竹、百楓、百櫻など、すけばあつまる所成をし。立寄てみまをしかりしかども、いまと隙おしき最中ゆへ、すぐに大原町の稻荷小路よ

出で。○下

——東都紀行○享保四年

染飯 巢鴨の北に在。花木を作て賣者多し。植木屋伊兵衛と云者、尤大家也。つゝじさつき甚多し。

——江府名勝志○享保十八年

染井躑躅 名木よあつて植木屋伊兵衛と云者は、じさつたを多く造ル。江府へうり出ス所のは、じさつきの、多く此邊より出ル。其外賣樹木おほくあり。

——江戸砂子

染井、上駒込の小名也。藤堂和泉守下屋敷の前より西、藝植家あまゝあり。中よも伊兵衛といへるも、此、今の零落せれと、享保比比と又あき植木屋にて、都下よて、花草を愛するも、此必ずに染井へいさり購求せしと、今庭ニある唐楓といへる樹と、享保中おほくより賜ひし所也とて、今に珍重せり。常此楓との異よして、銀杏の樹ニ似たり。

——三倉一覽

染井の植木屋伊兵衛がもとに、享保の頃拜領せしといふ躑躅の大きなるが、三本あり。面向無三唐松といふ木なり。其のち尋ね見れば、其木もいづちゆきけんみえず。伊兵衛は地錦抄つくりしものなりしが、子孫おとろへて植木もすくなし。花屋十軒の内小左衛門、八五郎などが植木よろしくありしが、是ま



た久しくみさればいか、にや。  
地錦抄の外に長生花林抄といふあり。つゝ、じのこと計書しものなり。淺草御藏前のさうし見世にて半本をみし事ありき。

——奴師勞之月○文化十年四月ノ序有り。

一、駒込染井植木屋喜八方、昔織田信長公此秘藏し玉ひしと云御物の石燈籠あり。高サ八尺餘、火袋八角にして、六地藏を彫刻せり。此時代、地藏を彫付ル事天行しと見へたり。其恰好、花川戸入口の角、建し燈籠に似たり。但し偽物にやあるべからず。

一、染井植木屋伊兵衛方、むろし有徳尊君の領ヶ置玉ひしといふ佛生國の沙羅双樹といえる物有。今、枝葉繁茂して存せり。往昔二千有餘年の昔、釋尊二月十五日入滅し給ふ事を、天地神祇とも悉く察し、此沙羅双樹四株、兼てか自然、生じ、高サ數十丈上にいありて、枝とくくと組合せ、葉とくといかさ取ひ合て、更、地上へ雨露、下さに、廣さ百餘間、佛世尊此清淨地にして入滅し玉ふとかや。此樹の種稀、東土、渡りしやらん、日本、實生して末法の今眼前に成木をみる事不思議と云べし。今植木屋伊兵衛の名、昔に替らず家

名を相續すといへども、内證は賣渡して、今宇平治と云者相續せり。○文化九年頃稿。

——遊歴雜記

享保の初年華舶一種の奇木を齎し來り、官府、貢を、奇特の良品也と云、染井の種樹家花屋伊兵衛を託し、のり台命を下し給ひ、接木せしめ給ふ。然るも未嘗知、奇樹をれむ、遂巡し、多決せざるし、熟その木の太山楓といふもの、似あるを以て、これを官園、移し、砦として以て接立、なれ、一樹をか、を生、育して欣榮を、後十二年、ひろく世に蕃殖せしめんと、一株を伊兵衛に賜ふ。今其家、存して既數、及へると云、亦榕椿と、古白花山茶を珍玩せし頃、山茶の中より一種の變葉を生、其狀、拘骨の如く、大鋸齒あり、依て榕山茶と名付く。今其種、世上、往々是あり。元彼家より産を、と云、因、伊兵衛の地錦抄の作者也、され、培やし、あひ、長し、今子孫、傳へて、此道を盛、せり。○拜領と、うかえで、むらつきつむきヲ圖シ、六代目伊兵衛寫下署ス。

——草木奇品家雅見○文政七年。

〔參考〕草木奇品家雅見、伊兵衛ノ外、染井藝家ヲ擧グルコト左ノ如シ。

染井庄之助、小右衛門○伊藤氏、五三郎○伊藤氏、源右門衛○伊藤氏、重兵衛○伊藤氏、茂右衛門○伊藤氏、紋三郎○伊藤氏、八左衛門○伊藤氏、三治○伊藤氏。



又同書撰輯補助者トシテ「染井花屋源二」ト署ス。

第六十七

染井 植木屋仁平治

くちあしのいはねバこそあれ山吹の我大君の袖の香ぞする

此歌の一とせ吉宗公川。○德瀧の川へ成せられ、還御の砌、ころしも彌生の半にて、染井の植木やへいろくの花御座候と、御近習の申上げれば、則植木屋仁平治方へ被爲入候ひしに、誠に萬花咲みたれ甚だ盛りありければ、庭の内そここ、と逍遙させ給ひ、花いと多き中に八重山吹の在しが、花のかたち一入美しく見へたるを、しべの所を御手にのせられ、是の珍々しき山吹あり、大ふさある花のかたち牡丹におさく、劣るましと興し給ひ、仁平治を召、其方商賣との言ながら、手入念を入候故、いつれの花もうるのしく、別て此山吹のいと見事なりとの仰にて、しばたく花の事なと問のせられ、賞美の御詞ありて、還御後白銀三枚を被下たり。仁平治大に難有奉存、家内の者の言に及ばず、近所の者どもへ吹聴し、斯く難有御恵み、此山吹の御手にふれさせ給ひしかたの、あやかりものなり、花も心あはばさぞ恐悦すべし、されども物いはねバ嬉しとも難有しともいぬの本意なき事なり。口なしなれば是非もなしと

の五文字面白し、山吹の口なし衣あつと、よみたる古歌多し。とかく山吹を詠るに口なしと言かくれば手に葉付ものなり。此歌山吹によく叶ひたり、いはねバこそあれといふに、いはねのこそあれ岩つ、しの心ありて、御手にふれさせ給ふゆへ、外の山吹にも君の御袖の香のうつりていと目出たしと、花に心を持たる趣向いとやさし。

——歌俳百人撰

櫻草立春より七 戸田の原 戸田の川上 添たる原。千住染井植木屋、巢鴨植木屋、其餘所々。

近來紅白數品あり、益々移して都下に商ふ、價尤貴し。

躑躅霧島 立夏の頃より、杜鵑花よ。○中 染井植木屋の内、所々あり。當所を伊藤伊兵衛か庭中、面、向無三唐松とて、名木ありしと云ん。

芍薬の頃。○中 染井植木屋。

菊立冬より四 巢鴨染井邊植木屋園中。

紅楓立冬より。○中 染井植木屋 伊兵衛。百種の楓、後歌仙三十六種、新種二十八種、以上百種となる。よりて百人一首とをいふ。此伊兵衛を先祖隠居して詳ふり。○下略。いへる者、元文丁巳の年歌仙楓といへる書を顯し、悉く圖を出して詳ふり。○下略。

——東都歳事記

躑躅 きりしは さつき



染井植木屋 駒込通りのさた傳中松平甲州侯の御別館の脇を左りへ曲り  
行と數軒の植木屋あり。

此○正 年間記事

染井植木屋伊兵衛、霧島躑躅を多く育す。前に記せる面向無三唐松といへる名  
抄、百種の楓を集め、其圖を撰刻し、また地錦抄、長生花林  
抄、本草花蒔繪等の編集あり梓にえりて世に行はる。

此○享 年間記事

染井植木屋伊兵衛百種の楓を養ふ。

—— 武江年表

上駒込村 ○武藏國北豊  
鳥郡 ○中略。

物産 種樹五万  
株。

民業 毎戸農事ニ服シ、其間ニ種樹ヲ業トス。

—— 東京府村誌

此外享保五年九月始テ櫻樹ヲ飛鳥山ニ栽スルニ際シ、伊藤伊兵衛城内吹上ノ  
櫻苗木二百七十本ヲ移シテ同月七日ヨリ九日マデニ之ヲ栽エタルコト、同十  
二年三月將軍世子家重○德伊兵衛ノ庭園ヲ經過シタルコト等、上文記ス所ノ  
如シ。文化十一年ノきくきけんぶつちりみちひとりあんあいニハ、上駒込村内  
染井傳中、妙儀坂其他ニ、伊兵衛○伊藤氏五三郎○伊藤氏七郎衛門、普右衛門、治兵衛、紋三

郎○伊藤氏吉左衛門、重兵衛○伊藤氏源右衛門○伊藤氏小衛門○伊藤氏由五郎、茂右衛門○丹羽氏、谷  
五郎、久米藏○丹羽氏留二郎○伊藤氏花仙亭○伊藤氏政二郎○伊藤氏喜八○高木氏善太郎、金藏、妙儀亭○井市  
郎兵衛五兵衛、與市○田中氏太郎、吉藤○伊藤氏喜兵衛○高木氏久八○高木氏庄八○高木氏半右衛門、政藏、  
金右衛門、安五郎、五平治○高木氏等在リタルコト見エ、文久元年ノ菊比壽道あるべ  
ニハ、ぬじうら五平次○高木氏傳中半右衛門、同所庄八○高木氏同所安太郎、同所今右衛  
門、同所久八○高木氏同所喜兵衛○高木氏染井善太郎、同所喜八○高木氏同所政治郎○伊藤氏同  
所留二郎○伊藤氏同所久米藏○丹羽氏同所金五郎、同所茂右衛門○丹羽氏同所由五郎、同所  
小右衛門○伊藤氏同所源右衛門○伊藤氏同所重兵衛○伊藤氏同所紋三郎○伊藤氏同所次兵衛  
○伊藤氏次郎兵衛○伊藤氏同所普右衛門、同所伊兵衛○伊藤氏ト見ユルコト下ニ記ス。中ニ就テ伊  
藤伊兵衛ナル者、夙ニ其名ヲ知ラル。染井西福寺境内稻荷石像、表ニ「染井村稻荷  
大明神本地」裏ニ「延寶二年二月吉日、伊藤伊兵衛妻まつ、西福寺祐心造立」ト有リ。  
同寺墓地ニハ、伊藤氏伊兵衛ノ墓石九基、

一基 ○文字磨滅、僅ニ「三月廿五日」ノ字ヲ見ル。

一基 ○文字磨滅、側面ニ「施主伊兵衛」ト有リ。

妙雲信女 元祿四辛巳年十一月十八日

樂芳明照信士 文久二戊八月  
誓願妙音信女



即 到 永 心 信 士 寶 曆 六 丙 子 十 一 月 廿 八 日  
 樹 仙 淨 觀 信 士 寶 曆 七 丑 年 十 月 二 日  
 春 山 證 覺 信 士 享 和 元 年 辛 酉 正 月 三 日  
 春 悟 妙 鏡 信 女 弘 化 二 乙 巳 正 月 十 八 日  
 松 室 貞 壽 信 女 明 治 十 四 年 七 月 〇 日  
 隨 行 玉 輪 信 女 文 久 壬 戌 年 八 月 二 日 九 代 目 伊 兵 衛 娘  
 梅 室 心 鏡 信 女 明 治 九 年 一 月 卅 日  
 芳 安 全 明 信 士 十 一 代 目 夫 清 水 安 太 郎  
 眞 鏡 妙 照 信 女 明 治 十 六 年 十 月 廿 四 日 九 代 目 伊 兵 衛 娘 か ね  
 秀 善 童 子 明 治 三 十 七 年 十 二 月 一 日  
 曉 雲 晴 信 士 大 正 六 年 三 月 廿 二 日  
 清 春 梅 照 信 士 明 治 十 四 年 二 月 十 六 日  
 誓 心 教 順 信 士 大 正 八 年 三 月 二 日

有リ。内樹仙淨觀信士ト識ス者、樹仙ノ法號ヨリ推シテ或ハ伊兵衛政武號楓樹軒樹久其人歟トモ思ハルレド、元祿五年ノ錦繡枕五卷、○享保十八年改題長生花林抄四十二年ノ草木繪全集三冊、寶永七年ノ増補地錦抄八冊、享保四年ノ廣益地錦抄八冊同十八年ノ地錦抄附録、元文二年ノ百色紅葉集、皆其手ニ成リシヤ否ヤハ明カ

ナラズ。元祿七年ノ花壇地錦抄著者三之丞亦其事蹟詳カナラズ。恐クハ伊兵衛ノ前代若クハ其族人ニ非ザル歟。同ジク伊藤氏ニ紋三郎、小右衛門、重兵衛、源右衛門、八左衛門、五三郎等有リ、何レモ庭園ニ將軍ノ通過有リタルコト、上記ノ如シ。就中小右衛門ハ、本丸御用ヲ勤メ、又紀伊家ノ出入タリ。本丸御用ヲ勤メシ者、小右衛門ノ外三川島ニ小宮氏有リ。其他何レモ諸侯旗下ノ士數家ヲ常得意トスルガ例也。伊藤錠之助○小右衛門後先祖書ニ、

證 入 壽 法 居 士 貞 享 二 己 丑 年 十 一 月 十 三 日 元 祖  
 妙 覺 禪 定 尼 寬 文 二 壬 寅 年 十 一 月 十 三 日 妻  
 林 覺 道 性 信 士 享 保 二 己 酉 年 六 月 廿 二 日 二 代 目  
 林 空 妙 榮 信 女 元 祿 六 癸 酉 年 六 月 廿 九 日 妻 (○中略)  
 玉 林 光 輝 庭 翁 信 士 天 保 五 年 卯 年 九 月 十 二 日 六 代 目  
 廣 林 芳 薰 妙 壽 信 女 弘 化 二 乙 巳 年 十 一 月 廿 四 日 妻 (○下略)

ト見エ、六代目小右衛門殊ニ敏腕家ナリト傳フル由ナレバ、其本丸御用ヲ勤ムル或ハ此ノ時ヨリセルニ非ザル歟。伊藤氏以外ニ於テ、將軍通過ヲ見タル者、新編武藏風土記稿傳フル所ニ、茂右衛門有リ、久米藏有リ、皆丹羽ヲ氏トス。久米藏ハ、後石菖ノ培養ヲ以テ知ラル。又庄



八喜八、庄次郎、皆將軍ノ通過有リタル者、共ニ高木氏ヲ稱ス。舊家五平次同ジク高木ヲ氏トシ、種藝ヲ業トス。

一、慶長乃比、元祖高木將監尉此所ニ居ニ。其比ハ、名ヨシアフ、武藏野ヨテ、竹木も自由なク、下リ材木此ニヨテ家作をなし、初テ田畑を開發して、農行を事トシ、男子三人あり、惣領を嘉兵衛と言、次男を五平次と云ヒ、三男を小源太と言ヒシニ、三人陸敷言ヒ合テ、段々新田をひらキ、道橋を作り仕立テ、此所を本村といフ。將監本妻は伊藤家の女也。寛永二十未年死ニ、海藏寺へ葬リ、陽屋妙全○姉カ大師と言。時ニ江戸御城御普請、大川筋堤等大平均ヨテ、日々に歩役夥敷相懸リ、人家をくろキ故、歩役相勤リカタク、難澁の折節、此處ニ近藤三次郎様屋敷の家老内海彦右衛門と申人、田畑を買取、百姓となラレシ故、幸と存して所持の田畑彦右衛門ニ譲リ渡シ、僅高拾五石ヨテ暮居候處、惣領嘉兵衛に妻迎遣シ、孫出生して嘉左衛門と言。其後今の神明前戸隠山トテ、高木家の薪山ナリシニ、此邊ニ氏神無之故、小社を建置シ、日を経て近藤、酒井、戸田御屋敷ヨリ初穂奉納參詣あれとも、在家ヨテ受カタク、依之心安山伏を頼ミ、是に奉納物を受させ置候。又其後小石川傳通院領ニ成リシ故、右の山を除地ヨシテ神

明宮と稱シ、内海氏願主と成る。是今の神明宮ナリ。其邊を畑と成シ、嘉兵衛親子三人家持として出し、分地五石分ち遣ニ。是をあら屋敷といフ。其後次男五平次ニ、娘を迎へ、高木家を續ス。田端村淺賀氏の女ナリ。此夫婦將監へ孝行盡、江戸へ罷出之節、一本さいかちと云所、豆腐を手の掌ニ乗せて歸リ、膳部の數とし、まゝ、到テとうふ好きゆへ、毎日まいらせケリ。其外孝行の事共あり。其後傳通院ヨリ小源太ニ、名主役被仰付、家作不殘下リ材木ヨテ仕立、門構玄關附丁寧の家作也。然ニ兄弟三人中陸敷、米穀の出し入等も互ニ斷なし、致し合、家來もあれと申事なく、召遣ひテ、甚見事成暮方ナリ。父將監甚悦ヒ、何不足なく暮シケリ。其比將監改宗して淨土念佛の行者となり、先祖の靈壇へ朝夕看勤怠ク本尊ハ聖徳太子ニ作、觀音ハ弘法大師の御作也。駒込淨土宗十八寺共ニ懇ヨテ、相談の上、法體して隱遁の身となりシ、寛文十八年十月廿八日天年を以終命ニ。法名ハ淨運院心譽宗閑といフ。是高木家の元祖也。榮松寺ニ葬リ、三代めを平兵衛と改、隣家清水氏の娘を妻トシ、子供六人あり。氣質廣ク、他人ヨも能交リ、細工等も致シ、富士の脇ニ長屋を建、町家トシ、然るに子供幼年ヨリ病身ヨテ、彼是と物入ヨテ、身上向衰へ、取續ガタキ處、兄弟男子



共出情して圓通寺を高麗芝の種を貰ひ作初、無上へ出し、夫より工面宜敷相成、大林寺跡地、動坂にて六反歩之畑讓請、身上守り立候處、五平次病氣付正徳三巳年六月十一日相果申候。齡九十歳也。三代め平兵衛倅久次郎、五平次と相改、伊藤氏の妻を迎へ、實體よて段々家繁昌あり。其節弟左源太、田端村戸枝氏へ養子よ遣し、持參金町屋敷迄附て、殘所なく仕立遣候。享保十五戌年六月五日平兵衛病死。倅五平次相續して、植木并芝等出情し、身上向不足無之。田畑四口讓り請、百兩餘の買添いたし暮せしに、子共六人あり、皆幼年よて病死。中比の惣領小源太妹三人、次男藤五郎、掛り人姉、下男三人、下女貳人、家内十四五人暮し、繁昌ありしよ。寶曆の比、諸國痘瘡はやり、家内不殘煩ひ、小源太肥立かた、二年過て終死。戌年六月二十貳才也。一體柔和よして謠又の算筆も達者よて、村中よ用ひられ、兩親の歎き甚し。引續て妹十七才よして翌年二月病死。不幸打續候ゆへ、田畑の稼業も怠り、終よ病氣と成、寶曆五亥年五月廿一日五平次、五十八才よて病死。跡の家續無覺束候處、末子藤五郎八才成を五平次と相改、母義の介抱よて、公邊をも可成よ勤させ、漸よ農行をいとあみ暮しけるに、又貳人の娘相煩ひ、翌年三月三日〇才よて死。同年八月廿五日十二

才の娘死。中貳年の内よ親子五人不幸、末子比ミ残り、哀成事也。右之節一家寄合、寺を替て葬らんと、娘一人の天然寺へ遣候節、天然寺常念佛開發よて、祐天寺の祐海和尚御入よて、駒込榮松院天然寺一同よ、九月二日茅屋へ御入よて、先祖精靈回向有之、母子二人へ法名を被下、毎月十四日百萬遍を執行致やうよ授けさせ給ふ。夫より母の日課を受け、毎日念佛專一よして、同行を集め、一家精靈追善の爲、回向と念佛よてたらを、萬端捨置候ゆへ、身上向段々衰へ、山林等あらし候へ共、やうやく身上取續、當時五平次家相續仕候。

——高木元太郎藏文書

爲庚申待意趣者、二世安樂也。

慶安元年九月吉旦

内海作左衛門 高木勘三郎

内海左近丞 高木將監

沼野彌次右衛門 内海五郎兵衛

内海權右衛門 伊藤宗兵衛

——神明社境内庚申塔○此外數基有リ。

淨雲院心譽高樹宗閑大徳 寛文二十壬子年十月二十八日 初代目  
榮樹院陽屋妙全禪定尼 寛永二十年癸未十月二日



○以下七代略

——高木源治郎過去帳○五平治後。

美濃國石津郡高須

高木重郎左衛門

重郎左衛門三男

高木内藏之助正辰

良善院殿董譽梅庭居士

慶長十乙巳年二月八日

内藏之助事

善良院殿春譽桃林大姉

慶長三戊戌三月四日

同妻

護念院心譽行西信士

承應二癸巳十一月八日

高木内藏之助嫡子 内膳

泰増院心譽清壽信女

承應二巳七月廿四日

同妻

徳圓日行信士

延寶六戊午正月七日

内膳次男 徳右衛門事

妙照日全信女

元祿六酉九月廿五日

同妻

右徳右衛門兄病身ニ付出家ス。池上本門寺弟子ト成ル。池上末淺草經王寺ヲ持、其弟子谷中龍谷寺ヲ持、依之此時ヨリ法花宗門ニ成ル。右徳右衛門實子無之ニ付甥孫右衛門ト申者ヲ養子トス。其後實子出生ス。依之孫右衛門ヲ分地ニ出ス也。

覺玄院道唱日達信士

正徳五未八月十日

徳右衛門實子 庄次郎ト云。

圓達院妙智日玄信女

貞享三寅十月廿一日

同妻

養壽院殿妙紹日心大姉

承應二巳六月廿一日

紀州水戸御母公

妙玄日久信女

庄二郎後妻

聞妙院躰達日生信士

寶曆五亥九月廿六日

右庄次郎實子

正覺院妙榮日通信女

明和八年卯五月廿六日

正覺院法蓮日成信士

寶曆十二午四月廿四日

四代日庄次郎養子 庄二郎ト云。

蓮花院妙等日覺信女

寶曆十一巳十二月八日

右養子庄二郎嫡子十二歳之節、右兩親二ヶ年之内ニ病死ス。依之悻勝五郎、庄二郎親類方へ引取跡式斷絶ス。

高木孫右衛門分地ノ譯ケ、先祖徳圓日行甥ニる養子ト成ル。日行實子出生ニ付分地ス。當家元祖ト也。

夏月院宗圓日經信士

當家先祖

元祖 夏月院宗圓日經信士

正徳二辰年四月十日

高木孫右衛門

實相院妙經日了信女

享保十八五年七月十五日

妻

二代日 聞法院宗源日悟信士

寛延三年十一月三日

高木權兵衛。八十五歳。

功德院妙産日理信女

享保六年二月十八日

妻

起信院妙圓日融信女

後妻 浮間ヨリ來ル。



三代目 持法院宗教日顯信士 寛延二巳年六月廿四日  
持法院妙宗日全信女 寛政六寅四月廿一日

權兵衛次男庄八弟  
高木孫右衛門  
妻

四代目 壽仙院常晴信士 寶曆十三年未十二月七日

右孫右衛門實子  
萬五郎  
廿三歳ニ命死ス。

右權兵衛嫡子庄八有之所、權兵衛跡式次男孫右衛門へ家督譲リ、庄八儀當所富士前町京屋八郎兵衛方へ享保十八丑十一月本家四代庄次郎親本ニナリ、養子ニ遣ス。翌年二月庄八庄二郎方へ歸ル。同三月八郎兵衛娘たき庄八方へ來ル。仍之元文元年辰五月庄二郎居屋敷脇五段譲リ受ケ、家作五十坪ニ建ル。植木商賣致ス。今有所諸植木不殘庄八仕立ル。其後上駒込村之内反步壹町四反ノ外ニ山植込壹段餘求ル。居屋敷表間口八間半立ル。門之内家作明和二百年新座敷建次、諸式入用金二萬兩懸リ、竝ニ諸道具不殘庄八求ル。右居屋敷段々譲リ受、都合三千坪餘、右之外下駒込村大林寺跡畑六段妻たき持參ス。内二段步取替地ニ致ス。右居屋敷竝ニ田畑三町餘發起入庄八。

六代目 我實院篤妙日持信士 文化六巳年十月廿四日  
觀我院妙有日利信女 文政五年六月廿六日

○高木さい過去帳  
「先祖庄八弟」トアリ。

七代目 心淨院持敬日受信士 天保十三壬寅八月八日  
淨心院妙敬日持信女 天保十己亥三月十二日

八代目 敬心院如淨日霜信女 天保十三年十一月三日  
後妻

八代目 聞是院以法日壽信士 嘉永六癸丑九月十二日  
得聞院妙經日淨信女 天保十年己亥八月廿七日

九代目 積功院累德日富信士 元治元甲子年四月廿九日  
累德院妙富日積信女 明治卅二年己亥一月十二日

十代目 秋月院禪定日法信士 明治卅一年戊戌九月廿九日  
秋露院妙富日鏡信女

十條榎本ヨリ嫁ル。

高木興吉先祖書門家。孫右

高性院誓信日巧 天明七丁未八月廿四日  
順性院妙巧日誓信女 文化五戊辰年九月九日

當家先祖  
高木庄八妻  
當家先祖庄八妻

高月院道照日德 寛政八丙辰年四月四日  
承月院妙照日淨信女 文政六癸未六月六日

二代目庄八  
高月院妻

○高木内膳以下庄次郎家歴代高木興吉先祖書ニ同  
ジケレバ承月院後ノ庄八家歴代ト共ニ之ヲ省略ス。

高木さい過去帳 家

内、秋月院日法ハ、俗稱ヲ高木孫右衛門ト曰ヒ、弟萩原猪之吉ト共ニ、明治十九年



荒川堤ニ櫻ヲ栽エタル者、遺族猶其當年ニ於ケル各品種蒐集ノ苦心ヲ語ル。高木興吉先祖書中、紀伊侯徳川頼宣、水戸侯徳川頼房ノ生母蔭。山氏實ハ正木氏、養殊院ヲ記スハ何ノ因由有ルヲ知ラズ。上駒込傳中在ル所ノ本郷氏邸ノ一部ハ、本ト庄八高木氏所有ノ地也。側衆本郷泰固後守。丹。天保五年買收シテ抱屋鋪抱地トシ、庄八ヲシテ林泉ヲ築造セシム。明治二年、木戸孝允ノ有ニ歸シ、同九年明治天皇ノ行幸ヲ仰ギタルコト有ル者是也。○前橋市故高木庄八談。北豐島郡集鴨町上駒込傳中高木。喜兵衛木氏ハ、牡丹ヲ栽培シテ名有リ。明治五年栗本鯤勳。勸メテ之ヲ公開セシメ、報知新聞紙上ニ其狀ヲ記スヤ、觀客沓至シ、明治八年ニハ有栖川宮親王。藏仁ノ來觀ヲ受クルニ至レリ。後本所三ツ目植文ニ分株シ、觀遊者本所ニ往ク者多ク、遂ニ明治廿三四年ヲ以テ公開ヲ止ム。○高木新太郎談。藝家ノ下駒込村及其附近ニ在ル者ハ、

下駒込村武藏國北豐島郡。中略。

藝家長右衛門原氏。栗。寛政十一年三月王子邊御放鷹ノ時、園中御通拔アリシヨリ、其後屢御遊アリ。此餘經歷セラル、者、寛政中ヨリ又兵衛、宇平次楠田氏。又吉文化元年ヨリ金三郎、平次郎楠田氏。文政中新之助。内。次郎兵衛、六三郎森伊之助、和吉海。内。以上十人ニテ、何レモ植木屋ト號スル者ナリ。

——新編武藏風土記稿

二月十九日嘉永五年。千駄木七面坂下紫泉亭植木屋宇平次楠田氏といへる舊家なり。梅園をひらく。又四時の花を栽、盆種の草木を育て、崖の邊りに茶亭を設け眺望よし。諸人遊觀の所となりて、日毎に群集するもの多し。○駒込林町石幡富右衛門語ル所ニ在リテ根津遊廓設置ノ日、梶田屋某買收シテ妓樓松葉ト爲シタル者是ナリト云フ。松葉ハ同遊廓中最初ニ開キタル妓樓也。

春嘉永五年。の頃より、淺草寺奥山乾の隅林の内六千餘坪の所、喬木を伐り梅樹を栽へ、又四時の草木をも栽へ、池を掘て趣をふし、所々に小亭を設く。夏に至り成就し、六月より諸人遊觀せしむ。○千駄木植木屋六三郎。森田氏の發起なり。

——武江年表

秋安政元年。千駄木藪下の植木屋に灌を作る

下駒込村武藏國北豐島郡。種樹一萬八千株。

物産 結縷草二千八把。種樹千株。

民業 前村武藏國北豐島郡上駒込村。ニ同ジ。團子坂 千駄木町あり。本名千駄木坂、舊名潮見坂、俗ニ團子坂といふ。坂の

左右種樹家ありて、毎秋菊を以て人形を作り、公衆ニ縦覽せしむ。

——東京名所鑑



文化十一年ノきくまけんぶつちりまちひとをあんあひニ據レバ、駒込富士前町ニ仙太郎、同内海屋敷ニ新之助、□二郎、くま、千駄木ニ富右衛門幡石氏、文次郎高橋氏、團子坂ニ六三郎森田氏、半三郎西大氏、傳二郎三輪氏、宇平治楠田氏、敷下ニ松太郎、辰三郎、治三郎、太三郎、利兵衛清水氏、澤二郎楠田氏、紋藏、根津ニ千太郎、鐵五郎有リ。文政十年ノ草木奇品家雅見ニハ、三崎ニ宇平次楠田氏、下駒込敷下ニ勇藏、駒込白山前ニ利兵衛、駒込堂坂ニ平吉、駒込うつみやしきニ金三郎、同うつみやしきニ三五郎、千駄木ニ六三郎森田氏、及駒込住鶴吉有リ。文久元年ノ菊比壽道あるベニ、根津鐵五郎、同所仙太郎、やぶ下澤次郎楠田氏、同所松五郎、團子坂右平次楠田氏、同所玉屋、同所半三郎西大氏、同所傳次郎三輪氏、同所六三郎森田氏、千駄木富右衛門幡石氏、うつみや新之介有リ。或ハ云フ、千駄木重五郎、松五郎稲垣氏、亦將軍ノ通過ヲ見タルコト有リト。○茂原銀太郎談。此外千駄木ニ於テ幕末前後ニ藝家タリシ者、平三郎石幡氏、京極家ニ八五郎遠藤氏、太郎兵衛植竹氏、卯右衛門藏石氏、本ト阿部氏菅ヲ作リ、京出入ス。要助名倉氏、萬藤次郎青培養年、等有リ。○茂原銀太郎談。若夫紫泉亭ヲ造リタル宇平次ハ、豪放ヲ以テ知ラレ、負債額一千兩ニ上リタリトテ、一大祝宴ヲ開キタルトノ逸話ヲ傳フル者。○駒込林町茂原銀太郎談。淺草花園ヲ開キタル森田六三郎、匏菴文

紫泉亭

原寸 横一尺五寸 縦六寸八分

東京島田一郎所藏



文化十一年ノきくまげんぶつちりちひとをあんあひニ據レバ、駒込富士前町ニ仙太郎、同内海屋敷ニ新之助、□二郎、くま、千駄木ニ富右衛門幡氏、文次郎高橋氏、團子坂ニ六三郎田森氏、半三郎西氏、傳二郎輪氏、宇平治田楠氏、敷下ニ松太郎、辰三郎、治三郎、太三郎、利兵衛水清氏、澤二郎田楠氏、紋藏、根津ニ千太郎、鐵五郎有リ。文政十年ノ草木奇品家雅見ニハ、三崎ニ宇平次田楠氏、下駒込敷下ニ勇藏、駒込白山前ニ利兵衛、駒込堂坂ニ平吉、駒込うつみやしきニ金三郎、同うつみやしきニ三五郎、千駄木ニ六三郎田森氏、及駒込住鶴吉有リ。文久元年ノ菊比壽道あるベニ、根津鐵五郎、同所仙太郎、やぶ下澤次郎田楠氏、同所松五郎、團子坂右平次田楠氏、同所玉屋、同所半三郎西氏、同所傳次郎輪氏、同所六三郎田森氏、千駄木富右衛門幡氏、うつみやしきニ新之介有リ。或ハ云フ、千駄木重五郎、松五郎田稻氏、亦將軍ノ通過ヲ見タルコト有リト。○茂原銀太郎談。此外千駄木ニ於テ幕末前後ニ藝家タリシ者、平三郎○石幡氏、京極家ニ八五郎○遠藤氏、太郎兵衛○植竹氏、卯右衛門○藏石氏、本ト阿部氏○菅ヲ作リ、京出入ス。要助○名倉氏、萬藤次郎○青培養年、等有リ。○茂原銀太郎談。若夫紫泉亭ヲ造リタル宇平次ハ、豪放ヲ以テ知ラレ、負債額一千兩ニ上リタリトテ、一大祝宴ヲ開キタルトノ逸話ヲ傳フル者。○駒込林町茂原銀太郎談。淺草花園ヲ開キタル森田六三郎、匏菴文

紫泉亭

原寸 横一尺八寸五分

東京島田一郎所藏





園子城下...  
...

梁泉亭  
...

東山...  
...







集左ノ如ク記ス。

淺草花園森田六翁碑記

陰六乘三而中陽九之二。陽九倍一而遇陰六之三。是奇偶各得配而數里俱完者。無恠于一寸八分之靈。居十有八間之堂。占大都之上流。而香火之盛無比也。然而西隅千畝之地。尙有草昧未闢。爲狐兔之窟者。嘉永之初。輪王寺法親王深憂之。知森田翁精種藝富心計。徵而與之謀。一任其施爲。翁感奮。指揮衆丁。拮据三歲。污壤淨而清泉涌焉。惡木伐而美花列焉。於此乎始爲一大名園。而與夫高塔鉅閣相稱。親王大快之。許翁以永爲園主人。蓋特典也。予竊謂翁家世通稱六三郎。是不期而應奇偶得配之數。噫嘻。易理幽深。佛因玄妙。默而契者。蓋親王夙識之也歟。

巢鴨及其附近ニ於ケル藝家ハ、

巢鴨村○武藏國北豐島郡

舊家者德右衛門 先祖ヲ仁平三河守ト稱シ、元龜二年六月二日死ス。其子某慶長年中氏ヲ保坂ト改メ、其子德右衛門某村内ノ新田ヲ開發シ、其功ニ依テ地頭ヨリ除地一町八段一畝十歩ノ地ヲ與ヘ、世々名主役タリシカ、享保年中ヨリ今ノ名主彌惣右衛門カ家ニテ其職ニ代リシト云。彌惣右衛門ハ則德右



衛門カ分家ナリ。又昔ハ武器古文書等モ所持セシカ、寶曆四災年ヒニ罹テ皆烏有トナルト云。

植木屋彌三郎田○齋氏。寛政四年王子筋御放鷹ノ時、御立寄アリシヨリ、今ニ至テシバ、御腰掛等アリ。

植木屋四郎左衛門坂○保氏。寛政十二年御通リヌケアリシヨリ、其後彌三郎ト同クシバ、ソノ樹木ヲ御覽ノコトナソアリ。——新編武藏風土記稿

福壽草に八王子よりいづる一種よろしきあり。巢鴨の植木屋彌三郎にてみしことありき。彌三郎は齋田氏なり。此頃此種多くなりて所々にあり。

彌三郎物語に、巢鴨の古文書に、小石川のことを礫川とかけり。詩人の礫水といへるも、是によるなるへし。——奴師勞之○序文化十年四月。

題菊花園

園者在于巢鴨邑、齋田某之所搆也。

徘徊此日菊園中、輔體延年瀟洒濃佳色、幽香含玉露、殊芳異品舞金風。階前可占三秋景、籬下將輝九月空。堪笑陽春桃李艷、淵明雅興最無窮。

國子祭首林信言子恭書

群芳園に緑樹よ

爲 則泉○冷

陰おほくよほふこり葉此色おせよぎのふす、しぢをば木さちかおむく鳥此をりもの菊に思ひつる去年のくるこ此けいせいり窪

蜀 山

ふり出し此日本橋あつ二里あまりをりも此菊此五十三次

蜀 山

詩をつくぞうと茂よこしもむりしよさ芋ををくふ秋の夜の月

蜀 山 人

大黒墨畫 文政五年辛巳二月十三日甲子。文晁。

大黒墨畫 文政八年乙酉十月二日甲子。文晁。——齋田彌三郎藏文書

巢かも彌三郎も、先代より奇品を商しゆへ、物産の草木勘訂ハ、賣樹人のうち東都第一人といふ。——草木錦葉集○文化十年。

一、江戸巢鴨五軒町の植樹屋野島權左衛門といえるあり。此もの先祖往古と小石川よ住に、今の極樂水元木の邊ハ一圓むあしかまが住居の屋敷なりしよ、神龜三丙寅年の春かとよ、行基菩薩諸國經回の砌、此權左衛門ハ家よ宿し



給ひ、靈木を以て彌陀の像一體を彫刻し與へらる。是を元木の阿彌陀と稱し、わが屋敷の内は大字を造立し安置せり。今此小石川元木の光圓寺淨土宗これ。元木と名付し事行基の大阿彌陀彫刻の初なまゝあり。此故は六體の阿彌陀佛を彫刻して、後より又一體きざりたる足立郡宮城村性翁寺の本尊を、木あはりの如來とい稱せり。しかるに慶長年間小石川傳通院御建立は付、權左衛門の居屋敷御用地に召上給ひ、同處より西北の方三町をだて、淡殿町を、一圓替地は賜りたり。その後又元祿年間水戸中納言光圀卿の御子頼重と松平讚岐守と號し御別家なさしめらるゝに依て、又々淡殿町をも御用地は召上らき、巢鴨は於て代地を拜領し移住に。今の植木屋野島權左衛門これ。此權左衛門家より御入國以來御旗本は召出したまふ者三人あり。今野島の苗氏を名乗る御旗本の此權左衛門が別家なりとぞ。さればむあし行基菩薩の此家へ止宿したまひざる以前も、幾何代をか相續しりけん、既に神龜三年よりも文化十一甲戌年よりいたりて一千八百八十八年の星霜を経りき。むあしより世々零落せず、家名を落さず、今も相續して御用木を預り奉り、三御殿及び大家の諸侯へ立入、今も連綿として家富榮えるの目出度家系にこそ。

遊歷雜記

櫻草

巢鴨 庚申塚左右、此邊植木屋又の農家までも作るなま、ふも生業をなほゆるあり。

卯花

庚申塚 巢鴨板橋宿へ出る道筋あり。農家あるひも植木屋はおほし。

江戸名所花曆

文化十一年ノきくまけんぶつちりまちひとぞあんなひニハ、庚申塚ヨリ南へ伊兵衛、某市郎兵衛、金左衛門○齋田氏、卯之吉山○内平七山氏、吉五郎、長太郎○内山氏、鐵三郎○保坂氏、四郎左衛門○保坂氏、彌三郎○齋田氏、市左衛門、市郎右衛門○淺井氏、五軒町權左衛門、稻荷横町坊太郎、原町六次郎、伊之松、忠兵衛、龜藏、七軒町庄右衛門、小原町富五郎、善三郎、繁藏、源兵衛、清藏有リ、草木奇品家雅見ニ、すりも彌三郎○齋田氏、すりも五々ん町市左衛門○淺井氏、すりもひのもん町彌七、すりも巳之助、孫八、すりも原平八、巢鴨松五郎、すりも猫まゝ橋喜兵衛有リ、文久元年ノ菊比壽道あるへニ、巢鴨清八、同所金左衛門○齋田氏、同所次左衛門○齋田氏、同所宇之吉山○内山氏、同所平七、同所長太郎○内山氏



山氏同所鐵三郎○保坂氏同所四郎左衛門○保坂氏同所彌三郎○齋田氏同所市左衛門○淺井氏大原町龜藏七軒町庄右衛門有リ、内彌三郎○齋田氏四郎左衛門○保坂氏將軍ノ通拔有リタルコト、上記ノ如シ。彌三郎ハ齋田ヲ氏トス。先祖ハ甲斐ノ人ニシテ、江戸ニ出テ、木綿屋半三郎ト稱シ、木綿販賣ヲ業トシ、兼テ紺屋ヲ營ミ、好デ菊花ヲ栽培シテ、菊花ノ造物ハ其始ムル所ナリト云フ。畫ヲ谷文晁ニ學ビ、文澗ト號セリ。兒孫藏スル所ノ太田覃○蜀山人。谷文晁等ノ書畫ハ、屢來遊シテ席上筆スル所ニ係ルト傳フ。○北豊島郡巢鴨町齋田源三郎談。四郎左衛門ハ保坂氏也。明治初年菊花培養ノ名手トシテ最初ニ禁苑ノ菊花栽培ニ任ジタル者之ヲ當時ノ四郎左衛門トス。長太郎ハ内山氏ト稱ス。本ト筮製造ヲ業トシテ筮長ト曰ヒ、藝家ト爲リ、後鹿兒島侯島津氏ニ出入シテ其庇護ヲ得、明治ノ初明治天皇大宮氷川社○武藏國北足立郡。行幸ノ日、其家ヲ以テ小憩所ニ充テラレタルヲ以テ殊ニ世ニ知ラル。○巢鴨町上駒込高木新太郎談。匏菴遺稿ニハ、左ノ如ク見ユ。

内山長翁傳

翁始めの名は長太郎、文化元年を以て巢鴨の地に生る。筮工某の長子なり。幼より花草を好み、常に路側の雜卉を摘み玩弄して倦むを知らず。成童に及ぶ

時、父某誠めて云、男子年十五既に賦役に供し、大人と異なる無ければ、一個の資力を以て口を糊せざる可からず、汝今より勞力して其料を得るを謀れと。翁深く其言に服す、然れども竹を編みて父の業を助る事を好まざれば、即ち日日農家に至り、蕃椒苗を求め、荷擔して市に賣り、一箇四文の賃錢を積み、百五十文を父の許に入れて口資と爲す。懈らず。殘餘漸く裕なるに及び、始めて花戸に就き草花數盆を購ひ、其名稱の審かならざるは老丁に問ひ、神社の賽日に出て賣る。越中富山の萬香老侯未だ世子なりし日、最も花草を好み、多く之を募り、猶ほ賽日には必らず微行して之を購ふ。一日慈眼大師の賽日上野廣街を過ぎ、翁が列肆中未見の花あるを見て名を問ふ。翁詳細に記す所を答ふ。侯大に其年少にして心を用ゆるを奇とし、徵して其邸に至らしむ。至れば則ち廣屋大門、翁始めて其高貴たるを知り、惶怖して敢て進まず。侯溫言強て邸内後園に誘ひ、有る所の珍卉奇草數百品を示し、試に其名を問ふに、翁盡く知る所を答へ、未だ知らざるは則ち教を請ふ。於是侯益喜び、深く其知らざるを強ひざるを重んじ、爾來殊に厚遇を辱ふする數十年、終に親しく介して筑前侯、會津侯、其他大藩諸侯の家、に到らしむるに、皆其朴訥を愛眷せざる無



し。茲に於て其弟房吉、卯之吉二人皆兄を慕ひ、盡く花戸となる、各其業を盛にするに至り、終に策長の名漸く三都に滿るに至る。此時都下花戸の長字を以て名とする者多し。故に其策工の子なるを以て特に策字を連ね呼て之を呼ぶ。敢て之を陋とするに非ず、他の長と渾するを避けて之を別つなり。于時天下の本草を好み、聞見を博ふせんと欲する者、遠近貴賤と無く、必らず訪ふて翁の栽花園に到る。于時曲瀬楓簷先生、海内博物家の宗と稱せらるゝも、常に人に語て云ふ、余二十年來一歳二三栽花園を過ぐる毎に、必らず未見の品を見ざる無しと。其廣蒐博募、憶ふ可し。維新以來益々大に用ひられ、大内の御苑より諸官省の庭園を始め、王公貴族の家、皆翁の手を経て其丘園の賁を爲さざる無ければ、人呼で花戸の大閤と爲すに至る。嗚呼亦盛ならずや。翁年七十に及び、家事を長子に譲り、自ら逍遙に任ずると雖も、健全壯者に異ならず、常に心を盆栽移植、弄花撫菜の間に寄す。篤志憶ふ可し。今茲八十、僅に病で一昨九日家に没す。余翁と交る殆ど五十年、豈に感無きを得んや。本月十七日、予○栗本。盆花を探り、逍遙して巢鴨の花戸内山長太郎の家を訪ふに、久々にて料らず水野泉州の老退後逍遙して到るあり、共に十餘年來の契濶を語り、溪

美野菽、一酌の餘り話偶ま此事○横須賀に及ぶ。君云ふ、予舊時に在り一事業の世に知らるゝ無し、唯其存し留る者は、獨り横須賀造船所あるのみ、是全く卿及び上野○小栗忠順の盡力に在るなりと。一語にて其概を見るへし

又大塚ニ藝家長次ト云フ者有リ、板橋ニ勝五郎ト云フ者有ルコト、草木奇品家雅見ニ見ユ。

西ヶ原ニ牡丹屋敷有リ、別項記ス所ノ如シ。享保六年飛鳥山ニ櫻苗三百本又四百本ヲ栽エタル者ニ西ヶ原仁左衛門有リ、寛保二年飛鳥山赤松植替ヲ請負ヒタル者ニ西ヶ原植木屋權左衛門有ルコト、亦既ニ之ヲ記ス。

雜司谷高田邊ニハ、雜司ヶ谷清土ニ市郎兵衛有ルコト、草木奇品家雅見ニ見エ、菊花ノ造物ヲ爲シタル者有ルコトハ、下文所抄遊歷雜記ノ如シ。其外遊歷雜記ニ、雜司谷村北茶屋町植木重助、高田馬場通植木屋彦五郎等有リ。

○上頃ハ文政三庚辰の年九月盡の日、小原通齋、鈴木忠次、館萬鯉を同伴し、予とともに女ましを七八人、巳の刻過る頃出宅し、神齡山護國寺山内をぬらめきぬ。○中頓て雜司ヶ谷村北茶や町なる植木や重助ヲ舍よあそぶ。此重助ヲ住へる地所ハ、目白臺御持組の與力渡邊政五郎といふもの買もとめ、亭宅を



作り、いさゝか茶室の學びして、折としての政五郎來りつゝ、釜をかける程  
よ、本宅及び爰よあそぶ事久しければ、重助近年廣庭の方よの數百株の梅樹  
を植ならべし程に、早春より雅客來り、文人訪ひて、詩を賦し和歌をなぐさむ。  
遠き葛飾の梅屋敷よりの、後々遙増らんりし。就中北の方の、爪先さかりよ屋  
敷を廣ふし、大なる池を作りて、池袋より流れ來る長流を堰入て、鯉魚を成立  
しめ、中よ島ありて池邊をめぐらせ、もろくの樹木を植込ての佳景を引、な  
を又春の山吹の花咲頃はもろ人の足をとゞめ、秋よ萩の花眞盛よして、來客  
日のみじかきを惜めり。殊更茶室の此方よ座して東北の方を程よく眺望を  
る風色、一品よして面白く、座敷よ憩ひ、又の池頭を逍遙し、おのくの飽迄林泉  
よなぐさみつゝ、是よりふらゝと頓て鬼子母神の境内を見めぐりけるり、  
別當大行院の、當夏自火よ燒失し、此節普請最中、ゑしきも近々なれば、相かは  
らに、飴りものおや拵へぬらん。造作取急く様なりけり。頓て小茗荷仲右衛門  
り酒樓よ飲宴しける。これの愚老か壯年の頃迄の、鬼子母神の花表前に、大茗  
荷やとて時めけき名たゝる酒樓ありしが、家衰へ滅却して今只出見世のみ  
とこしりば、一人家さかえ、住居廣く、追々家作して、間毎の奇麗よ、日々もろ

くの鮮魚を貯へ、調理又めづらしく、手を盡せば、彼王子村のゑびすや、あふ  
きやの貳軒にならびて、當時盛よ時めけり。依て此土地よ若干の酒樓軒をな  
らぶといへとも、小茗荷よ對まへき茶やなけまば、誰の人もみな仲右衛門り  
宅よ飲食をる程よ、いよの榮えますの繁昌をり。殊更參會無盡名廣め書  
畫の會など、こな此家よて興行し、片鄙ながら一箇の酒樓と賞をべし。されば  
小茗荷の姥よ、此家の白鼠よして、子か若かりし時より年久しき名染といひ、  
殊更世間淋しき九月盡の折りら、大勢打揃ひ罷りし事なれの、家内みな立出  
つゝ、取はやして二階へ請し、間もなく盃もち出つゝ、姥及び女房春むすめ迄  
も出來り、席を取持饗應程よ、いと佳興あらさよ、幾つとなく仕入し調理み  
な出し盡させ、一座おのの銘酌し、貳女かこすじの絲の高調子よ乗じて諷  
ふもあり躍るもありて、漫興さらにかぎりなし。凡未の半刻此樓上よあり  
て、戌の上刻目じろの鐘の聲よおどろき、暇乞して四ツ谷町を過、目白坂をく  
さりてわか家よへ立歸りぬ。その日遊歴一興なかつ仲右衛門方よ長座せ  
しまゝ、戸張喜惣次へも立よつず、高田馬場の邊よもあそばずして、夜よ入空  
しく歸宅しける。



一、牛込高田の馬場の北の四ツ家町、西は落合、東は關口大洗堰、南は市ヶ谷柳町、又の牛込通寺町は往來の陌なごら、漸く繁花の市中を離き、曠野渺茫として世塵を避し、風土をまじり、春のゆしより、秋のゆふをまで、雅客爰は逍遙し、或は馬場の騎射を見んと、都鄙の男女の左右の土手は集ひ、中辻を<sup>ツツヤク</sup>を謔も又一興ならん。されば此處は植木屋數拾軒構を同ふし、樹は石は唐のやほとの名あゝるを集め、我劣らじと鉢植石臺の造樹乃巧ある、惣て若干ありて見盡しがさき中も、高田馬場通東側は植木屋彦五郎の一際ほさりて種々の樹木數を盡し、その手入又絶妙なり。實も四季折々、兩公の成を給ふも理と覺ゆ。此彦五郎庭中より取分松夥しき中、簾中の松と建札しあるあり。幅凡三間四方、高さ凡六尺むり、八方面面にして、木の摸形畫くとも及び難らる。此一樹は拾貳品の松を接分なり。その手際尤賞をべし。松は臘ある物をまじり、枝を接するの理あがら、斯拾二種を一木に接分て然も樹の振乃奇々妙々ある。世下り人賢して、古來あきも一切今種々の新製をあら。後世恐るべしとの金言なる哉。彼拾貳種の松との所謂陰の五葉、紅錦、高田五葉、白髮松、宮嶋五葉、禿五葉、陽の松、陰の松、仙毛松、黃金五葉、爪白五葉、朝鮮五葉あり。又傍は東都

の松と建札しあるあり。幅凡貳間余、高さ五尺余。是は五葉の一木にして、木形枝振の屈曲是又畫がくとも眞の如くよの及びがららん。此貳木をまじめ、松よの若干の景木ありて、奥深く見盡し難し。凡松の當國、巢鴨、高田、大久保の三ヶ處に生ざるを上品とし、別して高田を第一とし、本所こまに繼べし。常盤の諸木を面白しといへども、一千年の榮の松乃基よおぎ。又此外に種々の形をのを作りし樹あり、その貝凡三拾余種、又奇品といふべし。先松よて作る形物荒く、左の如し。

- 一、天の浮橋。長さ九尺、幅三尺、橋杭あり。五葉
- 一、猿の三番叟。五葉
- 一、九重の寶塔。高さ凡八尺。五葉
- 一、矮<sup>ち</sup>貳疋。高さ凡貳尺。五葉
- 一、章魚。高さ貳尺余、幅三尺。五葉
- 一、大鷲。野松。高さ凡五尺。野松五葉
- 一、立鶴二羽。龜一疋。野松五葉
- 一、獅子の子落し。高さ壹丈。五葉
- 一、蜘蛛の巢。蜻蛉。高さ壹丈余。懷猴松
- 一、鯉の瀧登り。高さ壹丈余。五葉
- 一、春日形燈籠。高さ六尺余。五葉
- 一、雲中の登龍。高さ五尺余。野松
- 一、虎。高さ五尺余。五葉
- 一、鼠貳疋。高さ八寸程づ。栢楨
- 一、鳶貳羽。張がまよて釣。楡木



- 一、鯛ニ飄箆。道檀。
- 一、蟹二疋。道檀。
- 一、蟬一羽。柱ニ懸く。ひむろ。
- 一、緋鯉三尾。道檀。
- 一、烏貳羽。張グ彥マて釣下。ひむろ。
- 一、かゝはふり。栢榎。
- 一、雌雄の鷄ニ雛鳥三羽。五葉。ひむろ。
- 一、野狐一匹。栢榎。
- 一、大海老。どうざん。
- 一、木賊の側ニ兎番。栢榎。
- 一、鶺鴒二羽。張グ彥マて釣下。ひむろ。野松一式。
- 一、萱門。一、萱門。野松一式。
- 一、雪見形大燈籠。栢榎。一、臥猪。黄楊。

上來あるをし造りもの、一體樹の振あしく面白からねば、石臺等へ移し植難き哉、そまゝ格好を見立て、形作りは枝を撓刈込しものと見ゆ。その作意尤賞まべし。此外もろゝの鉢植大小とあく數千万見盡く難し。此彦五郎を第一として、左右の表側裏通りは數十軒の植木屋集ひ住て、我劣らじと手入つゞまやりあまは、おまらの庭中乃樹木奇石を見めぐるも一品よして面白し。こま又高田の一壯觀といはん歟。

—遊歷雜記〇文政二年。

四谷方面ニ在リテハ、草木奇品家雅見載スル所、

四谷忍原横町小三郎。四谷忍原横町庄五郎。四谷忍原横町彌七。四谷南

寺町音吉。四谷荒木横町彌次兵衛。同忍原横町長次郎。四谷大番町吉藏。四谷大番町吉右衛門。四谷荒木横町後ニ成子ニ住次郎兵衛。四谷忍原横町辨之助。四谷荒木横町卯八。四谷文右衛門。四谷大番町留藏。四谷番所町伊助。四谷彦太。四谷新町庄兵衛。四谷新やしき下道長五郎。大久保寅右衛門。

有リ。

明和の頃、四谷に藥草吉兵衛といふ植木屋あり。藥草多しとて、内山先生、大森見昌などもあひて見にゆきしは、わが十六七の年の頃あり。〇吉兵衛楊梅に案内せしかり。に案内せしかり。

—奴師勞之

内藤新宿〇市内。四谷區。

植木屋長助。安田氏ナリ。祖先は甲州武田氏ニ仕ヘシ由ヲイヘト、家系ヲ詳ニセス。中古ヨリ庭作りノコトヲ巧ニシテ、紀州家ニ出入セシカ、有徳院殿未タ紀州ノ館ニマシマセシ頃、長助カ業ノ巧ナルヲ愛サセ給ヒ、御庭ニ於テ屢上意ヲ蒙リ、拜領物等アリ。享保元年紀州ノ御庭ニ伊豆國土肥石ニテ高一丈八尺ノ五重燈籠ヲ置カルヘキ御好ミアリシニ、長助御旨ヲウケタマハリ、豆



州ノ石工ニ命シ、月ヲ歴テ燈籠成リシカ、既ニ御入城ノ後ナレハ、先其マ、長助カ宅地ヘ差置ヘキ上意アリ。同年紀州御庭ノ牡丹ヲ御本丸ヘ移サセラレシ頃、長助其事ヲ司トリシヨリ以來、御庭御用ヲ勤ムヘキトノ仰ヲ蒙リ、陰土圭間御廊下ニテ御料理ヲ賜レリ、或時御庭ヘ出シオリカラ、望アラハ申上ヘシトノ上意ヲ蒙リ、長家門及ヒ玄關構ノ居住ヲ願ヒ上ケ、下町ニ彼屋作ヲ營ミ居住セリ。然ルニ天明四年火災ニ罹リ、拜領ノ品マテ残りナク、烏有トナレリ。夫ヨリ宿外ノ添地ニ移リテ元ノ如ク家作ヲ營シハ、即今ノ居住ナリ。其後モ御庭御用ヲ勤メ、吹上奉行ノ支配ニ屬スト云。御預ケトナリシ石燈籠ハ、今モ庭前ニ置リ。

——新編武藏風土記稿

上記飛鳥山植櫻ノ條、享保六年九月櫻苗木二百五十本、植木屋長助手代茂兵衛持參スト見ユル長助ハ是人歟。

青山麻布三田白金代々木千駄谷附近ニ於ケル藝家ハ、

青山彌助ガ末子金太。千駄ヶ谷權藏。代々木藤吉。麻布新町喜兵衛。

三田魚籃下熊五郎。白かゝ大和横町久太郎。金里平太。

等草木奇品雅見ニ見ユ。所謂青山彌助ハ末子金太、即チ草木奇品家雅見撰輯者

金太其人歟。三好理學博士櫻ニ關する圖書解題ニ、青山長者九久保氏櫻園ノ櫻譜○坂本浩雪書ヲ所藏シタリシト傳フル増田金太郎モ恐ラクハ同人ナル可シ。

若夫本所其他ノ河東ニ於ケル重ナル藝家ハ、傳フル所左ノ如シ。

寺島村○武藏國南葛飾郡○中略

植木屋甚平 庭前ノ趣向經營布置見ニ足レリ。又多ク珍花奇草ノ盆栽アリ。

植木屋平作 コ、ニモ盆栽數多アリ。

植木屋辰五郎 滿園松樹竝ヒ立テリ。昔富饒ノ商人コ、ニ隱棲シテ、松隱居ト稱セシ跡ナレハ、今モ土人ハ其名ヲ呼ヘリ。宅地ニ稻荷ノ小社アリ。萩原稻

荷ト號ス。

——新編武藏風土記稿

松の隱居

寺島村 二代目 植木屋 辰五郎

松爲百木長霜雪而不凋、歷千年而不殞、其花色黃而多香、根下有伏蒼爲仙家服食之藥。園中花木奇石を以て山水の庭をつくる。又梅門、松門、植木門有餘は是みて知るべし。異形の珍木の名所也。

菊の隱居

同 三代目 植木屋 甚平

この菊の隱居ハ、文化ごろ川原を奪の何ぶし此寺島村へ隱居して、菊をつく



りとのしきて云く、陶淵明獨愛菊、周茂叔の云く、菊の花の隱逸あるものといひしも、今の世の花壇は錦をりざりしことく、年年珍花を植添へしも、今も名木奇石をもつて、庭をつくりまゝ菊のやと號して、即席料理屋を渡世とす。風流ある猷立よて、日々客來りてもんじやうす。石燈籠の名所也。

——墨水遊覽誌

本所四目植木屋文藏、芍藥の數種を養ふ。開花の頃、諸人遊賞せり。○嘉永二年ノ條。

——武江年表

嘉永七年六月  
草花伐出賣々仲間規定

規定

一、草花伐出賣々仲間今般左之通八ヶ村ニ相定、草花作附、農業之間伐出、銘々取續爲助成、每朝東兩國花市場ニおゐて、賣々ニ致候節、往來之障ニ不相成様、相互ニ心附合、喧嘩口論等無之様、相慎可申候事。

一、畑場市場等ニ草花紛失致候節、相互ニ心附合、若見當心當等有之節、當人へ爲相知可申候事。

右之通仲間一同取極、年行事相定、毎年壹度つゝ、參會致、諸事行更ニ相任、若規

定相背、仲間内節差障等之儀致候者も、行事へ申出、一同評義之上、取計可申事。

嘉永七年六月

表青戸村

長藏、甚右衛門、傳藏、喜平次、五郎兵衛、藤八、三左衛門、七郎兵衛、新助、太郎兵衛、久助、與八、忠右衛門、與右衛門、與左衛門、政右衛門、吉兵衛、桑次郎、秀太郎、清右衛門、七右衛門、利右衛門、小右衛門、長左衛門。ニ貳拾三人。

外四人。

西青戸村

甚左衛門、仁三郎、忠次郎、大五郎、伊之助、長次郎、幸次郎、兵右衛門、重右衛門、藤松、次郎兵衛、次郎吉、彌八。ニ五人。

堀切村

金太郎、庄太郎、伊左衛門、祐次郎、常次郎、勘藏、安五郎、勝五郎、仙太郎、甚八、彌助、三左衛門、傳藏、彌八、佐兵衛、勘五郎、清一郎、龜次郎、音右衛門、三次郎、虎松、喜兵衛、長次郎、佐平次、菊次郎。ニ廿五人。

柳原村

桑次郎

請地村

清五郎、吉三郎、安右衛門、甚右衛門、彦左衛門、長藏、文五郎、宇之助、庄吉、仁三郎、喜平次、藤次郎、久次郎、彦右衛門、彌五郎、武兵衛、熊次郎、伊勢松、政右衛門、彦次郎、仙松、次郎吉、平藏、又右衛門、平藏。ニ廿五人。



押上村、柳島村。

幾松、嘉左衛門、金十郎、八十右衛門、小左衛門、松五郎、平次郎、重五郎、文次郎、善右衛門、五人。

澁谷村

四郎、右衛門、銀次郎、源太郎、宇之助、次郎、右衛門、彌右衛門、岩右衛門、權右

衛門、次左衛門、市五郎、傳藏、七五郎、竹松、金松、平四郎、五人。

篠原村

傳右衛門、鎌次郎、宗右衛門、甚太郎、長兵衛、松五郎、惣七、平次郎、寅次郎、七

五郎、勘藏、銀藏、紋次郎、常次郎、五人。

龜有村

八十松、七右衛門、久次郎、五人。

四ツ木村

與市、金十郎、金藏、孫治郎、三人。

木ノ下村

熊次郎、傳次郎、富右衛門、半四郎、政右衛門、藤次郎、五人。

大杉村

新助、幸七、庄五郎、多吉、亥七、庄七、六人。

小岩村

寅吉印、平七印、源右衛門印、市右衛門印、岩右衛門印、三次郎印、久五郎印、

平五郎印、紋三郎印、重次郎印、佐太郎印、五郎右衛門印、源八印、彌吉印、龜

吉印、六右衛門印、拾六人。——草花伐出賣々仲間規定

百花牡丹 徳右衛門町植樹家文藏方あり、毎年四月の候、牡丹を賞して府下の遊客杖を曳もの多し、府下牡丹を培養せる所多しといへとも、此園の右

よ出るものあり、又芍薬もあまゝありて有名あり。

——東京名所鑑

嘉永七年七月ノ三都一朝、安政四年ノ都鄙秋興等ニ牽牛花ノ栽培者トシテ、本所四ツ目植木屋文藏ト有ルコト、別記ノ如シ、此外同ク牽牛花ノ栽培者ニ、入谷成田屋留次郎、入谷朝貞師いふしや丸新、三都一朝、兩地秋興。入谷朝貞師辰五郎、入谷朝貞屋熊次郎、都鄙秋興。有ルコトモ、別ニ之ヲ記ス。

入谷朝顔 坂本の東裏にて、坂本村あり、此所種樹家多く、近年盛ニ牽牛花を培養して諸人ニ縦覽せしむ、花の頃府人杖を曳くもの夥多あり。

——東京名所鑑

東京の植木屋にて牽牛花を培養するもの、入谷を以て第一とす、年々珍花を作り、夏季ニ至れば、毎曉觀客群をなすを常とせり。略中  
同業者九軒 豊住町、市内の北、坂本町三丁目、市内の東裏なり、同業者道を挟みて兩側にあり、即ち丸新、入十、松本、植徳入、又新龜、入久、入長、植松、以上九軒なり。略中

菊花壇 牽牛花が凋萎すれば菊花壇を造りて、又縦覽ニ供せり、平生丸新は盆栽を造り、植惣は西洋草花を培ふ、其外入長、入十、入又、一般に四季の和洋草



花を栽培せり。

——新撰東京名所圖會

此外處々ニ藝家有レドモ、今一々擧ゲズ。左ニ明治九年六月ノ東花植木師商名鏡井光太郎藏。ヲ抄シテ、明治初年ニ於ケル其一斑ヲ知ルニ便ス。

花園樹齋

東兩國横網 鈴木孫八。  
 一、香梅園  
 永丁田 伊東八十次郎。  
 向島白鬮 佐原平平。  
 市谷富久町 錦香園松五郎。  
 川口町 長澤太吉。  
 淺草奥山 内山平右衛門。  
 横濱皆宜園 川本友吉。  
 四時皆宜園  
 溜池天神山 内山卯之吉。  
 西溜池花園 内山卯之吉。  
 麻布廣尾 田中定治郎。  
 咲花園

庭師

下谷金岸杉 内田佐平次。  
 根下谷金岸杉 柿沼喜三郎。  
 同 所 大塚桑次郎。  
 神田今川町 小澤源兵衛。  
 本所三笠町 西川喜太郎。  
 飯田坂町 針ヶ谷長吉。  
 九段 小川九兵衛。  
 深川扇橋 小川九兵衛。  
 秋葉社内 外山重吉。  
 芝烏森町 辻岡半次郎。  
 向島寺島 萩原平作。

采女 橋保坂金次郎。

築地一丁目 荒澤虎松。  
坂本植木店 三木屋新助。

替物師

下駒込動坂 篠吉五郎。  
 同 所 林町 佐野惣十郎松。  
 牛込原町一 松永喜三郎。  
 千駄木林町 松下惣次郎。  
 同 所 川島彦治郎。  
 本所小梅 深谷入藤。  
 駒込内海 栗原政太郎。  
 駒込動坂 河村伊三郎。  
 同 宇田川文藏。  
 赤坂社内 渡邊清兵衛。  
 小石川原町 笹山文吉。  
 千駄木子 坂木成井梅次郎。  
 西大久保 中村孫太郎。  
 四谷鹽町三 中山銀藏。  
 同 所 名倉要助。  
 上駒込染井谷 銀藏。  
 本所林町三 田中久太郎。  
 小石川 長谷川幸太郎。  
 根 岸 星野榮吉。  
 牛込築地町 甲田幸太郎。  
 根岸わさびや 富岡辰五郎。

樹齋



愛宕下佐久間町 關口萬治郎

鉢物師

向島秋葉社内 三竹梅吉

同 伊藤彦右衛門

小石川原町 笹山助次郎

巢鴨仲町 鈴木政吉

地木鉢物師

向島請地 小宮市右衛門

同 同市五郎

駒込傳中 高木孫右衛門

駒込染井 伊東留次郎

横濱石川 岩月小三郎

同山元町 須田定次郎

根岸松崎 高橋浪吉

同 所和田三之助

駒込染井谷 金藏

千駄木林町 石幡平次郎

駒込内海 柏木吉三郎

駒込染井 曾我權右衛門

同 同權次郎

巢鴨二丁目 内山柳之助

同 同喜兵衛

同 伊東重兵衛

同 廣瀬定吉

向島請地 岩田新助

本所四ッ目 成永文藏

千駄木林町 高橋直次郎

駒込傳中 森下繁次郎

新町のはず 古川兼吉

同 所 高田鐵五郎

同所二丁目 齋田彌三郎

駒込藪下 清水藤吉

梅屋敷

龜井戸村 安藤喜右衛門

巢鴨一丁目 香山久吉

堀ノ内道中程 横田勘右衛門

萬年青師

根 岸 肴舎常五郎

さぼてん 坂本入谷 成田屋留治郎

同 東門前 太田屋佐兵衛

地木師

横濱山元町 高橋久藏

同上戸塚 野村虎藏

下 駒込 稻垣松五郎

麻布廣尾 谷崎菊五郎

巢鴨三丁目 大川所左衛門

麻布三軒家 菅根吉五郎

上田端村 神田半三郎

四ッ谷新町 大坂屋三吉

地木師

駒込染井 伊藤小右衛門

目 黒 橋和屋善右衛門

高田下戸塚 松村久左衛門

柏木鳴子町 深野喜四郎



柏木村原 鍋次郎

向島請地町 瀧澤八十右衛門

同 同 茂兵衛

同 同 小宮利右衛門

同 同 矢羽瀨松五郎

同 同 大庭忠次郎

日ぐらし 松本新右衛門

日ぐらし 野口元次郎

駒根上り 玉川太郎吉

駒込下松 玉川太郎吉

赤坂明神下 薔薇園吉見

高田木 諏訪 蛭川銀次郎

地上木 師端 宮本 桑吉

明治九年六月改

斯クテ明治廿二年前田正名勸奨ノ下ニ横濱植木會社ノ設立ヲ見、植木ノ海外

輸出ヲ開始シ、苦辛十年、遂ニ藝家ノ新天地ヲ拓開スルニ至レリ。

〔参考〕

花市

花市

輕風門外帶清香。蝶舞茶亭酒肆傍。今日街頭花世界。不須倩杖入林塘。

街頭春色借吟翁。千朶嬌姿舞晚風。謀買一株窓外種。何花最易入詩中。

——錦城詩稿

植木市之詞

晋

如

山田ニ住るものハ、邵生ガ瓜、諸葛リ菜を作りて樂しむとリ。そガ中ニ植木ウ  
ヲと云ものハ、あの瓜ニあつて菜にあつて吉野龍田此果を植そぐて、成木  
をるを待、或ハ名高き木ニ此枝をものし、繼木とし、或ハ取芽さく木根分など  
して、鉢ニ浮龍浮牡丹のをもよふ有をゑらみ、黒はバ白つバを下品とす。又南京  
此染鉢錦出の香爐ようつして、枝もたのゝむ、鉢りものし作り立て花咲も  
の、苔多き年を撰み、果ものハ其節を考へ、大樹すん切の枝ををこめ、形作り  
て、根を廻し堀うらちて、肩もぬゆげよかつき連レ、或ハ御膳籠もも入て持運  
ひ、三日上野、八日と藥師、又ハ天神辨天大黒毘沙門愛宕不動と御縁日のかき

千駄ヶ谷ニ 横倉兼次郎

同 同 三ツ橋清右衛門

同 同 瀧澤八右衛門

同 同 西大久保 松本 梅吉

同 同 赤坂氷川町 西村喜三郎

同 同 麻布田町 林田 豊吉

同 同 下田 端 劍持安五郎

同 同 上田 端 清水友吉

同 同 石 菖 石菖師 桑藏

同 同 横濱山元町 飯島秋三郎

同 同 地木 鉢物 伊藤金五郎

同 同 駒込鉢井 伊藤金五郎

同 同 地木 鉢井 伊藤金五郎

板元 永樂堂



りかそへ立て、其日よなきは朝より已く、うり場を取て、鉢をのは棚打か  
 さり、霸王樹、麒麟角、茶蘭、松葉蘭、櫻蘭、蘇鐵、柑子立花赤白黄の實なり。橘、櫻欄、竹  
 蟻通と、ゑもいこぬもの迄も、籬もかくやと打かさり、大木と道の中は、竝へ々  
 きの、俄に町中を林を作り、山むとつゆらき出さるやうあり。夏は牡丹、杜若、若  
 竹を始とし、琉球は、し、横白、橙色を交じへ、秋は萩、桔梗、女郎花、ふじはら、は蘭  
 菊、薄をさへ堀もて來り、紅葉の樹々を竝へ、冬は松、姫小松の常盤なるよ、山茶  
 花、水仙、寒菊、藪柑子、梅の早咲き、時あり、貞に竝へたり。その中よ、春やとい  
 るしきと、ゆらじ、大木の櫻の枝もたの、よ咲出て、匂ひゑな、ゆぬを人五六人  
 よてかつきもてまへたれ、その東風もたひさる名木の一夜よ、飛來るやと  
 うさあゐる、よ、む、のやうく、たるより山吹のいこぬ色、香美しく、彼岸櫻  
 の絲よりあけて、艶しく咲出たるよ、青よよし、奈良の都の八重櫻も、色も匂も  
 又勝りて、爰よ、芳野を寫ま、りと思へる、よ、買人も、豎さは、横さは、よ、歩行て、大を  
 好く有、小サきを好むあり。商人も、これが爲よ、ほこりて、肩を張りて、是の唐お  
 し、此種、是の都、そは、さ、ゆ、琉球の産とて、價をあげつらへ、酔狂人、その中よ  
 立交りて、大きな松、柏を、あひもて、群集の中を、もて、歩行けり、見物、是を、あ、

くしとよけまといさるもおあし、かゝる所よ、むら雨の俄よ、さと降來り、なれ  
 む、商人とも肝を潰し、小鉢ともを、籠よ納め、大木を、い、あ、せんとうろた  
 へ打返し、上を下へと、かへして、人の軒端よ、よりて、雨を、いこふ。此時よ、至りて  
 の、日比の骨折も、あら、う、経しと付を張たるも、またと成て、美しき花と、雨よ  
 こ、ゆき、うる、のしき葉と、土よ、は、ま、れ、て、誠よ、天人の五衰も、かくやと、あ、ま、ま、し  
 々、あ、ま、ま、今迄よし、野たつとを、う、つ、せ、し、ゆ、さ、り、も、消、て、ま、ぞ、の、町、中、と、そ、成、よ  
 々、を、花市や、殘るものよ、の、莖、計

——史耕庵俳文集。○文

傳奏隅田川舟遊

五年庚申。元文〇〇年。三月廿一日壬戌。正統三傳奏大納言葉室

頼胤、同大納言冷泉爲久、隅田川ニ遊ビ、木母寺武藏國南葛飾郡ノ茶亭

ニ宿ス、幕府奥坊主組頭成島信遍道ニ命ジテ之ヲ饗セシム。

○有徳院殿御實紀。春此御ぬ。寛政重修諸家譜。

傳奏隅田川舟遊 相傳フ。

元文五年三月、葉室大納言頼胤、冷泉大納言爲久、傳奏の職にて、參向ありし  
 に、うちくこはれし旨ありしにや、墨田川遊覽の御ゆるしあり。さるは龍の口

傳奏隅田川舟遊事蹟



に舟よそひし、木母寺の茶園にかりのやどりを設けられ、往來の船中、海陸の善美をつくし、ごよなき御もてなしどもなりし。このとき頼胤卿、

ゆたかなる世々を重て角田川ひろき流の波もさはかす

聞しにもこえてこそみれ墨田河汀の波も花に向ひて

爲久卿、

墨田川こゝにけふこし都鳥有し例もとひてこそあれ

花鳥のかすむや千里墨田川舟とめて見る遠近の春

初花もけふこそみつれ珍らしき墨田川原のはるを問きて

兩卿の家司などのよめるも猶あまたあるべし。成島道筑信遍は、さいつころ爲久卿の門にいりしちなみにより、此日も仰をうけて終日まらうどの饗應をたすけまいらせ、兩卿のもとめにより、七言律のからうた二首をつくりてまいらせぬ。つぎの日信遍を御前にめし、きのふの舟道遙のありさまをとほせ給ひしに、詩をこはれてまいらせし事言上せしかば、かねて學力あらずしては、かゝる時いかで速かにもとめに應すべきや、よくこそつかふまつりつれなど御褒詞を蒙りける。さてこの日のこと、くはしくは信遍がかなの記あり。春の御船と名

づけて今も家に藏しぬ。

——有徳院殿御實紀附録

信遍巴之助。忠八郎。道筑。成島。

略。○上 五年。○元 三月廿一日、冷泉大納言爲久、葉室大納言頼胤、隅田川遊覽のとき、おほせをうけて同船し、その日の事をあるし、春の御船と題してたてまつる。  
——寛政重修諸家譜

そのころ冷泉大納言殿葉室大納言殿すゝ川は逍遙せさせ給ふ。これ私の事よもあらに、關東の御沙汰をして、萬きよらをほくされたる御もてあしよそありたる。時と彌生廿一日な。か多てあさてのほと御船のまさまめしくまへらるへきあらまし、久道朝臣仰事を傳ふれ、畏を申て、鳥あねまゝに御居とりままいる。廿日此月あうさしのやりいとえんなる空を見るよも、なふのこふ手み波風あらしをやと心のうちいとたのもし。二あゝのいてさせ給ふ辰の口といふところ、又艤を、花のとまり朝日あゝや、或、麒麟丸、大竹丸、杯い、御船きらゝあゝあさり、錦のともつあ白あ、手のこゝ糸の具ともひありあひたり。こ此よああをのともあし。御先追聲いあめあう、往來の人こゝあしこみうつくまりて、あ服たふとあめてあしと見奉るあるを。吾孀て見もあまぬ



狩衣をあらえひそめ、冷泉殿うきをなすの葉室殿こそ。御船うつろを勢  
給ふあそひ、夕布の事うを給え、おししくれあし名をいめをみ、夕絲すゝと  
つ、松の葉此常磐のましを左よあし、河波よさやさなほせ、あは乃をち二里を  
ありありて、左右の家居あま人のをき、ぬきとるも、若女とも、幾千とあく  
むきゐて見奉る。米俵をさるくらともかまもりきらにせてつゝき、こあたあ  
さよつたなれるり、ごちよあまてある。夕よも、とめるよ此をあらとめてあへり。  
みつまよ此瀬をさしこして大川よいる。とし雪あまうち、りて、まよ此  
ころも朝の風さえわたる、河なよあろ、吹立て、そよさむをかれせ、めかれぬ  
山水よ心うつしてわきまへを、梅のちりて若楓あめも春よもえ出さゆおやし。  
桃の花白や紅ある、所々よ咲ましへたるを、二あよとよめてさ勢給ふ。なへて花  
紅葉、浅心となさせ給ふも、下種のあるを、あもあらは。ところのよをて取  
しとも、せへ乃をりは、よなくとも此屋の物、老せぬ國をや舟此うちよたつぬ  
らん。かうやうのとあくともはきましなれを、さて屋をぬ、高家といへるのよあ  
はし、歩虚の流よして、位司もよあをらふ、ゆるくもあら絲を、雲の上此事とも執  
し侍るなり。夕布もよあしくれあし、朝臣、そ此ことうを給える。あそれもと

此根さしも人のあもよ生れて、あゝるあそひよ立ましら布るよ。そこの山を左  
の手よさゝぐし夢よやあらん、足曳のやまととの葉此あよまし、さえはりあら  
ひて侍りしあ、冷泉家よまちのあるへあふを奉るよをまやうゆり給えりしよ  
り、あゝるむしろよあをまへさせ給へるも、ひとへよ御めくよの露なり。さても  
よのうへをおもへも、いあよいひいてんどのよもあし。いあある事をあしてり、  
つな手なまなあ、日の御なくさめをもつあうまつらんの心つきて侍るよそ、  
はるあうともおやあるを。こ此墨田川原よ、むさしとあもつふ世の中よ名も  
あられしあも、いよしへより雲の月もあけをうか、言葉の花もせよなあれ  
し茂と、六十一とせのむあしあれるりいへり。あやあれを絶よしをもはき、すよ  
ましをも興させたまし、まに時とありて、あゝる山水のこよろをもくみあろし  
めしもよやしよとさせたまし、まにならんを、二あた此よ給えを。日高うさしの  
ほりぬ。はくも山をぬきこを風よ雲霞をもらひて、ちよ布ね黒髪あしあふあ  
の山端をまよ、よまを。心ありやなり。消残る雪のよそめあよもあ、乃ほし。不  
二の山よ、年よ見あれさせ給へも、それやあらぬあともとせ給えは。とこめつ  
らありとのよの給えは。御あそらやまいるほと、あよともわろして、まあやあ



るを此ことも此あまききぬきて船をさしゆなめくる。蝶鳥の水よりあゑるよ  
 似たり。いろくの鱗ともあまるとり、よろひてよ入てもてまひきり。とよおあ  
 しと々うせさ勢給ふ。午の貝吹ころ木母寺よはきぬ。一木二木の櫻をころひそ  
 めて、日うらゝあよさけ勢。よへ近江守以興朝臣御まう々此ぬめよこゝよ来て、  
 花もやゝほころひそめてすまゝ川大宮人のとふをまつらんと  
 と聞えしりも、

あまあてまやこの人よきりせまや花めつらしき露のこのも  
 せあん聞えりもしつ。汐の干潟よ鳥ともあまゝむきゐてあさる。それり中よ所  
 よ名よたへるもあるあるゑし。御とのはく里よ千里の野山をう々て入江よの  
 そめり。あまゝのまきまよあやしのこやとも見えて、木立をのふりし關屋の里  
 と申よしを申は。けよめとほる所とてまききとようるのし。おも此まゆるほ  
 とのおほる々さぬ此とあれま、いさゝりあそきてあり。よへあまの道遙、折よぬ  
 きてから歌奉れと仰とのあらましようけ給まれま、袖あきあませて横のもしら  
 みよりあゝるり、あろりよあんしほれて首骨いとうそ覺えし。もとより文人擬  
 生此きまみしもあらは、才學はとあぐれま、石の火此うちいてんと此まもあし。

前裁ちりなくあわさしより。舟にてわさら勢給ふ。中嶋よわさとあちて、軽らり  
 よとそき造らまゝる所よいりたましまは。まきまいる。硯料紙奉り、階を下りう  
 つくまる。冷泉殿、

すまゝ川こゝあまあし都鳥ありしためしもとひてこそあま  
 花鳥よあまむや千里すまゝ川舟とめてまゝる遠近の春  
 初花も々ふこそまつ珍らしきすまゝ河原のまゝるをとひきて  
 まむろ殿のよま勢給ふ、

ゆさかなるよゝをかかねてすまゝ川ひろま汀の波もさまあに  
 聞しよもこえてこそこれ墨田河汀のあまも花よ匂ひて  
 唐歌奉りぬりつきあゝり。まきしきあり、みき給る。よゝとえひより。みよりこゝ  
 ちけうくあるふるまひなとましうのとおもふ、いとくるし。

右近大□清基

朝つく日のと々き光さし添て波よあゝゑくあま此そや舟  
 二國の中ゆく水のすまゝ川幾代つき勢ぬあゝれなるは

玄蕃允藤原祐良



くりあへし詠もありはすこゝ川きしのむあひの青柳のいと

内匠壽詞

よこりなく治まるよ此すこゝ川々ふの御船のあとと絶せし

筑波山峯ふきおろせ春風よすこゝ河原の花そほころふ

此翁は世心つきてこもりあるを、ふとひも寶殿よめして、御ともよさふとひ  
さり。年と七十あまりよあれと、心わあやうよ、さまり放下つきておあしと見る  
人之々多よあひあしとなき御もてなしよも侍るあ服と、い々るあひほくり  
てえひなく涙あまいるのうへふ落て、又盃をやうあふふん。  
和歌をもと冷泉殿仰あれも、

都鳥大宮人になつさひてきこゝ河原のむかしあふふへ

時つ風治るよとてすこゝ川春のよふ冬のなともたとせに

となん申を。あゝるむしろよのそむるあ身のきまよもあらねまなよとあし  
あふしと用意まともよしある多しもあふしを、ましていとえひて侍ま、あ  
てうゆとり多あき方あらん。さる此さありよ桂の棹さしあへる。そあまの風  
ゆるやあよ吹出て、もしめとし山々をあまそわより、えもいまぬ春のなしき

なり。いさなとるあまともあことゝのへて、ああこなよちりあふよとるま  
あり、ととけもあなる魚のあろふ見えておとまるりあまよあれま、都にてめ  
あれぬ事のもあやありとて、御前の人とも山とよむまていひのゝある。棹の  
歌をもこめきてあらよこほくりてうとひつきさる。絲竹よりもあふありとて、  
と取人めてきこゆ。御いきやひあめり下をおひかし、人の國まであひまあ  
へる御恵をた多あぬまなし。日のくまゆま、火あまた所よあまて、御舟をこ  
ちひあ、月あらまやといふも、梅々、を柳の枝のねあひなるへし。御あせりよ修  
きて清基の袖をひあへて、

あへりゆくま居この人よかとりつけすこゝあいらの春の舟路を

こや御あよこそ申さめとて、りへしにせに。み居この人よ用意ありとそお不  
へしり、日をあてまやこより爲村卿、

まゝわさる恵もひろし墨田河まれの舟路乃春のあそひま

こ此日乃からうと、

星文曉動鳳凰樓。錦纜牙檣尋古游。賞眺應同天上座。乾坤偏似鏡中浮。一時詩賦  
鄒枝筆。千載風流李郭舟。愷樂陪君魚在藻。隨波好更問瀛別。



樓船簫鼓發春風。淨代橫汾此日同。緯象光臨瓊海外。麒麟影動翠濤中。明時游豫皆軌物。上國文章夙鬱葱。更有任公若魚賜。思波旁及澗河東。

この一卷<sup>聖</sup>曾祖父信遍元文五年三月廿一日爲久頼胤兩卿を墨田河にて御饗ありし時、その事預りしをもて、私もあるし侍りしなり。これより先丹後守直賢朝臣享保のふるき光をあしこみ忍ふとて、そのさまを古法印惟信よゑあせ、亡父勝雄よこの文あるせとあつたへ給へしほとみ、青柳のいとまあきつあへのきま、あまよほされ、年月をへよかるり、いつく法印も父の翁もよこの國人となり、朝臣さへ寂光よあせあへありく後の、春の川舟よるへをうしかひ、春の一夜の夢あざりとありき。あるを松齋のぬし孝の志厚く、朝臣の志をつられ、ゑの法印のうま子よあせ、詞をまをのれよあせねしり、をのれりふてとる道ようときぬしもとよりあり給ひあせ、さるあへよしあれもとて、あせあちよもとめまじり、春蚓乃糸ち々たる様もて、いあまもては、あたる高妙のゑ乃ありへを々あは事ともありぬ。狗尾もて貂をけかりとやいもむ。文政二年長月の菊の

籬の露を硯よう々て、すこゝ河よのそめるたあとの、西の窓のもせよ源司直記を。

狩野晴川書。成島同直書。尾代弘賢宮銘。

——春比御絵糸

附記 隅田川景勝

〔附記〕 隅田川景勝

服部元喬南成島道筑ニ寄スル墨水詞有リ、隅田川ノ景勝ヲ數フ。

墨水詞八首。寄島歸徳。

楊柳橋邊柳。下繫鰻魚舟。但憐潮汐速。不關離別愁。

右楊柳橋

西岸武陵花。東岸總州色。春風相送吹。渾見船如織。

右御厩渡

花川開繡戶。雙燕自相求。二八浣紗女。偏能下岸流。

右花川戶

歡喜龍山廟。花間嬌鳥鳴。彫梁挿紙馬。中有莫愁名。

右金龍山

大堤春水滿。相映送春衣。日暮逢公子。不知何處歸。



右日本堤

阿兒何處去。柳絮古江濱。猶自春風起。年々飛著人。

右梅兒冢

停棹春遊子。江堤處々尋。牛頭聽磬入。別有落花深。

右牛頭山

此處王孫遊。烟波落日浮。自看洲鳥白。京國至今愁。

右在五祠

——南郭先生文集

遊歷雜記○嘉陵紀行同。ニハ、隅田川八景ノ詩歌ヲ載ス。

○上此寺。○木母寺。より人の需め、應してむさく隅田川の八景詩歌といふもの

あり。何人の作きるとも辨え、祢ど筆の序よあるに事左のふとし。

隅田川秋月

ままもあき月さへ影をまこゝ川名よしあふゝる水のあふあこ

氷輪關屋照松間。猶見隅田萬頃閑。秋色爲誰移暮柳。古人今夜濕雲鬢。

關屋落雁

かゝりゆく旅茂せたやのさとのへまおりゐて雁のあさる蓬きふ

松間雪雁眼相猜。晁以道擬畫圖開。子細看來霜翰動。蓬蒿影裏又飛回。

潮入夕照

川波浅みたわよあははしをゆりやまつきかまろよ夕日さに宿

潮入沙汀溯激流。斜陽影動竹扉幽。隔以終日無人到。只合魚網泊小舟。

橋場夜雨

しつりなる夜半もはしはのわさしもり蓑の雫よ雨浅あるなり

橋場廣陌自幽々。獨濕黃昏立渡頭。添得瀟湘楚客思。夜來風雨一簑舟。

待乳晴嵐

まつち山松のあふしもゆふこえてをみゝ川原よかきみそれ行

嵐遮埋没聖天宮。直逐狂波江上風。時至隅田湖霽後。金龍山顯日頭社。

駒形歸帆

一かゝのゆきゝのしきさあはかゝの川あゝ遠くかえるほりふ絲

商舶歸帆掛暮天。西風吹送駒形邊。潮平安泰家猶近。舟子收竿肆市鄭。

洲崎晚鐘

ぬちあむる霧もこふらきいず崎のまやしをもきてむゝく入相



鐘響江天波激時。客船宴罷攢眉歸。一聲何處菴崎畔。斜陽影裡自迷離。

富士暮雪

目よ遠き雪をもみよまみよ川入日のあとのぬしのおも影  
日暮水光波底清。富山戴雪影正横。隅田湖面長房術。縮得駿州百里程。

〔参考〕 木母寺寶物詩歌

○梅若山王社。別當梅柳山木母寺略。○中

寶物略。○中

近衛信尹公御詠草二首 一幅略。○中

梶井御門跡御詠草 一幅

みせとへはこよへぬ月の角田川みやこの友と見るかひもあし

照高院宮御詠草 一幅

かへるさの關屋の里よやともあきあきよ川原のありぬ詠よ

曼珠院宮御門跡御筆 一幅

角田川即事

良 尙

夏天波靜角田川。棹子揚聲泛畫船。尙昔業平遺愛地。風流千歲至今傳。

聖護院宮御詠草 一幅

都鳥名よこと、いんぬるさともこまるはかりの々ふの船路よ

詩歌帖 三帖

詩歌をべて數百葉あや。今その中十の一を左よ抄出せ。

近衛信尹公

うたことをおもひいて、や古塚よ都のたより松風のこへ

あよしおふそのいよしへの都鳥今いとふよもあやあしやと

梶井盛胤法親王

こと、いん鳥たよきほていと、しく都よとをきにまよりのかあ

水瀬前中納言氏成卿

角田川よいよりて、

名よしおふよよおおもい、都鳥されよこと、へせい、ことへん

梅若寺よて、

哀てふ昔おもへのこり袖のうへよもいれぬ梅の雨ああ

梅若のまかあるしむかしあれとあまれの今もお取し物りあ



山本中將實富卿

角田川いまよきはなむ都鳥おもふまやこのことやかさると

四條中將隆音卿

いさといそんあきりぎの名の都鳥角田川にこそあるとも

烏丸前亞相光廣卿

これも又手よとる筆のまみり川ぎめてあさある名やありすへき

二條攝政康道公

きてまきも植し柳のあるしるも春風わさる角田河原よ

五條前亞相爲範卿

やよひの廿日あまり侍りて、

まより川浪路の春を尋來てむとの言葉此花をましりあ

下冷泉老中將爲景卿

立かへる日りまのくふりあまよ河都鳥にも事いとましか

難波中將宗量卿

鳥此名此まやこまされて角田川まや瀬よありすうまふ船人

油小路前亞相隆眞卿

角田川をこし<sup>○脱</sup>字。我よ都鳥よの昔の事かよまん

壬生俊隆卿

あき人をとへま名斗角田川波かよねとぬる、袖あ取

飛鳥井前大納言雅宣卿

いりあれまこ、をいおのり角田川名のまかりの都鳥りあ

有栖川職仁親王

住田川りまぬ御世の波りまにたち居もやまき宮古とりりあ

花山院左大臣定熙卿

た、わさる隅田川てふ是あれや都鳥にも我いとあん

曼珠院良尙法親王

あるしにとうへし柳も朽えて、哀まかりのこる古塚

高松好仁親王

名よ聞てなふこそみつま角田川昔の跡の梅若の塚

花山院大納言



かつとよしあひくは、その青柳や下行水のまきと川哉  
烏丸資慶卿

都鳥ミヤこの人よ立かへ墨田河原をまきやかさく  
角田川むかしを思ふ波のうへに面影うかむ城鳥の歌  
思人をおもひ出たるいましへの哀もふりき角田河りか  
をもふ人を思出せよまきと川今の世までの名よのありまし  
城鳥昔の跡よ角田川ふりき情をあるやしとにや

右四首照高院御門跡道晃様、飛鳥井大納言殿雅章卿、烏丸大納言殿資慶卿、  
日野大納言殿弘資卿まきを奉り、よゆしきよし御合點被成下歌あり。  
延寶二年甲寅十月十一日  
源姓佐々木氏  
田村四郎兵衛尉圓方

冷泉爲村卿

追善

いよしとし散ぬる梅の跡とへまふやのあふぬ春風そふく

又

青柳のいとくる人の袖よまきと川の雨のふるはりのまへ

追善即興

青柳のいとまかあくもみとる、まとしふる塚乃もとを尋て

武者小路實陰卿御門人依田淡路

角田川名よなりまきとる水鳥よ我もとま、やあらぬ都を

鍋島備前守直隆

寛文十有三夏の比、まきと河よまふて侍りしはゐてよ、

まきと川をむてふ鳥の名もはとく心はくしのいり、とのあん

仙臺中將吉村

享保十三年五月廿五日まきと川を角田川よきとる、梅若丸此塚を見

てよ免る。

あまれなり幾世の秋りふる塚よ朽木の柳残るあるしと

梅若丸の塚よむ免柳をうへとるをま侍りて、

うはもまきし昔をとへまむ免柳陰をあるし此春のふる塚

みちのくよ有るとまきと川よて筏をま侍りて、

角田川早瀬のふまひひはなきをいりて筏のなまにまつまき



ミヤことりのおま居るをきて、

まこと川名よおふ鳥のあまとてもあふぬ昔のいりてとのまし

木母寺よ行て昔よりよみ置る詩歌とも見侍りて、

と茂りらぬ筆のまさひも今の世よ残をそくなき跡おしそおもふ

本多越中守

なく涙柳よ残る雨の脚

瀾

洲

津輕左近著高

おく霜の色よなりぬる初尾花隅田川原の波と見るまて

秋月左京種武

ありに猶宿をもとめん角田川詠もるなき水のあふ浪

秋月左京室東籬

はるくときとまこと川原を尋てや波のかもたむりしとふく

那須與一資直

来てまきも關屋の里乃かき尾花まねくともなく人をなまふ

松平伊豫守綱政

やとひのまゑはりま木母寺よまうて、

おもかき霞よまきえし隅田川なりれての世も花よ戀しき

寺前比梅をなりたて、

世とてふり梅のかはらぬ形見よて春をとふふ野邊の古寺

春可

慶長十五二月十一日初ゑ一見の刻つあぬことをは、あさるや御

覽の旁様御さらひ此種とや。

こゝに來てとへもあわれの涙川筆をのこまのまみと川なり

保睦

寛永十七年五月八日

曇なき御代よひかれて角田川ふと、ひこゝの渡りせんとい

無名氏

寛文丁未題木母寺

雲愁水咽隅田濱。都鳥千載呼名久。今日始經梅弱墳。空梳綠髮風前柳。

佐川田昌俊



角田川の古塚は柳のくちて春風の残るをきゝて、

古ことも残る柳の絲たへて春風のミぎ空よしふる

戸田茂睡

隅田河袖こそぬるき限りなくと浅き昔の浪乃名残よ

箕田喜貞

をまゝ川といふ五久字を句の上よおきて、

すきし世よ見やこの人のたはきりるりゝととなるやまゐるの柳よ

狩野常信

古塚のあるしは柳心あらまいさことゝんむりしあるを

成島道筑

角田川名よおふ鳥乃跡ふぞかへらぬ水の昔をそとふ

幸頌

元文二年彌生廿三日人々よまゝめて手鑑乃をいをてらしおさ

言の葉は猶つもるらし世々の人もこゝ後をそめしきまゝ河原よ

免侍りたるはむてよ、

五十首の和歌集免侍りたる時よ免る。

典海

隅田河よゝになりれし歌人のことのもそへまうつをおもかき

典海の當寺第三十九世の僧なりと云。——葛西志

氷川社八景

七月、元○元文五年(紀) 元二四〇〇年。誠庵井上守眞等、小石川氷川社○市内小石川區。ノ八

景ヲ撰ミ、詩歌俳句ヲ作ル。○小石川志料。東京通志。

氷川社八景事蹟

氷川社八景 小石川氷川社ハ、相傳ヘテ、

氷川神社

小石川區小石川林町ニアリ。域内九百坪。舊素盞鳴尊ヲ祀ル。社傳云、應永中僧

聖岡西蓮社了譽。之ヲ創建スト。明治五年壬申十一月村社ニ列ス。祭日九月十日ト

ナス。氏子千戸アリ。境内杉榎等ノ巨木多シ。——東京通志

ト爲ス者、元文中之ガ八景ヲ撰ブ者有リ、小石川志料ニ左ノ如ク見ユ。

八景詩歌

氷川八景詩歌并發句序

江城之北、有一神祠奉稱氷川大明神。是地也幽邃而明潔、一眺望則前野渺々、夕鶴



卜閑、長橋悠々、行客連袖。富士峯之留雪、護國寺之傳鐘、接于耳目之景、不遑枚舉。有小森觀三、予學侶也。天性真篤、而頗好詩歌、標揭八景之題、命畫工圖其大槩、使各賦詩詠歌、俳句附之、謹表于神殿。嗚呼公之爲志、仰慕神德、篤矣深矣。因願拜謁之士庶、弄景物、愛詩哥、且暮不絕。拜趨積年、神威日盛、而爲邑里富庶之福焉。請予序、不得已而序。

氷川森雨

洛陽晚進執中齋井上守眞

氷川華表最巍々。一道石階何翠微。松樹森陰不知雨。往來初覺濕春衣。

直秀 林美作守

神垣ノ森ノ木ノ目モ春ノ色ニウチ霞ツ、雨ソソホフル

竹塢 服部金左衛門

社頭景色自蕭酒。坐見水橋幽致加。相對閑情忘世慮。忽々終日行人稀。

寸草 芥川小野寺

ユク人ノ袖コソニホヘ散シキテ花ヲワタセル春ノ河橋

實名 青山信濃守

五雲霞翳遶宮牆。松竹冷々高八琅。波靜龍池歌婉女。清風聲急晚來涼。

君近 望月宗兵衛

夏モ今忘ル、計リ池水ノミトリ涼敷神ノミヤシロ

極樂清井

長恭 堀因幡守

蕭々梵宇幾春秋。極樂井清滿闊浮。洒脫五塵三毒垢。微涼之外別風流。

友賢 龍崎

イニシエノアカ井ノ水ノソコ清ミ見ルニ心モ先ソ涼シキ

護國晚鐘

素隱 吉益玄忠

秋高護國寺櫻邊。隱々華鯨斜日前。一百八聲破雲後。人情遠近拂塵緣。

齊之 能田貞菴

イト、サヘ淋シキ秋ノ夕暮ニ猶モ數ソフ入相ノカネ

野田夕照

吉章 吉山多宮

藜杖閑餘乘落暉。秋郊遙見稻梁肥。風侵肌骨感情切。田路無人有鷓飛。

陳皓 三宅及山

心ナク誰カ聞ステ、過ルラン野田ノ夕ノ鳴ノ羽ネ垣

船繫松月

輝之 小森觀三



往昔何人云繫舟。傳名空有歲華流。松寒高掛一輪月。蕭索景光不似秋。

光豊 山崎文右衛門

サシツレテ月ニ語フ友舟モ爰ニ繫シ松ノイニシヘ

柳溪 中川新三郎

富士晴雪 富士晴景四眈豊巔雪高輝落照中。只恨不看三保浦。任他水氣映清空。

光隆 山崎平右衛門

雲霧ハ晴ル、緑ノ中空ニフシノ高根ノ雪ソサヤケキ

八景作題圖并發句奉納成就之處。文略。最尾ニ、

神垣ニカケシ誠モミシメナハ幾世ノ焔カ殘ルウレシキ 輝 之

于元文五庚申歲七月吉日

誘導東都北隅小石川白丘愚生源姓

無適齋小森觀三謹書

附記 江戸流行物

武江年表延享二年春江戸流行物ヲ集メタル句集時津風ヲ引用シテ、雜司谷會式飾物、同百度參、同風車、志道軒講釋、中野桃園、富岡吹矢、笠森稻荷、正燈寺紅葉、牡丹屋敷、兼平櫻熊野十二所等ノ名ヲ擧グ。當時參詣若クハ遊觀者ノ多カリシ

ヲ推スルニ足ル。内、雜司谷法明寺、中野桃園、富岡八幡、正燈寺紅葉ハ、既ニ之ヲ記セバ、今擧ゲズ。

笠森稻荷

笠森稻荷 ハ、

笠森稻荷社 三崎町

諸人瘡の病をいのにあるしありとて、土にてつくりし團子をおさむ。境内門前に茶店ありて團子を賣。

——再校江戸砂子

牡丹屋敷

牡丹屋敷 ハ、牛込見付外神樂坂下ニ在リ。

御府内場末往還其外沿革圖書ニ據レバ、享保十四年ニ始リ、寶曆十一年終リタルモノ也。即チ、

同保。十四年十一月神樂坂角明地之内東北之所牡丹屋彦右衛門拜借地ニ成。同保。十七年三月前書牡丹屋彦右衛門拜借地續南之方同人鶯置場拜借地ニ成。同文。三年五月牡丹屋彦右衛門拜借地續明地不殘猶又同人人參植付場拜借地ニ成。寶曆十一巳年九月牡丹屋彦右衛門拜借地之分不殘被召上。御府内場末往還其外沿革圖書

牡丹屋舖



近きころまで牡丹を多く作りしものありしかは、此名あり。  
江戸塵拾、牡丹屋彦左衛門といへるもの住しよりの名なり。

——江戸紀聞

兼平櫻

兼平櫻 江戸紀聞小日向志等二、

新坂

今井坂といへるの誤なり。坂のうへ蜂屋氏の屋鋪の中ニ兼平櫻と云大木あり。○中略。

兼平櫻

其前の上ニのすることし。南向茶話といへるもの、此處も金杉と稱す。此邊舊名金曾木村と云。古河公方の家人豊前山城守居住の處なるよし、その家傳ニあり。按するに、此地むゝし今井四郎兼平か居地ニて、兼平か植し櫻ゆへ兼平櫻とて大木あり。又兼平稻荷といふ鎮守ある事いふかし。是の豊前山城守同き四郎か宅地を今井四郎と誤りたるなるへし。豊前四郎へ北條氏康の書狀ニ、庭前の櫻送られし謝禮の返書彼家ニ今もありと云。然れど此所ニ多く櫻ありとミゆ。今井か城跡の赤坂ニあり、赤坂の條合此所ニのあらず。此地を

の後の本多飛驒守屋敷なりといひ傳ふ。

——江戸紀聞

兼平櫻の新坂の上蜂屋七兵衛か宅地の内にあり。江戸志に南向茶話を引ていふ、○中略。上或云、是も庭前ノ櫻ノコト。正しく此地の事とおもはれず。別に故有へし。今井か城跡の赤坂に有ともいふ。右にいへる金曾木村の、或人の説のとく此地にのあらざるべし。彼山城守の子か祖若狹守綱信か姪婿にて、其子長九郎母方の姓をゆつられて、今の子孫同族のやうになり行しにより、彼家の文書も見たりしか。江戸廻金曾木の郷にて金曾木の郷知行すへきよし、永祿五年四月十四日氏政よりの文書有のミ。とに山城は古河御所へつかへて下總にありしよしなれ、近藤氏の説もまたうけかたかるべし。

——小日向志

熊野十二  
社權現

熊野十二所權現社 享保中中興スル歟。

十二所權現社 別當成願寺持 角筈村

社傳ニ云、十二所權現の、本宮の證誠殿伊弉尊、中御前の人早玉速玉雄命、西御前の又宮哀解雄命、若一王子宮の天照皇大神、相殿是を上の四宮と名付。禪師宮の忍穗耳尊、聖宮の瓊々杵尊、兒宮の彦火々出見尊、子守宮の土壇山姫

霸都時代ノ遊園

二五九



命勸請、十五所宮の神水の岡象女命、飛行宮の五穀神。雄彦靈命、是を下四社と名付す。へての熊野神と云。爰ニ應永の頃鈴木九郎某と云者、流落して武州中野ニ來り、妻と共に爰ニすむ。夏年あり、家貧しといへとも、若一王子の生土の神なるを以て、宅のほとりなる丘陵を藤代山ニ擬し、小祠を創建し、日々まうて、尊信いと深し。後ニ家富さかえしかり、當社を再建し、十二所の神をことごとく勸請し奉る。是應永十年癸亥也。遂ニ世の人中野長者とを稱し、是全く當社を崇敬せしゆへを以てかゝる惠ニ預るところ也。考かるに、草創より以來三百十歳を經、世うつり物あるは、奉祠の寺主も移轉數世して、まゝ闕主の時も有。故ニ寺寶等ことごとく分散し、社務もいつとなく民間の手ニ屬し、古への圭田神領今わつかよ十の一を存し、祭典常ニかく。村民こそつて奉祠を舊寺に復せんとする志あり。ついで里長某成願寺の住僧と謀り、事なりしかり、共ニ公廳へうつたへ御免をかうむ。享保甲申年丙午より成願寺の奉祠宮となす。ぬこゝよ於て現住大川和尚てつから荆棘をはらひ、參道をひらき、神供嚴重、祭禮おこたる事あり。ゆへに神光やうやく國中ニ輝き、感應遠近ニ聞ゆと云々。

熊野權現の淀橋より五町ほと南の方角管村のうちあり。世ニ十二所と云、すこふる佳景の地也。豎四丁ニ二町計の池有。池のあゝへは宮あり。古への役行者の宮ある故ニ、此處を角はつといふよし。今の役行者の宮を辨才天ニおしり。宮の後ニ瀧あり、萩の瀧といふ。紀州熊野をうつしたる舊地あり。庵室あり、中野成願寺の持なり。江戸志

——江戸紀聞

〔參考〕 公衆遊園ト花卉

延享二年九月廿五日將軍吉宗德職ヲ子家重德ニ讓リテ西城ニ移ル。吉宗專ラ實用ヲ尙ビ、奢侈ヲ禁ジ、自ラ泉石ノ樂ヲ擅ニスル如キコト有ラザリシモ、士庶ノ遊觀慰安ニハ頗ル意ヲ用ヒ、隅田堤ニ櫻桃ヲ栽エシメ、飛鳥山御殿山及小金井ニ櫻、中野舟堀ニ桃、柳原堤ニ柳ヲ栽エシメタル類、其主要目的ハ、實ニ公衆遊園ヲ設クルニ在リタリシ也。當時公園ノ稱無カリシモ、明ニ公園ノ實有リタルヲ見ル可シ。顛末具記シテ各條下ニ在リ。同時ニ吉宗ノ草木ヲ培植セシムル、亦實用ヲ主トシタル者ノ如ク、金澤城主前田綱紀稻葉宣義水。若ヲシテ物産ヲ類聚シテ庶物類纂ヲ編セシムルヤ、吉宗醫員丹羽貞機伯。正ニ命ジテ之ヲ補正セシメ、或ハ貞機及野呂實夫元。阿部某女。植村政勝平。佐等ニ深山幽谷ニ



探藥セシメ、或ハ朝鮮人參ヲ吹上苑ニ栽エシメ、鳥見役西脇某○十郎ヲ吹上添奉行トシテ樹藝ニ當ラシメ、或ハ濱苑ニ甘蔗ヲ栽培シテ沙糖ヲ製セシメ、或ハ吹上苑ニ甘藷ヲ作ラシメ、或ハ御殿山芝新堀ニ櫛ヲ植エテ蠟ヲ製セシメ、又所々ニ薏苡ヲ作ラシム。而モ君子ノ徳ハ風也、小人ノ徳ハ草也、上ノ好ム所下之ヨリ甚シク、爲ニ少ナカラズ園藝術發達ノ氣運ヲ助長セシメ、花卉ノ品種ノ如キ、是頃ニ至リ著シク増加シタル者ノ如シ。

延享三年丙寅○紀元二四〇六年是頃ヨリ橋場眞崎稻荷社○武藏國北豊島郡參詣者多シ○新編武藏風土記稿、江戸名所圖會、江戸塵拾、武江年表、遊歴雜記。

眞崎稻荷社

眞崎稻荷社

眞崎稻荷社 延享三年九月十五日前將軍吉宗○徳ノ三子宗尹刑部卿。播磨和泉甲斐武藏下總下野ノ地十萬石ヲ賜フ。其橋場眞先稻荷社ヲ信仰シテ社殿ヲ再建スル、或ハ是頃ニ在ル歟。同社ノ參詣者遂ニ漸ク多キヲ致セリ。寶曆ニ至リ殊ニ繁榮ス。

神明社○武藏國北豊島郡地方橋場町。中略。

攝社眞先稻荷社 神明社東一町許ヲ隔テ、別ニ一區ヲナセト、神明除地ノ内ナ

リ。幣殿拜殿建續テ、頗ル莊嚴ヲナセリ。社傳ニ據ニ、昔千葉介平兼胤カ家ニ傳ヘシ神璽アリ。此奇瑞ニヨリ、數ノ戰場ニ先懸ノ高名ヲ得サルコトナシ。其子季胤ニ至リ、神璽ヲ常ニ膚ニ著ルコト恐アリトテ、稻念魂ノ神像ヲ鑄サセ、戰場ニ出ルコトニ草摺ノ内ニコメシト云。天文年中千葉守胤石濱ノ城主タリシ時、此地ニ宮柱ヲ建、カノ神璽ヲ祀リ、季胤カ鑄サセシ像ヲ前立トシテ眞先稻荷ト崇祀ルト云。其後往々祈願ヲナス者アリシカ、延享ノ頃ヨリ殊ニ渴仰ノ輩多ク、其頃一橋宗尹卿信仰アリテ社頭ヲ再建シ、祈願所トセラレ、御子豊之助君儀同三司治濟公御幼。仙之助君○松平重富。疱瘡ノ時、酒湯モ當所ヨリ捧シト云。今幣殿ニ掲タル鶴鷹ノ額ハ、宗尹卿浮田邊放鷹ノ時、當社ニ祈念シ、鶴二羽マテ得ラレシ時、納ラレシモノナリトナリ。又將軍家○徳川家齊イマタ豊千代君ト稱シ奉リシ頃、御參詣ノ時、神符ヲ捧ケ、後御養君ニ立セ給フニ及ヒテ、御懷中ノ御守及ヒ神符ヲ奉リシト云。此社前荒川ノ岸ニテ、毎年夏越ノ祓ヲナス。其式京加茂ノ祓ニ異ナラスト云。

新編武藏風土記稿

一、眞崎の稻荷の橋場のわさし北壹町よして、總泉寺の北うしは隣る、こま浅石濱の神社と稱は、むかしいつの頃よてやあり々ん、伊豆國君澤郡眞崎村の



稻荷の官位をとらんと東武へ出し、因縁やありけん、不圖此地よと、はりてより小社を建、本國の村名をそのは、眞崎の稻荷とよむ。今豆州君澤郡眞崎村の宮の空房といへども、官位のミを祭りて、眞崎いなりと崇むるとなん。され、當社の仁王門を入れて、右は社向は神主住り、居宅又廣くとして庭中の林泉尤よし。扱當社の豎額眞崎稻荷大明神と書さるる、神祇官領卜部朝臣兼雄と認めさる。此本社の前に大なる榎の横さり生じて、社の庇をつらぬきぬるは神木になん。或人の曰、當社の後に諸願成就とのミ四字ありて名印を書さる横額と、寶齋榎本其角が自筆なりと教へしは、繪馬堂及び宮のうしろ悉く度々罷りて探せしりど、更は似寄の繪馬も見あさらず。虚談なるもや、又の神主方へ取入置しや、但し本社の内にあらずしき繪馬二つ懸さる。若のこまらるを推度しいふにや、かさねて穿鑿をべし。且又稻荷の西北壹町ざりに、神明宮の社地の甚閑寂としてもろく、の古樹繁茂し、夏の頃の納涼に可ならん歎かたのらに野狐乃住る穴あり、眞崎いなりの奥の院とぞ。志願あるもの狐乃好む食物を用意して此穴際より來り、神主の御出くと手を拍ば狐出てこきを食ふ。食ざるの願かなはばなんと、是は臆を廻す巷談あきども、取用ゆるに足ざる説

なきは省のみ。此神明宮の鳥居の前より西南を眺望にれば、總泉寺のうしろより南の淺茅が原まで田は畑は耕地一圓は見渡し、鄙の風色又一品なり。

一、此眞崎乃土地の豆腐を賞し、田樂を名産として數寄屋めきし、酒樓建集ひ、墨田川、宮戸川等の風景を座しなごらなごめて、景望は飽事なく、予幼ふして十歳内外の頃の、兩親と度々、爰に道遊をし、その頃の此地殊は賑はしく、酒樓饅店軒をならべ、都鄙の飄客爰は宴遊をし、五十餘年乃星霜古し、今、此地一同は寂きて、甲子屋と聞えしも名のみみて、漸く三四軒墨水の長流を居ならら景望さるの茶店あきども、秋冷より初午の頃までの雨戸引さて、墨田堤の櫻乃頃とても、おのく無下は手を空ふし、閑暇なるの憂世の浮沈懷舊をくなくらば、只愛すべきの此地の眺望、取分ましばのこさしの風色ぞかし。東面して遙に川向ふを見れば、墨田堤を人の行ちがふ、又耕地遠村乃打晴さる、或は遠山のかきめる、又は兩汀の潔よく、舟船の疊互さる、扱は舟待さる藁屋乃川向ふに詔しく見ゆるの、最も古雅なり。彼もろこしの王勃が十三歳として滕王閣は道遊し、長江の流きをなめて、懷舊乃餘り七律一首を賦さしも、斯やらんと感慨を催し、天然の風光の見るやどのもの一々みな面白し。渡口黄昏ならんと欲して



歸人舟を争ひて喧しといえりしも目前まで、双方の岸より舟待せし人、わき乗をくまじの風情など實も風景の勝地といふ處し。風流を樂める雅客の、かゝる場所を口ざさとの骨髓なるべし、ふゝろある人に見せむや、津のくよ乃難波あざりとよましぞあさまる哉。風雅は疎き俗客の類ひも、無下は見捨るぞ殘多し。○中堀八郎兵衛の、隱者となりて此わさしの川端に居をべ、堀雲泉と號し、和歌をのまなくささるる、此日此隱寮をとむらひ、絶て久しき出會も取まどし、嘶しの果しなく、彼あゝみ昆爐の煎茶より、用意の薄茶まで相互ひに啜し盡し、木母寺へも行ぎして止め、此日の遊歴を殊も面白かりし。○文化九年。

——遊歴雜記

其昔より淺草立花家の下屋敷に稻荷の社有て、爰に年經たる狐あり、名を太郎といふ。藩中には皆人の知たる事也しが、いかなること有てや、文化亥年七月五の頃より俄にはやり出て、參詣の人群集することいふばかりなし。平日は參詣を許さず、もし日參を願ふ者あれば、傳を求て切手を貰ひしに、此人數も鮮からず。朔日十五日廿八日午の日計は許して參詣あり。其日は明六日より門の明るを待て群集し、道には茶屋又備へ揚豆腐をひさく者並居て、所せきに參詣の群集

押合て、茶屋賣物の見世を押倒したることありき。又願成就の禮とて、木綿の幟を納ることは、屋敷の入口より社まで左右に立竝べて、幾千本といふ數をあらす。後には幟を納る事を禁ずれども、なを忍びて納る者多し。三日午の日の群集すること、其あたりは左も有べきことなれども、淺草御藏前の通り、湯島切通しの邊まで、往來常よりも倍せり。昔より流行神の有しが、かゝる繁榮なることは、いまだ聞ざる事也と人々申合り。其繁榮翌年の暮の頃より次第に減じ、今は三日午の日にも其盛なる頃の平日の參詣にも及ず成にける。奇異の事也。

——其昔談

眞先稻荷明神社 同所場。○橋隅田河の流は臨む。祭神倉稻魂一坐あり。○中此社前の名よくあふ隅田河の流溶々として晝夜を捨て、食店酒肆の軒端は河面は臨むて、四時の風光を貯ふ。殊更夏の日の杯を流し洗つて炎暑を洒た、秋の夜は中流は掉さして月を掬ふ。春の夕妖艶たる須田堤の花盛を、體々たる白髭木母寺の雪の朝比眺望も共々奇々として、實は遊宴の勝地なり。

——江戸名所圖會

眞崎田樂



眞崎稻荷の茶屋よて焼所、此所の名産あり。とこり成る哉、吉原の豆腐を以て田樂となす、甲子屋と云へる者過し寶曆の始、是を賣。

——江戸塵拾

眞崎稻荷はやり出て、田樂茶やの出來たる、我二十三歳寶曆六年の比なるへし。鳳岡先生の會日に其はあしを初て聞けり。江戸町の名主歟先生の門人よて、其男か別る甲子屋と申茶やの田樂のよしと申之など先生に語りしを聞けり。其後大に繁榮し、青樓の婦人をいさなひて遊ぶ人も多かりき。向ふ島の秋葉は今信仰薄くなりて淋しけれと、茶やの賑ひの替らす。眞崎の神威ともに茶屋もおとろへたり。眞崎の手前の角ト若竹後袖すや後袖す。又甲子屋、川口や、い糸や、仙石や、きりや道を隔て、八田屋など、いづれも繁昌なりき。

——後の昔物語

——武江年表

〔附記〕 延享頃ノ遊觀參詣所

延享三年ノ江戸内めぐりニ據レバ、當時ノ遊觀參詣所左ノ如シ。

神社佛閣めぐり

山王權現 永田馬場

祭神江州日吉と同じ。太田道灌江府に住ぐる時、文明年中に始めて星野山よ

附記  
延享頃ノ  
遊觀參詣  
所

勸請せり。回祿の後、今の溜池乃築山に移せり。

平川天神 かうじ町三丁目

菅神也。太田道灌川越より勸請有、平川口に在しを此處に奉移、仍る近所平川町有。

八幡宮 市ヶ谷田町

太田道灌勸請也。神體甲冑を帶給ふ。

牛頭天王 四ツ谷寺町

祇園の社同體之。

雄峯山善勝寺 四谷傳馬町

禪宗開山青繁和尚。

氷川大明神 赤坂一木村傳馬町

武州所々に在。今俗小六明神と云。日本武尊の垂跡成と云々。祭禮六月十五日。

聖堂 神田御茶の水端通

元祿年中御建立、元上野に在之。



神田大明神 神田此所湯島二丁目之。

大己貴尊也。俗平親王將門の靈神と云々。

牛頭天王 神田明神の社内

祇園同體也。祭六月。

天満天神 湯島

太田道灌造營菅神之。

牛天神 上野黒門脇

五條天神也。少名彦命也。菅天神なごぢ。

東叡山寛永寺圓頓院天台 忍岡

武州上野忍郡。寛永年中慈眼大師草創。

元三大師 法華堂 常行堂 中堂 一切經堂 雲水塔 大佛 清水

寺尊惠 山王 不忍池辨才天。

忍岡稻荷 上野

此社の太田道灌勸請の靈地也。本社の洞の内より立せ給ふ。  
清水稻荷 上野

昔弘法大師修行の時、此所にて獨鉢を以地を堀給へて、即清水湧出より、依て稻荷を勸請して、清水の稻荷と云。

神田山幡隨院新知恩寺 下谷

元和年中幡隨意上人開基、浄土江戸五ヶ寺之内。

廣徳寺 禪宗 下谷

宗芋禪師開基、天正十九年小田原より江戸へ引移。

妻戀稻荷 湯島天神道

縁起不知。坂有。其下を妻戀の橋と云。

報恩山麟祥院天澤禪寺 本郷春木町後

稻葉氏春日局寛永二年建立、妙心寺派江戸四ヶ寺之内。

不寝權現 千駄木

糸まとい大黒天神を勸請あるまや。

七面大明神 新堀三崎

本地七星妙見大井。

此先道灌山新堀山と云。道灌城跡と云。



長耀山感應寺天台谷中

開山日長聖人前法花宗、今天台之。

瑞林寺法花

身延末寺。

諏訪大明神 淺草諏訪町

此御神の事代主の御弟之。

鳥越大明神 淺草鳥越

何きの神を奉崇哉、俗平親王の骸といえり、秀郷を相馬より追々け來り、安なる溝を飛越とてむくろをまざるよし、依て飛越明神と云り、神田築戸鳥越を將門の骸の説ある、如何。

第六天神 淺草御藏前

此社開基より八百餘年、及ふと云、面足惶根尊を尊崇る所之、天神第六の御神なきの、第六天神と稱し奉る、第六天の魔王と云、あやまり之。

駒形堂 淺草駒形

馬頭觀音也、遊山舟其外通行の舟着。

金龍山淺草寺知樂院天台 淺草

觀音堂正觀音之。

推古天皇御宇、此所へ移せ、往古海より上々を給ふ靈驗のくごんをんあり。

地内神明社 五重塔 三社權現是くごんをんなり。 辨才天

彌惣左衛門稻荷 嫗々池寺内東明王院の庭有。

妙祐山幸龍寺 淺草寺町先

開山日幸法花宗。

東本願寺 淺草寺町

教如上人開基、一向宗。

田島山誓願寺花樂院 淺草寺町

東譽上人開基、本尊彌陀、春日作。

江北山寶聚院清水寺 淺草寺町

天台慈覺大師草創、觀音、大師一刀三禮作。

藥王山醫王寺東光院天台 淺草寺町

慈覺大師草創、本尊藥師、春日作。



西福寺淨土 淺草

貞譽上人開基。本尊安阿彌作彌陀。

大雄山海禪寺 淺草

平親王將門建立。中興覺印和尚開基。

高龍山法恩寺 淺草

聖心坊開基。往古の下の總飯沼あり。

聖天宮 淺草眞土山

齋藤別當實盛守本尊也。いつの比り此所勸請を。俗金龍山と云。

山の宿 聖天町此所より日本堤吉原への道。

總泉寺淺草末 石濱村

學宗和尚開基。曹洞三ヶ寺之。

此所正覺院と云ふ高尾紅葉とてあり。吉原三浦や二代目の高尾の塚の印  
に植し紅葉之。

愛宕大權現 所を愛宕と云。

山城愛宕と同じ。別當圓福寺と云。

萬年山青松寺 愛宕下

太田道灌開基。曹洞三ヶ寺之。

烏森稻荷 日比谷愛宕下之。

俵藤太秀郷建立。今既に八百年餘なまきり。森をうらを森と云。

飯倉神明 芝飯倉

寛弘年中あつゝに詔宣の事有て。此所に奉崇と云。

三縁山増上寺廣度院 芝

西譽上人開基。關東十八ヶ寺談林總本寺。本尊運慶作。

金地院 西久保切通

濟家五山惣録也。

光明山天徳寺和光院淨土 西久保

天文二年稱念上人開基。

西谷山大養寺淨土 同所

慶長年中西譽上人開基。

八幡宮 西久保



勸請名知。

八幡宮 芝田町八丁目

正保年中勸請神體渡邊綱ヲ守本尊と云り。俗ニ云三田八幡なり。

田中山西應寺淨土 芝金杉

應和元年明堅上人開基。本尊惠心作。

島岳寺 芝高輪

門庵和尚開基。曹洞三ヶ寺之。

寺内ニ四十七人之石塔有。

東禪寺 芝高輪

靈庵和尚開基。妙心寺派江戸四ヶ寺。

歸命山如來寺大日院 芝中町

寛永年中但唱木食建立。天台宗。

奥籃寺觀音 三田

此寺の住持法譽法師が長崎より有し老女夢のつげより依て授く。御長六寸餘の尊像。

萬松山東海寺 品川

澤庵和尚開基。寺中致景よりして、泉水假山の眺望不斜。大徳寺末寺頭之。

海照山品川寺普門院 品川

開山弘尊。本尊水月觀音。

高野寺正覺院 二本榎

弘法大師四十二歳の御影自作。高野寺ト云。

龜子山善福寺一向宗。麻布一本松

了海上人開基。

杖いてう、往古親らんの杖を立てし其杖となん。

氷川大明神 同所

是武藏國一宮といへり。

紫雲山瑞聖寺 白銀

木庵和尚開基。黄檗派。

目黒不動 目黒

慈覽大師作。獨鈷瀧。



安養院 目黒不動前

開山日長上人。本尊入滅釋迦。定念佛。

祐天寺 上目黒

祐天和尙開基。七月千部あり。

妙光山法花寺 上目黒むん谷

開山日源上人。釋迦堂の飛驒内匠。二王安阿彌作。

前法花。今天台。

七面大明神 大久保

七星妙見大井也。春の遊山多所之。

金王八幡 澁谷

神體阿彌陀。金天櫻有。

南命山善光寺 青山百人町

淨土尼寺。祖師中將姫。本尊阿彌陀。

補陀山長谷寺 下澁谷

開山門庵和尙。曹洞宗。

直指院 白銀原

場譽直指木食。

金杉天神 小石川鷺坂上

右大將頼朝勸請。世々牛天神と云。

無量山壽經寺傳通院 小石川

了譽上人開基。本尊彌陀。惠心作。淨土江戸四ヶ寺之内。

本松山蓮華寺法花 小石川

築戸明神 小日向牛込御門外

俗此神神田明神と同體といへり。

赤木明神 小日向同斷

縁起くこしかたを。

新護國寺天台 小日向

本尊馬腦石觀音像。

若宮八幡 牛込御門外

若宮小路之八幡之。



西勝寺○濟寺

開山水南和尚。妙心寺輪番持。

穴八幡 高田

寛永十三年草創。良昌といへる。此山のふもとに庵をむまむんとて山の上一丈計なりくつしとるよ。少き穴有。内へ入てまきい、御長三寸計の金銅の彌陀の像有。良昌加持し奉りぬ。後不思議あること多く、御建立有となん。

寶泉寺毘沙門天 穴八幡

慈覺大師作、俵藤太持佛之。

目白不動 關口村

弘法大師作、荒澤きり火の不動之。

威光山法明寺 そうしりや

開山日源上人。日蓮御影、大佛師式部卿權僧都作。

同所鬼子母神。

諏訪山吉祥寺 駒込

太田道灌開基。青岩周陽和尚。

白山權現 白山町

加賀白山妙理權現を此所ニ勸請。

若一王子宮 王子村

熊野權現の別宮也。別當金輪寺より五香湯を出ス。

稻荷大明神 王子村

關東八州の稻荷の棟梁よして、毎年十二月晦日の夜、關八州の狐此社の前よ集り、狐火をともし所此人へ此火此とやり様のよろききを以、田畑の善惡を考るとなん。

富士權現 染井

富士權現を勸請を。六月朔日貴賤參詣を。山あり、其上よ社を建。

宰府天神 本所龜井戸

寛文中信祐と云々の開基。

國豊山無縁寺廻向院 北本庄

明曆三年開基。本堂定念佛。

平川山法恩寺法華 北本庄



開山日住上人。忍岡より爰へ移。

太田道灌建立。

牛御前 北本所淺草川通

何の神を奉崇哉。毎年祭あり。

木母寺 角田川

吉田何あし梅若丸塚あり。

業平天神 北本庄

在原なり平の廟所なりと云り。不審。

八幡宮 永代島

寛永年中長威と云法師へ夢中のつけありて建立を。

三十三間堂 同所

京の三十三間堂を移す。元淺草寺町ニ在。

道本山靈巖寺 深川

雄譽松風靈岩上人開基。浄土江戸五ヶ寺之内。

勢至堂 地藏堂 念佛堂

本誓寺 同所

前の馬喰町ニ在。寺内ニモやり地藏在。

永壽山海福寺 同所

隱元派獨本師開基。

西本願寺一向宗 木引町築地

長榮山本門寺 池上

弘安年中日蓮上人開基。御像ハ日法上人作。

九品佛 奥澤

可願開基。上品中品下品彌陀。定念佛。

武州六阿彌陀

一番 三縁山 長福寺 禪宗

豊島 村二番迄九町。

二番 甘露山延命院應味寺 眞言

下沼田 村三番迄十五町。

三番 佛宗山西光院長福寺 眞言

西ヶ原 四番迄十町。

四番 寶珠山地藏院與樂寺 眞言

田島 村五番迄廿五町。

五番 延命山常樂院長福寺 天台

下谷廣小路 六番迄二町。



六 番

西歸山無量壽院常光寺 禪宗

龜井戸村

惣年中行事

正月

三日、元三大師參。

十四日、年越神明參。

十六日、増上寺山門開。

十六日、ゑんま參。

十八日、くさんをん參。月次。

廿四日、愛宕參。月次。

廿五日、天神參。月次。

廿八日、不動參。月次。

二月

八日、事初。江戸中ぐごをつる也。

初午、稻荷參。

九日、淺草第六天祭。

十五日、糸もん會。諸寺。

廿一日、下谷稻荷まつり。子丑辰午申戌ノ年有。

廿五日、糺町天神參。此日御自筆の御影拜也。

廿四日、ひいあ市始。三月迄、中とし、尾張町、十間とあ、町、所々見世をりさる。

三月

三日、芝浦鹽干、

十五日、梅若參。まきと川。

十八日、淺草權現祭。丑卯巳未酉亥ノ年有。

廿一日、御影供。二本ゑの木。高野寺參。

十九日、池上千部。廿八日迄。

四月

八日、諸寺くゝん佛、

十五日、中將姫忌。小松川善導寺。

廿七日、甲市始。五月四日迄、むいあ市の所。

五月

二日、元三大師參。

十八日、藥師參。月次。

十五日、八幡宮參。

十八日、くゝんおん參。

廿四日、愛宕參。

廿五日、天神參。

廿八日、不動參。

六月

朔日、駒込富士參。氷餅諸色市立。

四日、まのゝ祭。

五日、牛頭天王祭。傳馬町御出。

七日、品川天王祭。

十一日、鳥越明神參。

十五日、山王祭。丑卯巳未酉亥此年有。



同日、赤坂明神祭。子丑辰午申戌年有。  
 同日、淺草觀音參。此日むんさゝらといふ事有。  
 十八日、四谷天王祭。丑卯巳未酉亥年有。

六月中の八月末迄、三股兩國橋涼舟出ル。

廿四日、愛宕千日祭。 卅日。水無月積。

七月

七日、立花。東西本願寺。 同日、九品佛參。

同日、七夕祭。 十日、觀音千日參。

十三日、王子祭。 十五日、瑞聖寺せびき。

十五日、淺草藏祭。たまふあり。 十六日、増上寺山門開。

十六日、えんま參。 同日、相撲そうしや。本門寺。有。

廿六夜、又正月。此兩夜鐵砲洲高輪ニゑ、江戸中の老若くんち也。あて月をこる。

八月

十五日、市谷八幡祭。 芝田町八幡祭。但祭年ハ子

高田八幡祭。 深川八幡祭。但祭年ハ丑

同夜月見。江府の諸人三股へ舟出に。花火有。

九月

十三日、深川神明祭。 同夜、月見遊山舟。

十五日、神田明神祭。祭年子より隔年。

十六日、芝神明祭。 十八日、神田神事能。

十九日、新堀七面祭。

十月

五日、淨土宗十夜。 十三日、日蓮御影池上參。

廿日、えひを講。正月十月商家之營ミ。 亥ノ日、亥ノ子餅祝。

十一月

八日、ふいこ祭。諸金工。 廿二日、親鸞上人忌初。

廿四日、大師講。智志大師之忌日之。

十二月

八日、事納。江戸中ニ 十三日、煤拂。古札納。



十七日、浅草市。此日より正月のウッカリ道具を賣初十九日迄。

廿五日、正月飾道具市。此日ハ卅日迄日本橋四日市の廣小路まで小屋を立、一切之賣物を集て賣。

廿六日、もま弓もこ板の市。此日ハ卅日迄、中もく、尾張町一丁目、十間棚、神明前、ウウく町四丁目、浅草ウヤ町、其外所々まで賣。

節分、芝神明參。不忍池辨才天に參。

晦日、芝神明參。

江戸名所いろは寄

い

守宮池 牛込毘沙門堂の庭に在。

井の頭池 四谷中野の先ニ

壹本松 麻布ニ在。まつとめの墓印と云。

いさらこ 芝田町九丁めハ南の方を云。

ろ

六本木 かいらけ町より西の方。

は

簇ヶ谷 千駄ヶ谷とさき村の界を云。

班女塚 下谷池の端榊原殿屋敷ニ在と云。

に

二本榎の木 老ろろ原正覺院の側に有。

新堀山 谷中の後ニ在。道灌ハ城跡と云。

ほ

法眼坂 二番町に在。

堀り冬の井 牛込村ニ有。

星野山 永田町山王權現の山之。

菩薩曼陀羅石 増上寺ニ在。

へ

屏風坂 東叡山より下谷金杉へ下ル坂ニ。

辨慶堀 かうし町邊井伊殿屋敷前御堀ヲ云。

と



道元坂 ちふやかせさりやま行道ニ在。

獨鈷瀧 目黒不動の山あり。

常盤橋 せさりや領の前の入口ニ在。小みそよかゝまる橋也。御城下常盤橋と不可混。

ち

千葉塚 ちくも村總泉寺ニ在。

千葉石 本所龜井戸天神の少過て有。

を

落合の坂 今井村赤坂新丁などより往還の都合。

小栗坂 鷹匠町水道橋へ上る所の坂也。

狼谷 四ッ谷新町を先笹塚と云所也。

面影橋 なるこ宿と中野村との間ニ在。

おとろ淵 兩國橋と三まゝの間を云よ。

大塚 駒込村の先塚の上は不動有。

わ

別の淵 三股は有。爰潮水のこと也。

霞り關 櫻田松平安藝守殿松平筑前守殿屋敷の間を云也。古歌よ

讀る霞り關也。

鏡り池 あさぢり原也。梅若丸の母、我子のいくゑをあくがれ、此所

迄尋來り、我子の死したる跡に菴をむまびるるが、此池

よのそきて我面りけのおとろへさるをきて、其儘この池

に身をなげむなゑくあまりと也。

龜比井 神田をど町有。

海晏寺の紅葉 品川海晏寺と云禪宗寺の後山、一色よみな紅葉也。

雁乃森 愛宕の下いなりの森を云。

鎌り淵 淺草駒形堂の前を云。

甲塚 かやま町牧野殿屋敷の内ニ有。

よ

横堀 淺草川之爰に立堀有。對して横に有。故りく云也。淺草川



を東へ本所ニ至ル川之。

鎧の渡

ちやま町を小綱町へ行渡しを云。古へ平將門此所より來り甲鎧を置ると云。甲の甲塚とて、今牧野との屋敷ニあり。

代々木野

中野の先之。

た

立堀

淺草川を東へ本所ニ至る川筋之。

溜池

江城の西方山王の後之。

玉川瀧

赤坂松平出羽守殿屋敷に在。

高尾の紅葉

葉柴村正光院と云淨土寺に在。そのくま吉原三浦四郎左衛門の女郎二代め此高尾とていと名高き大夫有て、万治乃初方身まありたり、其かゝを今の正光院の内より埋きて傳譽妙心と改名して吊ひをなせり。名女乃名残もいとありまなきの、名よよそへて紅葉一毛と植てあるくとせし、大木と成、人のなつかりしみをうくる色木と成まじり。

つ

杖いてう

麻布に在。親鸞上人つき給へる杖をさし給ふり、榮えて大木となれりと云。

佃島

伊勢佃のやうくの集りて築ゑてさる嶋あれり、りく稱せると云。鐵炮洲之。

綱塚

芝聖坂功雲寺に有。

な

業平渡

淺草竹町を向へ越を渡し之。

中野

四ッ谷の淀橋の先を云。

う

堀り池

淺草の東明王院の庭にあり。いままきとく、まう云傳る。同院。

牛島

淺草川の向ひに下總の内之。

の

野中の井

谷中三崎の邊野中に有。

や



柳の井 湯島天神男坂の下に有。又虎御門の内朽木殿屋敷脇にも

柳の井と云有。

柳島 本所龜井戸の近所之。

ま

眞土山 千住海道之。山上に聖天宮あり。眞土山夕こへ暮ていず崎

の角田川原に獨りをねん。是爰此事之。夏日よりいくむくの遊船を浮めて。納涼のあせをまゝたり。

万年石 品川東海寺に泉水に在。

ふ

富士見坂 赤坂松平出羽守殿屋敷の前之。

富士見馬場 牛込若宮八幡の近所之。

こ

小路町の井 神田明神の内にも有。

御福の井 初の傳通院の内にも在。今の松平播磨守殿屋敷の内之成。金王樓 澁谷八幡宮の邊に在。澁谷金王丸に植置し木成といへり。

古木の枯て新樹之。

腰掛松 目黒不動の坂口にもあり。

幸國谷 市兵衛町に赤坂へ行坂之。

骨塚原 千住礫場に近所一體の原之。

あ

淺草川 角田川之。又三屋戸川共云。

あり羽川 白銀原の先之。今新堀へ續て流。かいつけ町の末の橋をあ

かも橋と云。其むろこうしをなべてありと云。白銀原の先と云。川上をさまとん。

淺茅原 妙喜山の近所之。

葵の岡 虎御門外織田殿屋敷前溜池上へ出る坂の辻番所の脇を云。

さ

櫻川 芝に在。今源助橋の流をあり云と。

鷺の森 麻布元御薬園の先之。宮に在。



三 途 渡

浅草や町を向へ渡る所を云之明曆中焼死するものを舟に積て無縁寺に運ひたる川口なれり初て三途の渡といへると云。

き

行 人 坂

目黒の入口之。

め

妙 龜 山

あさち原總泉寺の前之。梅若丸の母堂をいへる山號之。

目 黒 川

行人坂の下こりりきむ之。

目 黒 原

此よりを上めたる中めくろ下めくろとて打つゝきて廣野之。

み

三 川 島

谷中の後よりあり。往昔三河の諸士供奉の恩賞は給る地なり。

し

清 水 坂

かうし町尾陽公と井伊家の間の坂をいへり。

不 忍 池

上野の下之。辨才天の島あり。

白 銀 原

さきの森此先かなへてり云。

忍 の 岡

東叡山を云。

品 川 の 沖

毎年三月三日鹽干の眺望住よしの沖よむと云。

ゑ

江 戸 見 坂

虎の御門外松平大和守殿と牧野駿河守殿間の坂之。

右 衛 門 櫻

四谷の末に在。此木誠は名木よて春興宴樂不斜此所をかしこ木村と云。

永 代 島

本所の隣之。八幡宮あり。

ひ

し ろ ち り 坂

芝三田功雲寺の前之。

せ

關 口 の 川

目白不動の下に在。水道乃枝川。

す

角 田 川

角田川のむさしと下總の中間之。



駿河臺 小川町の上辻臺之。

御府内外之所

世田谷 澁谷の先之。井伊家の領地。

玉川 池上の北より流て、六郷へ落る川之。

武藏野 世俗よ中野と云を過て西の方よむさく野のそらあり。

矢口渡 荏原郡之。新田大明神の宮あり。新田義興の墳墓あり。

右之外數多有之といへ共、畧之。

池端築地

桃園天皇寛延元年戊辰四〇紀元二四〇八年四月、池端下谷区内築地成り、都人

遊觀ノ所タリシガ、幾モ無ク之ヲ撤ス。享保撰要類集。無名叢書。再校。江戸砂子。塵塚談。江戸眞砂。六十

帖。歷年雜誌。武江年表。

池端築地事蹟

池端築地 傳フ。

延享五年四月二十二日酒井雅樂頭殿〇忠恭〇老中御渡。承附、同二十三日上ル。

不忍池築地家作仕候御届書

大岡越前守〇忠相

書面之趣奉承、知相障無御座候。

辰四月二十二日

能勢肥後守 馬場讚岐守

不忍池築地七分通出來仕候ニ付、右地面勝手次第家作仕度由、受負人其願出、田村權右衛門方々も申出候ニ付、致家作候様可申渡旨、上野執當方々相届申候。依之申上候。

四月〇延享五年

辰〇延享五年閏十月九日、雅樂頭殿に上ル。

下谷池之端築出新町屋名目之儀申上候書付

御届

能勢肥後守 馬場讚岐守

下谷池ノ端新町

右、上野不忍池築出地新町屋家作仕候ニ付、右之通相唱申度由、受負之者相願候間、願之通上野ニて申渡相濟候由申出候。依之申上候。以上。

閏十月〇延享五年

能勢肥後守〇頼一 馬場讚岐守〇谷繁

新都時代ノ遊園



——享保撰要類集

寛延のころ島より西仲丁の裏へ橋をかくる、四ッ橋と云、やがてこぼちとる。

——再校江戸砂子

東叡山の麓不忍池、寛延年間新地出来、根津の方へ橋を掛し、新地ハ下谷仲町裏を根津茅町裏迄池の廻を築こしらへ、橋の辨天堂の後を茅町の方へ、橋を四ッ折にして掛たり。水ようつりて八ッに見ゆ故、八橋と異名せり。新地ハ料理茶屋水茶や楊弓場講釋場瑞龍軒など出たり。其外家居建列ね、非人豆藏迄出て繁昌し、賑てありしか。右新地出来しより、池中の鯉鮒の類多く死しけるよし、宮様の御聞、達し、御心、叶はすして、間もなく取壊、元の如く、あれり。

——塵塚談

下谷忍のすか池西の方奥行拾貳三間程宛築出して、辨天堂の後の無縁坂の方へ橋をかけ、その橋五曲り、よして危き橋なり。築出し、町家を建て、女を置、茶屋多して、賑ひひぬ。寶曆二年夏日照して池水かこく、夫故、大き成ル鯉鮒泥龜皆死す。中よも長さ六尺位の鯉數多死す。くさき事甚敷、築立し町屋へ雨降の節、水上ルを難儀、おもひ、水落しの下石垣をつきたる故、そくはく落て池のうへ平

砂のとしとなり、宮様の御聽に達し、急に町家を崩し、取候様ニ被仰付、町家の者共盆前、俄に家藏を打崩し、思ひく、に引移りけり。目もあてられぬ事、おかし。山も御側坊主、此取次して、山師と馴合し、三人、不殘しくしりける。曾る宮様御存なきよし、神罪ならんか。其節落書多出けるとぞ。——江戸眞砂六十帖  
延享四年三月の頃より、不忍池新築地出来て、茶店揚弓場講釋場等建はらね繁昌し、又寛延二年辨才天の島より、西茅町の裏へ坂橋を四ッ折、よして架は。水ようつりて八ッ、見ゆ。依て八ッ橋、といへり。然るに池の鯉多く死る由、て頓て毀ち取らる。

六月廿二日、寶曆二年、池の端新地の茶屋五十九軒、其外家數餘多引拂せらる。多  
女をかへ置いて、猥成事有しゆると云。——武江年表

寶曆二年壬申六月二十五日、不忍池新地取拂、成。——歷年雜志

去ル延享之末、上野池之端三枚橋際より、辨天堂後通り、あや町裏池之端六七間通り池へ突出し、家作ゆるされ、諸商賣致し、賣女等多く繁昌しけり。寶曆二年申六月早魃、て、右池渴水、及ぶ。鯉鮒夥敷落失し、御門主様御聽ニ達し、御僉議之所、右水落口三枚橋之際、大石を取捨候付、突出し家作地形、あままり候へ共、水



不溝、土用中右之通ニ相成候。畢竟有來候池せず、水存分無之付如斯之、前々之通のことく致候様ニと被仰出、新地悉く所拂ひ、元のことく堀浚被仰付候也。

此節狂歌

突出して損してさきへ池の端あんちきのとくは尾のあき上げ  
辨天も鯉ようき名を立にけり水りあなれいもにしぬまどの池  
床共よけころばさりし大和茶や人目あのはにいけん切ミを  
呼出してけころばしたる鯉ゆへまあんちきのとくまほのりき上げ  
淵も瀬とあまる鯉死の取らいうやこゝを池といあんちきのとく  
鯉ゆへにすゆんと埒を明やしき所てんでみつき出してやる

橋朽不能渡。さつろくけさ橋もなぐよさぬあり。

鯉死浮池上。日てりにて鯉の死ともこるハ時節也。

七町驚動色。大さいのめいどくあるこゑ鳥のたぐことくきこゆる也。

足下如鳥立。され共さし事も羽きゆへなうくへこしてゆく也。

——無名叢書○編年史料收。

是年

元○寛延元年(紀元二四〇八年)。

新堀妙隆寺

北○武藏國庭園成ル。江○江戸志。江○江戸紀開。

妙隆寺造庭

妙隆寺造庭事蹟

妙隆寺造庭

妙隆寺青雲寺及修性院等所在一帯ノ地ヲ日暮里ト云フ。江戸名所圖會ニ「日暮里」新堀ヲ作るを正字とす。永祿二年北條分限帳ニ遠山彌九郎江戸知行の中ニ谷中新堀の名を加ふ。今日暮里ヲ作るハ寛延の頃よりノ事ナリトいへ。感應寺裏門のあよりより道灌山を界とす。此邊寺院の庭中、奇石を疊て假山を設け、四時草木の花絶す、常ニ遊觀ニ供ふ。就中二月の半よりハ酒亭茶店の櫓几所せく、貴賤袖をつとへて、春の日の永を覺ぬも、此里の名よしおへるものならん。ト記スルモノ是也。而シテ妙隆寺ノ造庭最モ早シ。

妙隆寺 略。○上 寶永元年四月相摸國鎌倉小町村妙隆中興日遠此地ニ來テ草創スト云。或云、始ノ起立ハ今ノ地ニアラス、谷中玉林寺ノ境内ヲ借地シテアリシカ、元祿七年コ、ニ移轉セリト。寛延元年ノ頃ヨリ、境内東ノ方ナル岳ヲ開キテ巧ニ庭ヲ作り、櫻躑躅ヲ數多栽タリシヨリ、春コトニ遊歴ノ人ツトヒテ賞翫シ、春ノ永キ日ノ暮ルヲモ知ラサルニ至ルトテ、世ニ日暮ノ里ト號ストイヘリ。サレト日暮里ハ既ニ紫一本ニモ載テ、此園開カサル前ヨリノ唱ナリ。

——新編武藏風土記稿

日暮神社 ○日邊山妙源寺ノ條。○中略。

寛延元戊辰年當社を山上ニ建立せり。日くらしの里ととふふること、當境内の

霸都時代ノ遊園



庭も同じ比はしめて作り、山上の神明へまうつる道など、屈曲して樹木ともあ  
まゝ植渡し、四季遊觀の人多くつとへり。江戸志

○上 同時ノ頃。曆 日暮の淨光寺武藏國北豐郡日暮里の下に日蓮宗妙隆寺といふ在り。

是の鎌倉小町少隆寺の持にて有る由、こゝに俳諧の宗匠秀億といふ人思付て、  
先ッ此庭へ木あと植て、始て築山出來けるに、夥しく群集せり。是より隣寺二軒  
も假山を作り、今の遊觀の勝景と成れり。故に太神宮の後に假山開基秀億とい  
ふ石碑あり。其子東女といふか、皐月平砂の世話にて今年寛政卯八月秀億と  
改名し、古秀億十三回をとむろひけるよし。  
一、日くらしつき山を作る、俳士秀億か思ひ付也。

—— 雜糅

—— よし原春秋二度の景物

〔参考〕 妙隆寺ヲ始トシテ日暮里三兩寺、文化前後、都人ノ遊觀所タリシ狀況、  
左ノ諸書ニ之ヲ見ル可シ。

修性院、青雲寺の南隣、蓮慶山と號、日蓮宗身延の末也。妙隆寺、修性院南隣、日蓮  
山と號、日蓮宗也。山上ニ神明社あり。修性院妙隆院とも、東ニ山をうろ、庭つ  
くりよ々れのとて、四時の遊觀此人へは、中にも修性院園景よし、地を新堀

といふより音をあり日暮里と書るの、いつの比り妙隆寺の僧此を先し事  
也とぞ

—— 三食一覽

一、同處日暮里村。西の下通り妙了院、日蓮の、西の表門を入れて北の台に登りて往  
還へ通拔よ。此側の三四ヶ寺ミなかくの如し。境内の右側は、竹本政太夫等  
が墓ある寺也。古より日ぐらしの庭と稱するもの、此兩三ヶ寺の林泉也。則  
ち低きま居て高き築山を眺望は、山を元より天然として、樹木の蒞込、怪岩の  
作意又面しろく、妙了院の座敷よりなごむる處一しやさり。爰に一株のさく  
らありて、枝七八間に垂茂し、花尤もやらしく、立春より六十日目頃を最中と  
は。されば、春を彼岸前後より、都鄙のもろ人、陽氣にさそひ、花に浮き、上野よ  
り來きるあり。又根津の社乃花見より此林泉に宴をむらくもあり。或は道灌  
台より飛鳥の山に浮るゝもあり。出茶屋はとあるに、幾つとなく青簾ま  
席を分ち、酔て歌ふあり、詩を賦し歌を吟じ、又ハ兒童のくるひそむえて芝山  
を亘る有、追ふあり、走るもありて、又一興さ。此山腹は過し寛政八丙辰年南  
畝大人筆を染て桑揚菴はふり光がざれ歌を刻をり。嗚呼今もむかし桑揚菴  
も、駒込四軒寺町なる瑞泰寺中の土となりし事を、一世の秀歌ぞ碑にとゞは



きり。

ほととぎに自由自在にみきく里の酒屋へ三里とう酒屋へ貳里

此峽路を屈曲して山上より登臨をまじ、西の方を家々を打越多、千駄木田畑をさる澤等の耕地を遠望するも又面白し。イむ右の方の大神宮の宮ありて、左右は夷大黒のふとつををえ置ク。且此あさり此茶屋く、よ自然薯の田樂浅名代とをまじど、賞をべきものもあらざ。豆腐堅く、味噌麁悪しして、ふとつながら喰ふをうらげ。

一、同所修勝院日蓮と、妙了院の北に隣る。此林泉の妙了院より遙の後年み出来せしりど、風景の模様樹石の作意、一際巧なまじ、近年の此庭は此を集ひ遊びて、隣寺の寂まざるが如し。此南の方山は半腹み、木彫乃布袋禪師の像ををえさり。大さ九尺むり、容貌の笑さる様、胸より腹の肥大なる様子能刻めり。左のいへ今は繼手もあま大み損じあり。日ぐらしの布袋といふは是なり。又山の正面は南畝大人の詠を刻して碑を營めり。

いとづらに過る月日も面白し、花見てむりくらされぬ世と

此外俳匠狂歌よみ音曲家の徒、思ひく、碑を建置しりど、となくたし

をまじ省く。されば兩寺ともは春より中夏の頃までの、逍遙をる可なり。又もまじの頃の日のちまじしを託の土地さり。但し高きより果しなき東南の風色を見えらし、四季折く、絶品の眺望の、當寺乃東淨光寺の僧房み過るはあらし。世俗ミな雪見でらとよぶもむべなり。是より道灌臺へ八町ありとぞ。

——遊歴雜記〇文化十二年。

附記、一  
後樂園白雲木

〔附記、一〕 後樂園白雲木 水戸紀年良公宗翰<sup>〇</sup>徳時代ニ、

今年<sup>〇</sup>寶曆 白雲木ト云樹、後樂園中ノ瀧上ニ生ス。此樹只日光山ニアルノミ。

世子降誕、人以テ祥瑞トス。

附記、二  
醒心亭

〔附記、二〕 醒心亭

何レノ年ノ作ナルヲ知ラズ、又何人ノ亭ナルヤヲ詳ニセズ。以テ駿河臺西ノ朝景暮色ヲ想フ可ケレバ、姑ク茲ニ掲出ス。

醒心亭八咏亭在<sup>二</sup>東都駿台西<sup>一</sup>

一橋暮雨

門譙臨暮色。小雨過輕塵。金鞍黃油傘。莫是上直人。



飯田晴嵐

朝望飯顆山。嵐光橫紫翠。總入詩人腸。錦繡滿天地。

秩父夕照

三十三觀音。一一具慈眼。西山慧日輝。遍照碑磬串。

目白春樹

東風吹遠樹。蒨萼入虛櫺。縱令嗣宗見。雙眸鎮日青。

紅葉山月

烏啼月落山。烏棲山吐月。何地無秋光。惟欠此雲窟。

本願寺鐘

華鐘本不槲。宛在肉林中。豬頭與鳩子。何處著腥風。

品川帆影

落日青林杪。千颿遠影明。鶴鶴摩檣去。煙波無限情。

士峯雲彩

玉人玉芙蓉。對照可怡悅。能使玲瓏窻。長含千秋雪。

——蛻巖先生文集 才○梁田邦。泰。右衛門。

〔附記二〕

深川景勝

岡山池田氏儒員井上通照○嘉勝。蘭臺。深川ノ景勝ヲ數ヘテ深川詞有リ。

深川詞八首

永代橋

彩虹春雨散。素練晚潮開。極目南天際。大帆千里來。

靈巖寺

人間殊不遠。清梵落千家。春風桃李樹。幾處作天花。

牡蠣市

蘆花明月夜。扁舟學鷗夷。五湖秋色遠。何處載西施。

洲崎隄

洲前雙翡翠。隄下兩鴛鴦。時見紅妝婦。風吹裙帶長。

釣魚磯

磯頭暮雲高。蒹葭含宿雨。獨見釣魚人。閑坐在寒渚。

仙臺岸

仙臺岸下流。仙臺三千舶。春草斷人腸。不知歲年易。



誰人弔湘娥。瑤瑟夜聲起。看來月如沙。春雁度碧水。

繫舟垂楊下。祠邊看花過。直到烟水岸。只是菱歌多。

——蘭臺先生遺詩

新幡隨院營造

寶曆三年癸酉四〇紀元二。僧了碩〇禮。新幡隨院ヲ谷中三崎〇市内二

營造ス。士庶助工シ、參詣者群集ス。〇續府内備考。曳尾

新幡隨院營造事蹟

新幡隨院營造 下尾久村法受寺ヲ移シテ谷中三崎ニ營造セル也。曳尾菴隨筆、武

江年表等四年ニ繫クルハ、竣成ノ日ヲ指ス者歟。

普賢山新幡隨院法住寺

谷中三崎〇中

起立之儀者、寶曆三亥〇酉年、當寺開山了碩義、下谷幡隨院任職中、有德院様〇德宗。惇信院様〇德川。御歸依被爲遊、時々登城被仰付、御加持護符等差上候處、上州新田大光院に轉任順次相成、左候得、遠境御用御差支ニ被爲在、格別之思召を以、次座之僧に移轉任職被仰付、了碩儀の御差留ニ相成、於幡隨院、其身一代紫衣被成下、永住被仰付、依之御當地下尾久村法受寺を谷中三崎へ引移、御祈禱所ニ仕度御願申上候處、願之通被仰付。〇中略。〇以上。

谷中の三崎は法住寺といへる寺ありたは立、其頃江戸にいふをさらぬり、近在より簀を立男女あひ共あるしをせし衣服あとき、石砂の類をさふ。是幡隨院の隠居所あり、江戸中の大工うちよりて普請まかゝり、諸家よりの材木石瓦あとおひた、しく寄進ありし。〇非常記。

寺寶

中將姫蓮絲の曼陀羅 當麻寺より納むと云。

天神畫像 元御城ありし物といふ。御紋ちらし錦の表装なり。〇中

野中の井 當寺の庭あり。本堂の脇も井あり。流を通じて尤清水をまひ、年

ゑてさらふことなしと云。〇以上改撰江戸志。

今幡隨院ノ先住鎌倉光明寺へ有移轉ケル琢丈ト云シハ、古幡隨院再來ノ由ニテ、近年世上ニ流布シテ、名僧生キ如來ト人々崇敬スル事、偏ニ如佛在世也。或眩啞聾忽而難病ノ者、十念ヲ授テ立所ニ平癒シ、満足成ト專云觸シケル。安房上總其外近國ノ獵師、佃島ノ魚獵ノ者、シケニテ獵ナキ時ハ、來テ授テ十念、守札ヲ多ク貰テ飯リ、海上ニ札ヲ蒔々獵スレハ、自其日果シテ魚多ク取レルト云フ。是等ノ類ヒニ不限、如何様ノ事ニテモ、幡隨院へ願テ不叶ト云事ナシト、世上一統ニ是



ヲ無信仰云計、中略佛モ元ハ凡夫也、加程貴キ上人モ、所化琢丈ノ昔ハ、火焰玉屋ノ内大和路ト云フ遊女ニハ大キニハマリシト、能知リタル者ノ咄ケリ。此上人鎌倉へ入院シテ後、江戸床布ク、何卒隱居所ヲ御府内ニ拵度謀略ヲ巡ラシテ、谷中三崎へ今ノ法住寺ヲ建立シケルト也。元來此寺地ハ溝口出雲守ノ下屋敷也。此僧自前々溝口家へ懇意ニ出入ケル也。古事記

續府内備考

同曆。寶曆四戌年三崎之幡隨意院立、土持千本突參詣群集。——曳尾菴隨筆

六月寶曆四略幡隨意院の了碩和尚、谷中三崎ニ普賢山法住寺開創。其地ハ溝口侯より御寄附、江戸中の男女、地形の地を運び、日な夕むして成就す。世俗新幡隨意院といふ。

——武江年表

修性院造庭

六年丙子二寶曆〇紀元

十月、新堀修性院

北武藏國

ノ庭園成ル。

〇江戶志

紀開。武江年表。新編武藏風土記稿。

修性院造庭

左ノ如シ。

修性院〇上天正元年郡武藏國中田中村ニ草創アリシヲ、寛文三年當所へ移轉スト云〇中當寺モ寶曆年中ヨリ庭前ニ假山等ヲ造リテ、都人遊觀ノ地トナ

——新編武藏風土記稿

レリ。

當寺の庭、寶曆六丙子年より造りそむ。巖石をたゝみあけ、奇木花草時をあらそひ、橋をかけこゝし、坂を登りて其詠め盡すへからず。四時の莊觀人跡たゆる事あし。

——江戶志〇江戶紀

十月〇寶曆谷中修性院の庭今年より開き、每春遊觀の所となる。發起高田氏、庭作、左の句を鐫す。不二つく、あひの木からしひらく庭。

——武江年表

〔附記、一〕 淺草寺植櫻

府下三十間堀材木商和泉屋某、淺草寺ニ櫻樹ヲ栽ウ。太申櫻記ニ、

太申櫻記

太申乎、太申乎、當世風流皆歸乎太申、而太申名聞於世矣。太申豪爽高朗、任氣喜俠。搢紳先生莫不稱太申才幹勇力焉。太申素善詞賦。然謂叢爾小技、壯夫不爲也。太申濶達皆此類也。其客造余廬而曰、子獨不聞太申風流乎。某昵於太申有年矣。然猶未徧窺其風流也。某等所觀蓋特小者耳。太申遊樂之時、侍兒歌舞、優倡爲戲而前、雜坐宴飲、娛自歡心之物備矣。北里佳麗、風流尤甚。太申爲之翩翩未厭也。好事者圖其形而傳之、又作詞曲行於世。太申風流愈益聞於世焉。太申愛花樹、蓋其

附紀、一、淺草寺植櫻



所愛及此其風流之餘也。花樹盛開而發造化之精者爲太申邪。非邪吾太東神明之域。陰陽和調。雨露照育。造化之精。封殖花樹。專美於斯矣。其溫柔間雅之狀。亦惟君子所居。而地氣敦厚。使之然也。太申花下之遊。張幄設坐。絃歌如沸。風流極矣。其樹以千數。郁郁斐斐焉。諸佳麗。人與花成羣。媚於其富厚也。此乃太申春時風流。其它富麗散財巨萬。無冬無夏。俾晝作夜。亦何限然而世人言風流。必言太申。言太申必言花樹。未嘗不慕太申也。諸寺觀奉祠者。莫不皆栽花樹而祝太申。蕃祉老壽焉。優倡爲戲。必承太申之意。爲其衣帶以象之。此亦太申之優孟。固其所也。織染丹漆之工。爲太申成。則少年競慕而服焉。乃今其花樹且尙如此。太申名聞於世。而人莫之禦也。余聞之喟然歎曰。客爲太申盛推。一時風流。而顯其侈靡。又焉足道邪。唯是太申花樹。足以觀其風流之遠也。王子猷之竹。陶弘景之松。姑毋論已。抑亦丞相梅花。中郎杜蘅。此其所愛。則後人皆思之。愈遠而愈深也。數百載下。太申花樹。其能及此乎。太申東都人。名信熊。字桓夫。姓數內氏。太申其別號也。蘭臺井通熙撰。

深川 親和篆

太申櫻記出於蘭臺現芝作其文奇矣。龍湖篆法。素以名家。備盡其妙。足稱二絕。太申風流。由是蓋彰。所謂三絕。余乃爲太申跋。以示觀者云。

寶曆庚辰(十年)之冬

朝散大夫小松頼壽識

ト見ユル是也。所謂太申ハ、相傳ヘテ、

○上 材木屋居宅忘る。八町堀。邊か、名も覺えず。表徳太申といふ者有。尤豪家と見えたり。太申の名を弘めたき餘りに、太申染といふを作る。太申太申如此の染也。

□○曲亭 馬琴考。太申は三十間堀の材木屋にて、和泉や甚助といひしものなるよし聞傳ふ。こゝにあるさるゝ如く、もつは虚名を好て、夥の金を遣ひ失ひしものありとぞ。嘗聞太申ひそかに烏石に千字文を書せて、太申書と落款し、是を墨本に板行して賣せけり。その法帖今稀に見る事あり。又俳諧の樂評をせしに、五點の所へ五匁銀、十點の所へ十匁銀、十五點へは金一分、かきぬきへは小判一面を張付て、景物とせし事ありといふ。又淺草の境内へあまたの櫻を植て、太申櫻と唱へ、芝居へ頼て太申櫻といふ淨るりを作らせ、又道中の雲介に金をあたへて、お江戸のナ太申さまは、さくらがおすきといふうたを唄はせしことあり。又醫者に月々扶持米を送り、門の表札に太申内何某と書くれよといへば、此醫師心得て太申内の三字を篆字にかき、たのが名斗楷書にて書て出せしといふ。此事虚實しらず。此外茅場町の藥師などへ額を奉納せし事もあり。如此虚名を求めしが、名の爲に産を破り



て家類退すしかれども今太申を知るもの希なり。彼龜戸の鬼の禪も、近頃修復の時、禪を虎の皮にしかえたれば、誰かは太申が寄進としるべき。おのれ此春敵討仇名物數寄といふ三冊もの、草双紙を作れり。是ひそかに太申が事を擬したり。出版の時、一覽をたまへかし。

巴やの豊里に馴染て、此形を豊里に着せ、一枚繪にも豊里が此染の小袖を着たる所をかゝせて出す頃か。芝居にては中村傳九郎が衣裳に、是を縫(カ)作りて與ふ。其後龜井戸の天神に參詣せしに、爺と姥との人形のうしろに、鬼二つ立たる、昔より今以あり。江戸砂子 其鬼の禪虎の皮の場を太申染にしたり。是も寄進なるべし。又松平西福寺の本堂のうちに、高く掛たる太鼓あり。その撥面に太申の二字を漆にて書たり。寄進せし上にて、常に木のれの名が撥にて打るゝもおかしと笑ひき。

△石川七 太申龜戸天神に連歌堂を造立し、高辻中納言額を給ふ事、江戸砂子にみるたり。太申著す所の江島大草紙、太申夜話等の二書は刊本にして今もたまゝの見たる事はべり。

大申染もはや世上に廣まりたる頃ならんと、ゆかしくて吳服やに行き、太申

染を見せよといふに、吳服やの手代知らず、いかなる形ぞと問ふ。太申が様の形なりとて書て見するに、手代夫は傳九郎染と申すなりといひしとなん。望の如くいかにも相應に名は弘まりたれど、馬鹿ものとして、人の物笑ひの爲に弘まりたれば、かゝるむだ書にも書事にはなりぬ。とても馨しき名は取難ければ、臭き名にても、金なくては取がたき事なり。——後はむかし物語ト爲ス者。さるは理艸ハ、此舉ヲ寶曆八年トス。太申櫻記に同十年ノ跋文有レバ、或ハ其頃ナル可キ歟。

太申櫻

名家略傳云、和泉屋甚助、一號を太申といゑり。江戸三十間堀ニ住して、材木を以て産業として富豪之商賈なり。云々。淺艸寺境内ニ櫻樹數多植て、太申櫻と名つゝ、井通濙之文を請ひ、碑を建さる。其頃太申櫻と云淨るりを作らせ、戲場狂言よとぞと云。又道中なる雲助といふ人足ニ物とらせて、お江戸太申きほま櫻りお好と云唄をうたませしこせもあまといへと記す。又むぬをら名聞の高あらんことを好むの癖ありて、荷田春滿の門ニ入て云々といゑるよりて、おろ元祿中の人なりと思ひ、又同書ニ、太申の名を弘免さき余り



ニ太申染と云を作り出し、かねてなじみ通へる吉原の遊女巴屋の豊里とい  
 へるニ着せ、錦繪といふを乃ニその染を着さるま、此姿をゑあ、せ、又も戲  
 場よて中村傳九郎の衣裳も與へ、あぐても太申染もあまねく世ニ弘まり  
 くならんとたをひて、呉服屋の見世へ行て太申染やあると尋るニ、その家の  
 手代太申染といふ名をくらひ、いあなる形そといへるよ、太申いふ、太印あぐ  
 のことた紋なるよ、いふよ、そも世よ傳九郎染といふ物とぞ答けるとりや  
 といへるよよりて、此傳九郎ニ元祿三年十月廿五日終りある元祖中村傳九  
 郎なるべく思ひ、ことよ傳九郎紋を圍此ことくあまも、こまあを思ひこあ  
 くて、あ此淺草寺ニ櫻を植くを元祿頃のことよや思ひて、上の條ニ初度の櫻  
 と記くありしり、たそそるあやまちありき。歌舞伎年代記寶曆八年森  
 田座之條ニ、赤澤源氏山よ曾我之下人太申、實もうきみ十内中村助五郎と見  
 じ、評ニ此太申と云も、三十間堀之材木屋なり、世上へ名を弘えんと芝居よ太  
 申櫻と云大名題を出し、太申染とて出せ、世の人傳九郎染と云と見えあり。な  
 得同書同十一年の條ニ、中村座三月三日より間ノ山女敵討ニ、太申坊長作傳  
 九郎なども見えたり。年代記及戲場之記ニよりて思ふよ、此中村傳九郎も六

代目勘三郎次男ニあ、享保十八年勝十郎とて娘形よて出、延享二年元祖傳九  
 郎三十三回忌よ二代目傳九郎と改、安永四年より八代目勘三郎となり、同六  
 年十一月廿五日行年五十五よる終る、俳名舞鶴と見えたり。又助五郎と上よ  
 みえくも、元祖助五郎魚樂也。又明和九年元祖澤村訥子り十七回忌ニ、門人喜  
 長りものく、集冊中、

樋の口を出て、ありるき蛙あ歌

太 申

と見えたり。又明和壬辰再板萩の露ニ、龜戸連歌屋を造る頃、詩や歌のこ、ろ  
 廣きやけふの月太申、なと見え、再考江戸砂子ニ、太申連歌座敷造立之志ニめ  
 て、高辻中納言菅原家長卿演雅の二字を玉ふ乃記、あを略。按るニ其記も、明  
 和改元六月吉日と見え、上の訥子り追善集も明和九年、萩の露ニ明和壬辰と  
 見え、さきむ、同年よくてともよ安永元年也。あ、さきも高辻黃門より額をあま  
 まりしも、右の集ともより九年前也。思ふよ此人安永のそゑ天明のそゑ頃  
 よ終りくよや。名家略傳よ、墳墓よ淺草西福寺ニあると聞えくとの記くあ  
 きも、今その歿年を知るよしなし。さて安永のすゑよ終りく人とせも、荷田春  
 滿の門ニ入くといへる説もいふあ。さてまゝ文化十年の發兌曲亭翁の戲



作夢想兵衛胡蝶物語云、けしあふぬ名を求むるは太申也云々といふ文あり、  
 よりて思ふは、此人の奇傳寛政より文化の頃まで人口を減りて、世の話柄  
 ありと見えぬ。此人自著の書、及松崎觀海集に寄太申之一絶も、美成の  
 記にくもしければ略す。そと、此人淺草寺地に櫻樹を植し、此太申櫻  
 と云狂言の年なきは、享保の後なることも知るべし。つきてなほ思ひやるは、  
 當時いま享保之花のこゝありしを、その枯失せしところへ  
 へ植足して、太申櫻とも號しならん。あるは寛政の末に至りても、享保の花  
 とを跡ありともありと云む、予を見る文化の頃及て、此建あり  
 と聞えし碑きへその所在を聞きぬ。おもふは此人紀の國屋文左衛門  
 の全盛をうらやみ、あどより思ひおこし、こぎくれのいつあるを、さぞ  
 のことも實に出して名聞をおこし、虚名をうらんと此を傳りせしもの  
 あり、その家産をやぶるは、此も紀文に同じく、その臭名だもあつても聞  
 えを、あつたりと云む。さて又此花の初中後をつまびらるは、こゝは正を、二  
 度の花も享保十八年の三月に咲初め、三度目の花も廿六年の後、寶曆八年の  
 三月よききそめ、五度目の花も一百年の後、今年安政四年三月始るさき初る

ものありたり。淺草の花の初中後やうやくこまよて明らかく知ることを得  
 たり。ちりうせし花の跡を、つ後、またさぬ花をおもひて、餘寒の夕ふをむ  
 とりぬとさるるさきある翁と人も、とんとたへも、又むとをを。○百四  
 略。上。千もとの花、享保十八年吉原よりうへ、今此一もとのミ、此これり。淺草寺  
 淡島地とあり。則上ノ卷百四十三の條々よいへるところの花也。おもふに  
 寛政七年の頃あり、此千もとの中、一本残りありと云む。此花おそく  
 の寶曆八年は太申が植さるものかもあるへかたず。

附記  
大根畑

〔附記〕 大根畑

本郷新町屋の事、宮様圃といふて、丸太柵よて人家の無く、皆圃よて、野菜物を  
 造れり。中にも崩し物を第一よ造りて、須田町連雀町へ出し賣れる事よて、  
 りし。寶曆六七年頃、不殘町屋と成、始者非人豆藏或の上るり芝居杯よて人を  
 集、其後怪しき茶や杯數十間出來たり。近頃退轉し、淋敷町家と交したり。

——塵塚談十〇文化  
一年。

大根畑

上野の御屋鋪よて、以前の大根を多く作り出けるよりの名なり。その後寶曆



の頃より茶店ちと多く成て、ゆやしき娼家ちとありしを、せれも今の絶たり。

——江戸紀聞

兩國遊觀場

是頃、兩國橋附近○市内已ニ遊觀場ト爲り、橋下ノ舟遊ト共ニ賑

フ○紫のゆかり。

兩國遊觀場  
事蹟

兩國遊觀場

武江年表享保十九年ノ條、二月廿日○享保十九年。行徳寺谷村の濱、鯨二ツ寄る。○五尋。兩國橋廣場に出して看せ物とす。下有リ。寶曆頃ニ及ビ、已ニ大ニ賑ヘル者ノ如シ。紫のゆかりハ、

此書たれ人のつくれるともくねど、大江戸のはじめより百六十年八代をつかせ給ふよく見え、又大象のわたりしことを、三十年以前にしたしく見しよしをいへるを考れば、寶曆八九年の作なふん。其頃にしてかくばかり大殿のうちのさまをくはしくしりて筆のすさびにたけたるは誰かし人なふん、よはひ四十に過たりともあれば、明阿彌阿佛○山岡のかけるにやあふん。さるは此入道のかゝれたる伊香保の御遊の文體にも、口つきの似かよひたる所みゆればなりけり。

文化十五年三月

清水濱臣

ト稱セラレタル書也。云フ、

○上 略。ふた國の橋といふあたりは、常に人おほくあつまりて、にきはひ外にとなれば、しりかけてやすらうすのこたつ物きし近くならへて、ゆなどたくはへいとなむ、さまくの見物あるを、そのすかたいかめしうゑかき、戸口に高くかけて、こゝかしこに名のりはやす。道のかたはらにつらなるあき人、小弓いるには、あるはいやしきともからも耳とゝむるさうし讀ときかするも多し。川つらとにひろく、夕風なみのうへを吹わたりて、袖にいる名残すゝしければ、われもくゝとよりくる人々、橋にも道にもみちふたかりて、手ならず扇は花の散かふやうにもみゆ。家つくりたる舟ともの、いとおほきやかなる、吉野河一ゑひすなと名たゝる、數しらすうかへて、うちにはあやしう染なしたる衣のかろけなるを、えりひろうくつろけて、酒くみかはず。はからぬさかなもとむとて、こゆるきのいそきゆく小舟もあり、あやの袖風になひき、うすものゝたもとふなはたにかゝりて、いとなつかしきさましたるに、猶いと竹のしらへのえんにやさしく、空行雲もとゝまるへく、ふちなるいをもうかひてきゝぬへきは、かいりうわうのいつきむすめならんとおもはるゝに、かたへにはだみたる聲しては、か

霸都時代ノ遊園

三二三



らすうたひの、しるも、ず、しけなくきこゆれば、又をかし。くるれば舟とも  
とうろかけわさしくかにはいちくらのとも、ひ所せうか、けて、晝よりも猶  
あか、りければ、晴わさる月の貌も中々はつかしけ也。いとさ、やかなる舟の  
なりはゐのきはのやうなるか、さすがにたけくいさましけにこきゆく。あめる  
かさ忍ひやかに打きて乗たるも有。ゑひたるさまよてあふのきふしてかへる  
も有。友のりして何なふんいたくす、ろきて、ものかたりしつ、大きな舟と  
ものとよめきあへるを、見おこせもせていそぎ行は、いかなるかたにこ、ろひ  
くつなてなはありけん、いと心にくし。花火といふものあまたの舟ともにと  
もさせてもてきようす。げにいかにかくみなしたるものにか、ともす火に柳櫻  
のすがたをとめ、藤山吹のおもかけをうつして、ず、きをみなへしのけしきま  
て、さながら咲そめしこ、ちするを、鳥の子の如くなる火のぬけいつるおとし  
て、みつよつふたつ空にあかりたる、あはやとおとろきみるに、はら、とくと  
けて、打むれたる螢のちりかふかことくなれば、舟もくかもこそりてほむる聲  
のうち、又まろき火のさといて、雲井になかれて、星の飛かとおやまたる、  
も、さらにめおとろかれぬ。花かさ花車など、其かたちうつくしう見るかうちに、

兩國

上段 歛形蕙齋圖スル所、子爵松平定晴所藏ニ係ル。下段ハ巨川圖ノ内ナリ。本

圖ハ天明版鶴岡蘆水ノ墨水兩岸圖ニ倣ヒ、文政年間續卷トシテ一橋家抱繪

師玩長ノ描ク所、東京池田金太郎ノ所藏也。

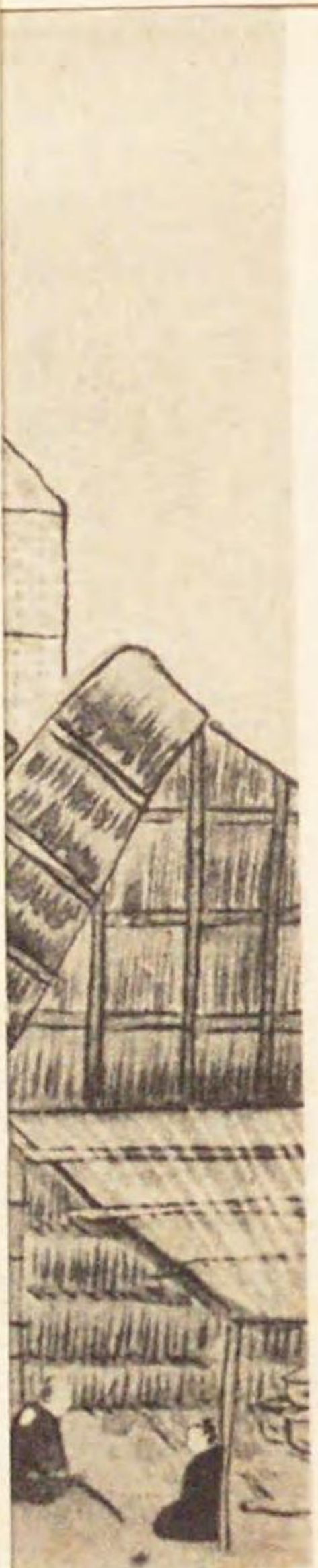


らすうたひの、しるも、ず、しけなくきこゆれば、又をかし。くるれば舟ともの  
とうろかけわさし、くかにはいちくらのともくひ所せうか、けて、晝よりも猶  
あか、りければ、晴わさる月の貌も中々はつかしけ也。いとさ、やかなる舟の  
なりはるのきはのやうなるか、さすがにたけくいさましけにこきゆく。あめる  
かさ忍ひやかに打きて乗たるも有。忍ひたるさまよてあふのきふしてかへる  
も有。友のりして何なぐんいたくす、ろきて、ものかたりしつ、大きなる舟と  
ものともめきあへるを、見おこせもせていそぎ行は、いかなるかたにこ、ろひ  
くつなてなはありけん、いと心にくし。花火といふものあまたの舟ともにと  
もさせてもてきようす。げにいかにかくみなしたるものにか、ともす火に柳櫻  
のすがたをとめ、藤山吹のおもかけをうつして、す、きをみなへしのけしきま  
て、さながら咲そめしこ、ちするを、鳥の子の如くなる火のぬけいつるおとし  
て、みつよつふたつ空にあかりたる、あはやとおとろきみるに、はらくとくた  
けて、打むれたる螢のちりかふかことくなれば、舟もくかもこそりてほむる聲  
のうち、又まろき火のさといて、雲井になかれて、星の飛かとおやまたる、  
も、さらにめおとろかれぬ。花かさ花車など、其かたちうつくしう見るかうちに、

## 兩國

上段 歛形蕙齋圖スル所、子爵松平定晴所藏ニ係ル。下段ハ巨川圖ノ内ナリ。本  
圖ハ天明版鶴岡蘆水ノ墨水兩岸圖ニ倣ヒ、文政年間續卷トシテ一橋家抱繪  
師玩長ノ描ク所、東京池田金太郎ノ所藏也。





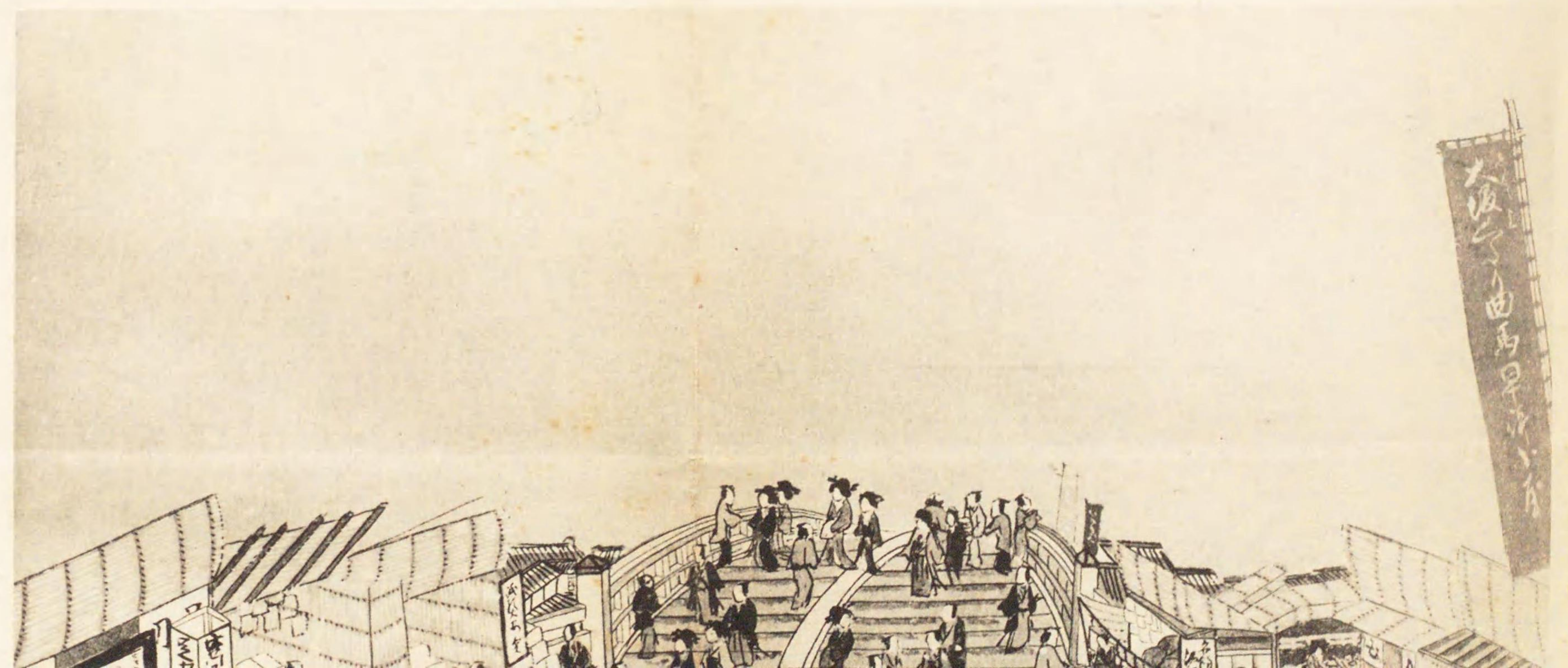
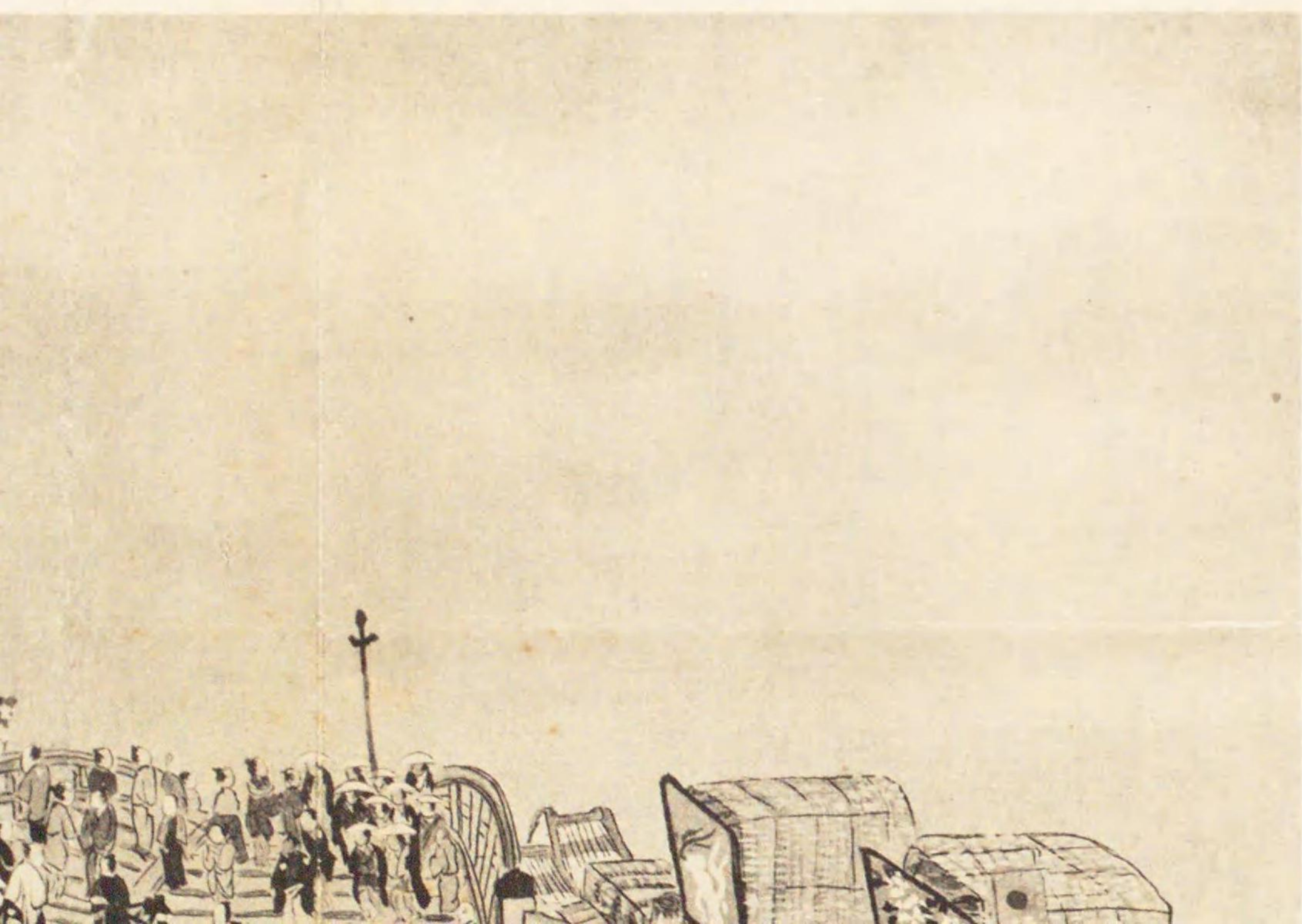
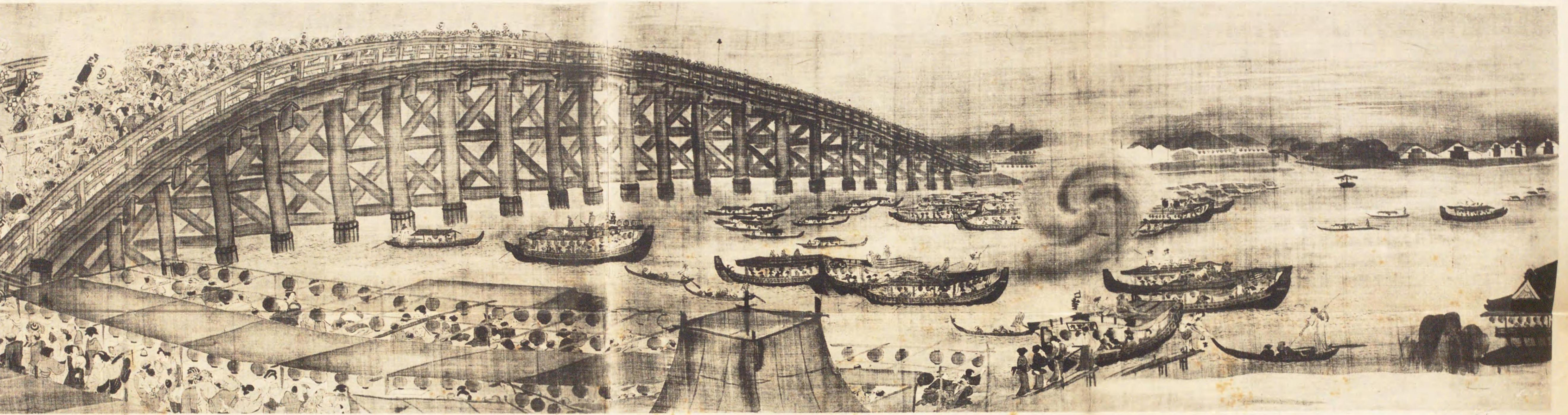
神皇正統記、遊、河東京新田金太郎、河藤忠朝。

圖ハ天智天皇御園蓋木、墨本兩草圖ニ對シテ、文選平間藤原イシマ、一節定辨。

土御原源實朝ニ對シテ、河子御孫平家御酒齋ニ對シテ、河子御孫ハ耳田圖ノ内ニテ、本

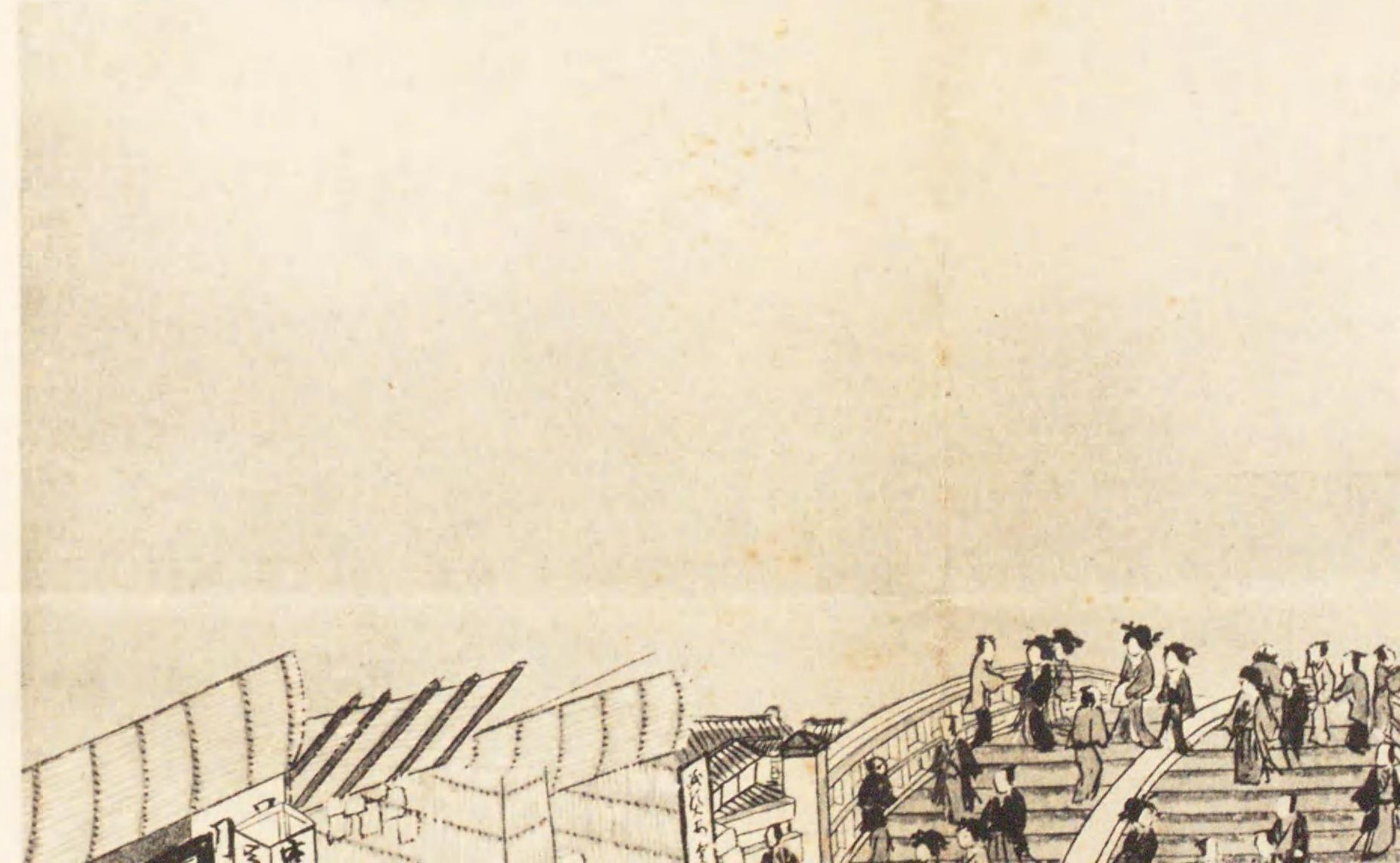
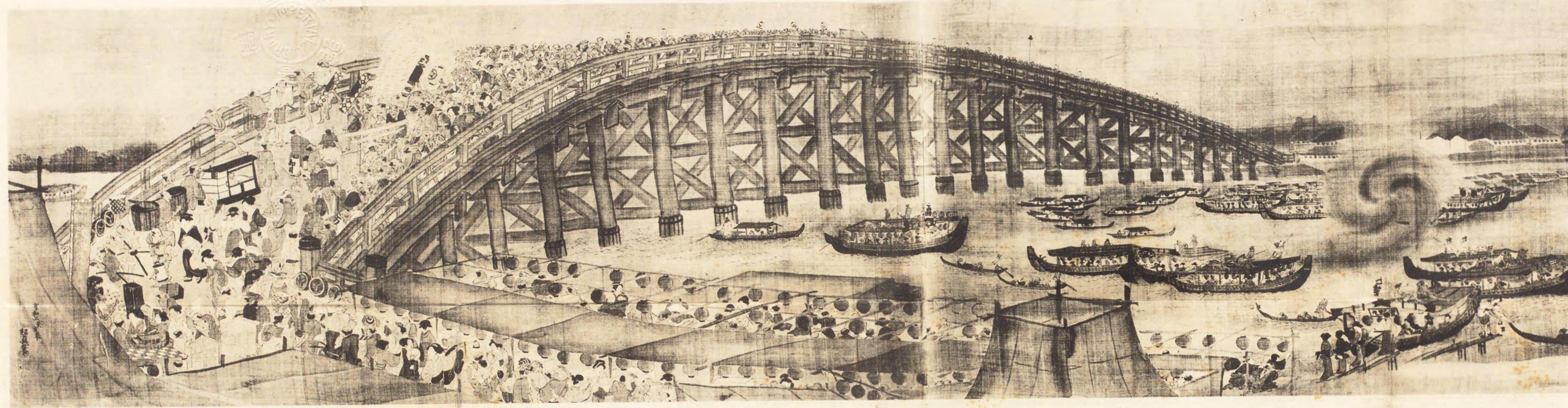
兩圖



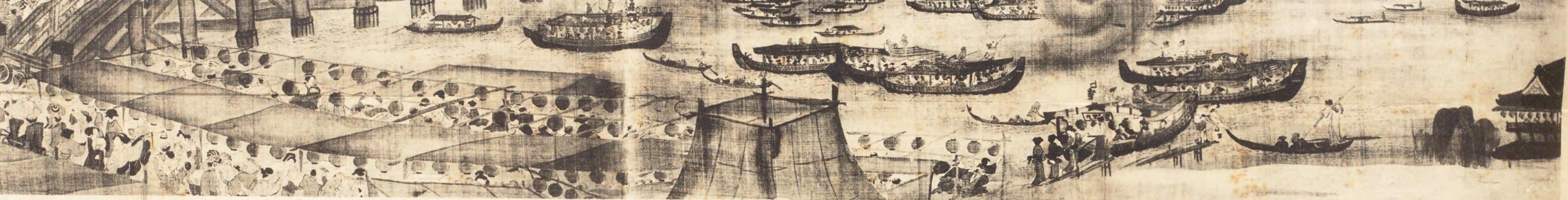


て、あつたつたつ空にあかりたるあははやと  
て、あつたつたつ空にあかりたるあははやと  
て、あつたつたつ空にあかりたるあははやと

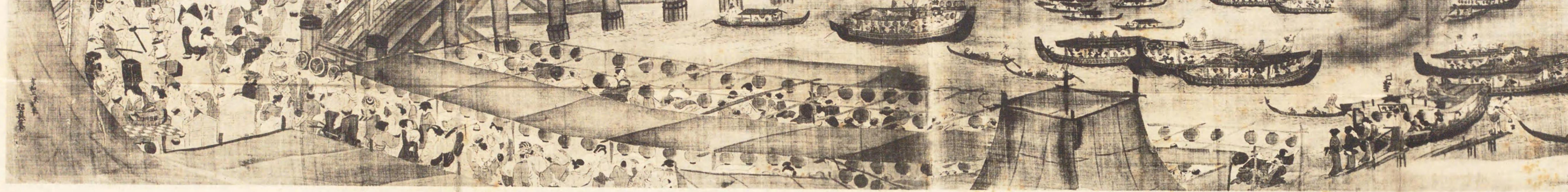














ちゝもゝにかはれば、とくとりたて、えもいはれず、宮戸川にさしのほせて今戸といふ橋のかたはらにつなく舟も有。金龍山裾にて、くかの家ゐるみなふな長のすめるなりけり。

武江年表其他ニハ、左ノ如ク見ユ。

寶曆中西村重長か繪本江戸みやけ圖中兩國涼の圖に、水茶屋葭簀の屋根なし見世毎に、行燈を置て、御涼所と記せり。

——武江年表

明和元年申年○中略。○武江年表明和二年八月ノ條ニ繋ク。

芝浦を壹丈餘の魚上る。後兩國ミセ物芝居ヨ出ル。色白く鱗無之、鮫の類也。名をマンボウといふ。唐鳥いろく兩國よてミセ物ヨ出を事モやる。

——曳尾菴隨筆

〔参考〕 大川

秋も猶あつき夕べ、人々と共に角田川の下つかたの大川てふあたり舟こぎわたりけるに、いと涼しかりければ、

からるとる大川のべの涼しさの初雁がねもきくばかりなる

——賀茂翁家集



六月○寶曆。俳優萩野八重桐、船ヲ乗中洲ニ遊、醉興の餘り、蜺を取らんとて川へ下り立、深ニへ落入溺死す。平賀鳩溪根なし草といへる草紙をつくり、其事をのふ。

——武江年表

兩國廣小路ガ、是頃少ナカラズ葭簧張ノ小屋竝ビ、諸種ノ見世物茶店休憩所揚弓場軍書講釋等有リテ、人出多ク、橋下ノ舟遊ト共ニ、繁昌シタルノ狀ヲ推ス可シ。

〔附記〕 辻講釋

是ヨリ先淺草寺境ニ出演シタル者有ルコト、既記ノ如ク、兩國廣小路亦之有リ。殊ニ是頃淺草寺境内ニハ、志道軒ナル者在リテ世ニ知ラル。志道軒名ハ榮山、俗稱ヲ深井新藏ト曰フ、或ハ云フ、初名政七、京師ノ東梅津ノ人ト。明和二年三月七日ヲ以テ歿シ、淺草寺内金剛院ニ葬ル。武江年表ニハ、三月七日○明和講釋師深井志道軒終名榮山、號無一堂と云、もとは知足院の僧也。街艶郎は惑溺して財を失ひ、其間、戲言を交へ、聞人をして絶倒せしむ。一坐は僧と女あれバ、必識る事甚し。日々多くの錢を得るといへども、をべて酒にうへて、翌日の貯へをなさせ、在世の日自ら肖像を畫して梓上せ、戲言を書つけて人ノ與ふ。元なし草と云草紙一冊を著せ。今年八十四歳ニして終れり。淺草寺中金剛院ニ葬ル。一男一女あり。男を三之介といふ。諱名を志道軒新三之助と稱し、なるとなん。志道軒の歌とて聞しハ、思う事あるもうれしき我身さへ心の大は此世はほあひきて辭世東よりぬつと生れと月日さへ西へとんく我もせんト見ユ。

今の都いてきてより、ひなのくま〜まで庭つ鳥門もる犬聲たゆるひまもなく、まして此あたり○淺草はみやこのうちにもならふかたなく、國々にもたとしへなき所となりて、春の花秋のもみちの時もわかす、袖をつゝね跡をむすびて、たゝこの堂にあゆみをはこふ。おほやけにもむかしよりたふとませ給ひて、とにひろくあらためたてさせたまひ、あまたの堂をかまへて、よろつのかさりはなやかににければ、とくはふへきかたなくそなはれり。世々の御いのり所となりて、あたりの地はみなその料にあてゝ給へり。誠にありかたき佛の御光をはなち、あまねくすくはせ給ふ御ちかひのこゝにと、まりたるにや、かく富さかゆる所となりければ、いと心ほそけなるいとなみするも、朝夕のけふりたちつゝきて、ものさひしき人のありとしも見えず。きようして酒くむへきまうけたる家とも軒ば高くつくりならへ、おしやすむるかりのやとりもこゝかしこにたちつゝきて、ねかひをかくる人の日とにまうてくるもすくなからず。されはさま〜の見ものもて集り、或はあやしきわさをしてめおとろゝす多し。志道のをきなと云者あり。堂のかたはら大きな松の木のもとにいて、いさゝかなるあしのかりゑをもふけ、ふ



るき世の軍物語などしていとなむ。年はやそちあまりいと老さらほへるか、かしらのかさりもなし。つらつきしわみ、まゆの末さかりて、はなのあたりうちひらみ、はさへなければくち打すけみて、こしもいたうか、まりぬ。あばらなるゆかのうへにちひさきつくゑをすゑ、さうしひらきてたけかりしつはものゝふるまひなといひつゝくるに、みつからいきほひまうにのゝしり、ほこたづさへつるぎぬきたるさま、めをいからし口をそらし、さしもいさましうかたりなす。又君達の道行さま、さきおふものゝいかめしうひちをはりあしたかうあけてゆきかふ人に、聲あらゝけあたりをばうふけはひ、下人とも塵ふみたてゝほこりにふるまふおもゝちなとまねふ。さるか中にいとようとりくはへて男をうなのけさうのさま、まつしりめに見おこせて、身をかひひそめつのあしつくりて、なさけめくやうたい、なれむつるゝなどは袂をひきもすそをふみねたけにさゝやき、心いられてひきまつへるをとかうときはなさんとみしろきあへるに、ふと人音してにけまとふさま、さなからいひたつるもいとをかし。しのひとをあからさまにいひたてゝ、そのかたちまねふには、めをふたき口をひらき、或はふしあるはあふき、ひさもてゆか

をうこかし、もろ手さしのへて、夢こゝちのみたれたるけしきをなす。おきあかりてみゝのもとまでゑみまけて、大とこのひしりのおこなひすまして、あなたふとくもてかしつゝめるも、わらはへのうつくしけなるには心ひかれ、めしまつはし、ふけりたのしむとなど、あらゆる人の心にこめたる深きすちまで、まかゝしうまとかなるかしらふりたて、したとにきそひていひもてはやすに、見きく人たへすわらふを、いかにかまへてかあまのさかほこめくをかしけなるものとうてゝ、つくゑ打なぐし、はうしとるに、女などは見るにたえでかほうちあかめてにけさるを、やかてふかき道のをしへにうつし、又いくさひきうる人のおほとかなるはかりとのすちにひきいれていひつゝくるとは、あまたのみゝをかたふけさるとなし。しはすの十日餘り七日八日は、此あたり皆市のはとなして、年のまうけのしなゝなるものうりかふとしどのれいにまかせて、みやこもひなもこゝに來りてもとむれば、あつまる人々ひるよるをわかす、たゝはげしき雨のふるやうにて、とよめく聲のおとろゝしう聞えわさる。大路あれとちおしあちたして、いとみ行かふあれ、あやまちては人の肩にもものほるへくおほゆ。——紫のゆかり



略。上。其比志道軒として辻講釋をして世を渡る坊主有けり。古今の名人よて、人物も早老人よて、惣て垢のぬけたる奇妙者よて、人をへちまとも思はず、記録物を講釋するに、初め少しの内實の事をいふて、夫よりおとけ立とこる口をいひ、様々よ狂して人を笑はする事希代の者之。俗説は長崎よて十八年禪學をしたりしといへり。八九寸の木よて男根を拵へ、夫を手よ持て拍子を取、トントント。面白きわる口をどけを云。皆頤を解て聞居る之。あかも豆藏如きの口さとをかかしをいふ。よあらに、下卑す上品の事計をいふ。毎日淺草へ出たり。觀音堂の口き。日々聞者群集したり。常人なごさる證據よの、あかる業よて世をわさるもの、誰に限る聞人の多きを歡ふ物成よ、志道軒の女と出家か嫌ひよて、婦人出家の内來りて聞人よ交り居ると、段々と當口をいひ出して、後の居た、まれぬ様よ成故、彼か辻よの婦人坊主の來り、至極面白きもの之。大名貴人よ招れて客の饗應あよ講釋するよ、辻よて仕る通狂談を可申由望けれ、其通笑はせたりといへり。晩年よは己か像を板行よして賣たりしか、諸人我もくくと求て見る程の事之。其跡よ隨龍軒とて是も流行たり。上手よて座講釋あよに所々へ招かれたり。是の狂講よのあつす實講之。

——賤小手卷

深井志道軒と云講釋師、淺草觀音堂脇三社權現の宮前に霞簀をまつとひ、數十年出で糊口せし之と、無一筆とて半紙六七枚計り自分述作の書を立寄し人に賣たり。一奇物よして小兒か手遊よもかれか机よか、り講釋の形を近頃迄賣けり。この者か講釋の終日をかしく取しまりもなき事の之をあやべりけり。いかにの譯やら僧を嫌ひ、出家か目の前よ踟躕すれの、雜言をいひて譏りけれ共、イむ出家よ一人もとかむる者もあかりし之。元來禪僧よて達識ありと評判せり。明和二乙酉三月七日死。號の無一堂。墓の觀音境内金剛院よ在。すへて高名もの、跡の繼もの有るもの成よ、一世よて絶たり。同時に滋野瑞龍軒といふ舌耕あり。此者の講釋の、今世の如く天正慶長の間の軍記等を講しけり。其頃志道軒瑞龍軒とて兩人とも高名よてありし。瑞龍軒の甚藏といふ忤あり、父の跡を繼て舌耕せり。

——塵塚談

〔參考〕水戸紀年二、

十一月二十三日、○寶曆四年。淺草志道軒ヲ琴畫亭ニ召テヒソカニ其雜話ヲ聞セラル。金子酒食ヲ賜フ。水戸ハ世々其君賢明ナリ、家老ハ代々愚者ナリナト云シトソ。



飛鳥山花見

十二年壬午二〇寶曆二〇紀元二四二二年是頃、飛鳥山北武藏國北豐島郡。花見賑ヒ、上野下〇市内。

ハ遊觀者ヲ減ズト云フ。常盤八景。

飛鳥山花見  
事蹟

飛鳥山花見 銀杏榮常盤八景二〇寶曆十二、二年板。

享保の比までは、花見は上野にきわまり、外に名所またあらしと人々たもひしに、元文のはじめ、飛鳥山にけをされ、いまの上野へ行人の、紙子ばをりのふる入道、かねもたぬはやゝぬ醫しやか、世をしのぶふかあま笠のふじやの伊左衛門から釣りをとるやうなわろのま、まん山いとさびしく、櫻もうき世かこちがほあり。王子の流はたとあし川をいふに、石たゝみのしがらま、せきくるなまとうくと、音のあるはいつわりか。飛鳥山とはいへと、萬人の群集まばゆけに、鳥も飛ぬか山櫻の下、よしず茶屋かこひ、うなぎくといふは、あたら櫻をなまくさき、なせにけふりとなしたまふ。此春しだしの、かひらけなげ、ふもとへふうふう風ままかせるは、光りん千鳥の書きこなひ、へたのなげたは、いたづらにおちでくたけて物思ひ。略。下

ト見ユレバ、上野ハ是頃俗客ノ雜沓ヲ減ジタル者歟。賀茂翁家集ニハ、左ノ如ク有リ。

飛鳥山

東京子爵松平定晴所藏

歙形蕙齋紹眞ノ圖スル所ニ係ル。紹眞ハ浮世繪類考ニ、

北尾重美重政。〇北尾門弟。〇中略。俗稱三次郎居初小網町。後住吉町裏。後お玉か池に住す。。姓歙形氏。號杉翠。後號蕙齋紹眞ト改。

ト見ユ。文政七年三月二十二日歿ス。年六十四。法號彩淡蕙齋居士。淺草永住町密藏院ニ葬ル。



飛鳥山花見

十二年壬午二〇寶曆二〇紀元二四二二年是頃、飛鳥山北〇武藏國花見賑ヒ、上野下〇市内

ハ遊觀者ヲ減ズト云フ。〇銀杏榮常盤八景

飛鳥山花見 銀杏榮常盤八景〇寶曆十二、二年板

享保の比までは、花見は上野にきわまり、外に名所またあらしと人々たもひしに、元文のはじめ、飛鳥山にけをされ、いまの上野へ行人の紙子ばをりのふる入道、かねもたぬはやうぬ醫しやか、世をしのぶふかあま笠のふじやの伊左衛門から釣りをとるやうなわろのま、まん山いとさびしく、櫻もうき世かこちがほあり。王子の流はたとあし川をいふに、石たゝみのしがらま、せきくるなまとうくと、音のあるはいつわりか。飛鳥山とはいへと、萬人の群集まばゆけに、鳥も飛ぬか山櫻の下、よしす茶屋かこひ、うなぎといふは、あたら櫻をなまくさき、なせにけふりとなしたまふ。此春しだしの、かゝらけなげ、ふもとへふうふう風ままかせるは、光りん千鳥の書きこなひ、へたのなげたは、いたづらにおちでくたけて物思ひ。〇下略

ト見ユレバ、上野ハ是頃俗客ノ雜沓ヲ減ジタル者歟、賀茂翁家集ニハ、左ノ如ク有リ。

飛鳥山

東京子爵松平定晴所藏

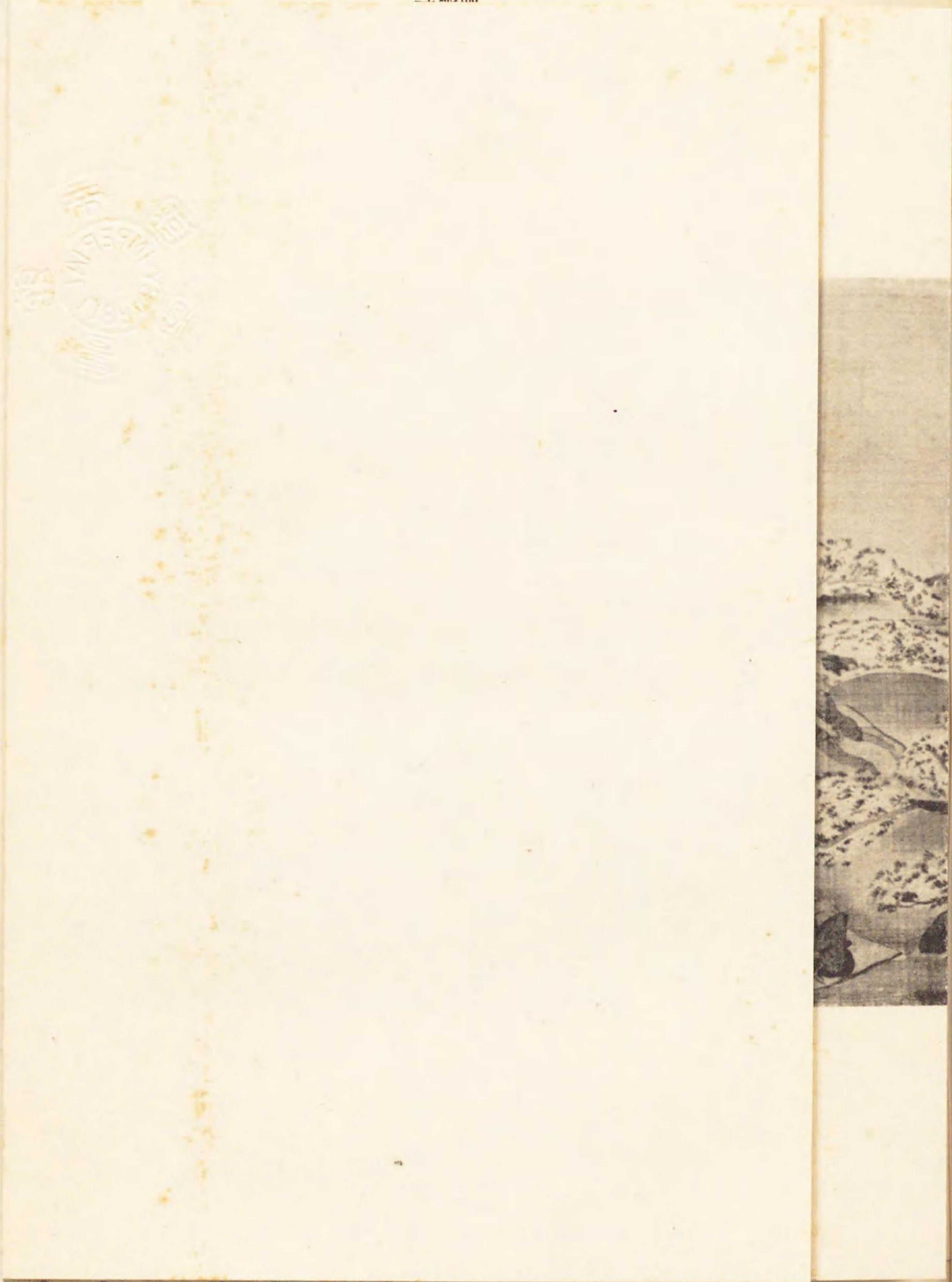
歙形蕙齋紹眞ノ圖スル所ニ係ル。紹眞ハ浮世繪類考ニ、

北尾重美重政〇北尾門弟。〇中略俗稱三次郎居初小網町。後住吉町裏。後お玉が池に住す。姓歙形氏。號杉翠。後號蕙齋紹眞ト改。

ト見ユ。文政七年三月二十二日歿ス。年六十四。法號彩淡蕙齋居士。淺草永住町密藏院ニ葬ル。



霸都時代ノ遊園



三三三

石多シ。大社中。衣。和果た。なり。文。

花芳

密藏洞ニ奉ス。

イ貝ニ文。文。文。平。三。日。二。十。二。日。與。又。平。六。十。四。日。起。始。尋。常。庶。民。士。女。草。木。皆。而。

總庶民拜見ノ式。

非。風。重。美。門。前。○。中。○。非。風。○。俗。稱。三。夫。波。川。皇。親。王。之。御。所。也。昔。昔。吉。吉。也。昔。昔。推。機。紙。刀。鏡。鉢。等。皆。兼。紙。庶。民。拜。見。ノ。圖。又。又。祖。ニ。拜。ス。諸。君。ハ。皆。世。傳。傳。承。ニ。

狹島山

東京千代田平安御前





くたいて物思ひ  
ト見ユレテ上野一是頃俗客ノ雑沓ヲ減シタル者歟賀茂翁家集ニハ左ノ如ク有







事類

源島山七

源島山七

源島山七

かきくもとが備るひ  
でくさもうは門人し

上野の花ざかりに、

かげろふのもゆる春日の山櫻あるかなきかの風にかをれり

長門守の東の比叡の花見に福壽院に遊びける日、題をさぐりて風静花芳

といふことを、よべ雨ふりて今朝はれたり。

よるの雨の露だにちらす櫻花にほふばかりのけふの春かせ

上野にて、

ちる花の都のふじやいかならむ東の比叡のゆきところそふれ

〔附記、一〕 根岸圓光寺藤花

○寶曆年 根岸圓光寺庭中藤の花盛の頃、貴賤遊觀多し。

○文化年 根岸圓光寺庭中、長廿七間横四尺餘の藤棚あり。一株の名樹なり。文

化の頃迄の盛の頃都下の騷人こゝに集ひしか、惜むへし文政始の頃枯果た

り。 武江年表

金杉村 島武藏國北豐郡○中略。

圓光寺 禪宗京都妙心寺末、寶鏡山ト號ス。世ニ藤寺ト云ヘリ。○中略。○辨天社中

略 藤樹社ノ側ニアリ。棚上ニ延蔓スルコト廿七間ニ及フ。花時觀遊ノ者多シ。

霸都時代ノ遊園

附記、一  
根岸圓光寺藤花



鏡松古木ナリ其幹直立シ根上□尺計上ニ圓鏡ヲ偃タル如ク一蓋ヲナシテ  
枝葉繁茂セリ日光門主隨宜樂院准后當寺ノ山號ニヨリテ名付給フ其賜へ  
ル歌ニイク千歳サカヘン寺ノ鏡松曇ラヌソラノ影ヲウツシテ。

——新編武藏風土記稿

一、同所岸○根 圓光寺の藤と立夏を十四五日頃をよしとに近年又内外此庭  
一圓と萩の花を植込て若干あれと立秋より十二三日比を最中とをり依て  
當寺を逍遙し終て下谷正東寺此萩ももちなど巡見をる人も少なからに左  
のいえ片鄙の避地なればあらざる人も多し。九、十年。——遊歷雜記

〔附記〕二 四國八十八箇所寫巡拜

十日○三 廿一日迄四國八十八ヶ所の寫弘法大師巡拜。八十四番三田明王院  
餘あり、一二の順より、その順路を記す。左の如し。

- 一、番、二本榎正覺院。八十五番、三田臺町泉福院。八十一番、三田南中寺町眞藏院。
- 二、番、八十四番、三田寺町明王院。七十七番、同長延寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三、番、大聖院。六十九番、同寶生院。八十番、同金剛院。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 十九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 二十九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 三十九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 四十九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 五十九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 六十九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 七十九、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十一、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十二、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十三、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十四、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十五、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十六、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十七、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。
- 八十八、番、靈岸島白鳥寺。八十一番、同普門寺。六十七番、赤羽いふり圓明寺。

附記、四國八十八箇所寫巡拜

附記、將軍家重ノ花卉翫

〔附記〕三 將軍家重ノ花卉愛翫

霸都時代ノ遊園

大進夜話といへる草紙に、江戸八十八ヶ所の寶曆の頃淺間山の上人本願に  
よつて移す所と云り。——東都歳事記



御多病にのみわたらせ給ふよしうけたまはりて、延享四年三月少老堀田加賀守正陳が淺草別荘の赤芳櫻の花咲しかば、折枝を瓶にさし獻りしに、めでさせたまふ餘り、おなしくはその木を根こじて御庭にうつさせたまはんとの御旨なり。よて御側の用人大岡出雲守忠光うけたまはり、御庭の監倉地仁左衛門といふに令して見せしめられしに、この櫻いかにも老樹なれば、もし移栽るときは、生活せむこと覺束なしと申ける。さらば蘗苗なりとも參らすべしとて、御庭に培養せられける。よて加賀守より春毎に折枝にして奉るをめでさせ給ひしとなり。

百花を御愛ありとありて、さま／＼の盆花進らせて、御心をなぐさめ奉るものおほかりき。ある日なにかし髹漆に蒔繪したる器に、花を植て獻りけり。人々もことさら御氣色にかなふべしと思ひ居しに、安に違ひて御けしきそんじ、凡草木はその花こそめでつべけれ、うつはものをかざることはあるまじきなり。ことに奢侈をひらくもとなるべしとて、ありぞけたまへり。

寶曆のころ御庭のかたにつかふまつりし下吏のちかきころまでながらへしか物語せしは、凡延享寶曆の間は、御庭のこといとすくなく、朝毎に御庭

に入て灑掃するのみ、さらに樹石を移しかへらるゝこともなし、たまさかに花木を植らるゝか、または花の枝など手折ことありて御庭に參れば、いつも小納戸の人めして、菓子などたまひ、奥深く坐して御覽じおはしましけるまでとぞ。吾ともがらの小吏は、いかにもつかふまつりよきときにて、御庭にさへ出れば、たゞ有がたき事とのみおもひ居たりと落涙してかたりぬ。

——惇信院殿御實紀附録

矢口新田社  
繁榮

矢口新田社  
繁榮事蹟

是頃矢口村新田社

○武藏國荏原郡ニ詣ル者多シ。  
○曳尾菴隨筆。武江年表。

矢口新田社繁榮

ハ、

明和元年○中略

六郷新田大明神はやる。

——曳尾菴隨筆

義興の矢

矢口義興の宮近邊の茶店にて賣ル矢之王子在郷の百性與兵衛ト云者、矢口よ親類有りて此所ニ來りて茶店を出ス。王子稻荷の紙細工の狐より思ひ付て、此矢を拵へ賣始し之。今專矢口の名物トなれり。近頃寶曆年中よりの事なりし。



寶曆末より矢口新田社に參詣多し社地は矢を賣始詣人求て守とす。

——武江年表

社頭ノ狀況ハ、僧大淨ノ遊歷雜記ニ左ノ如ク見ユ。

一、武州荏原郡矢口村新田大明神、池上村本門寺門前町より西南の方凡拾六町あり。その路すばら池上村を出てきてより、左右深田のミよして、渺茫と目よさるるものかく、後をかえり見まば、本門寺の山と獨立して木立尤繁茂し、風色又一品なり。斯て新田明神へいぬるよ、別當の右の方に僧房を構えて、義興寺眞言とあけく。社内差る廣きよの非ざまど、雜樹生繁りて、何となく凄きが如し。社は正面よありて、僅よ四間。こまむらし關東に英雄と鬼神と呼まざりし左中將源の義興の靈を祭まじ。當社へ志願ある徒の、紙よて羽根を矧るる矢、貳筋を神前に備え、拜禮し、終りて又件の矢を申たろして、家よに持返りつゝ、守とをり。是むらし新田の家よ傳來を、し水羽兵羽の貳筋此矢よ謂まよや。門前よの五七軒茶店及び酒食をむさく家ありて、大體の家並よ奉納矢を賣まじ。

一、社の後よ竹及び雜樹の繁茂せる一壘の塚あり。是むらし義興の骸を埋まし墳墓ありとかん。方僅よ三間むらりもあるべし。木の枝竹あど立枯よなりて、塚

上よ横よのりあるといへども、一切取片付る事ありがごとく、若枯枝の類ひ塚上に手を入るるもの、の崇りを得ると巷談して、參詣乃徒墳上よ手を觸しめば、故よ雜樹の中尾籠よして汚穢といひなごらいつゝも、凄く見ゆ。或の又氏よ長谷川を名乗る人の參詣成難し。押て社内に入まば、極て怪我をし、或の鼻血眩暈の煩ひありとぞ。こまむらし江戸遠江守等々謀計よ陥り、當處矢口のわよし此水底よ没せしげ、長谷川黨よその同姓乃余類なまば、亡靈よ叶のぬと見えたり。且明神の御影といふもの、別當所より需よ應じて縁起も出せり。御影の義興此甲冑よて馬よ跨り弓箭を持する像あり。その顔色尤威ありて猛し。例祭の正月十日と十月十日と兩度より。就中神無月の諸社よ神樂もあき折ららよ、當社の片鄙あごよ賑よしく、大體の東武の人男女そまよよ本門寺の會式より爰よいより、歸路よの虎の御門外京極家乃金毘羅の祭禮よ行人もありたり。扱又門前よの茶店六七軒建なごびて酒食をむさき、夜よ需に應じ旅泊もあさしむとかん。予先年聞し事あり、義興をよじめ十六騎の近臣わよし舟の謀略よ陥りし、の武上の國境ある矢口のわよしあるよし、慥よ聞り。何を實あごん。我新田の大光院等よいほよ至らば、その處を睨と見定めざまば、是非を論じがごとく、又強